

琉球文学教材を取り入れた
新しい古典学習カリキュラムの研究開発
— 『おもろさうし』教材化の試み—

大阪府池田市立細河中学校 山際 博

平成26（2014）年3月

目次

はじめに	1
------	---

<研究課題の設定>

<研究の経過>

第1部 『おもろさうし』概説

I 入門『おもろさうし』の世界

—波照間永吉教授「『おもろさうし』の世界」講義から—

[I] 『おもろさうし』への誘い

1. 沖縄の人々に親しまれているオモロという言葉	4	
2. 『おもろさうし』の語源	5	
3. 『おもろさうし』の成立	6	
4. 『おもろさうし』の歌数	7	
5. 『おもろさうし』の構成	7	
(1) 地方オモロ	(2) ゑさオモロ	(3) ゑとオモロ
(4) こねりおもろ	(5) あずびおもろ	(6) 名人おもろ
(7) 神女おもろ	(8) 公事おもろ	
6. 『おもろさうし』の現場	13	
7. オモロの歌形	15	

[II] 『おもろさうし』を読む

1. 『おもろさうし』を学ぶ意義	17
2. 『おもろさうし』に描かれた世界—ヲナリ神と王—	17
(1) ヲナリ信仰とは	
(2) ヲナリ神信仰を謡ったオモロ	
(3) 王権とヲナリ神	
(4) ヲナリ神を謡った琉歌	
3. 『おもろさうし』に描かれた世界—神話とオモロ—	24
(1) 『中山世鑑』による開闢神話	
(2) 『おもろさうし』に謡われた開闢神話	
4. 『おもろさうし』に描かれた世界—航海と御獄—	29
(1) 御獄	

(2) 神に守護される航海	
(3) 交易国家琉球とオモロ	
5. 『おもろさうし』に描かれた世界—英雄・グスク・社会—	3 4
(1) 伊祖の戦思いのオモロ（英祖王とされる）	
(2) 謝名思いのオモロ（察度王とされる）	
(3) 勝連の阿麻和利	
① 讃えられる土地と英雄 ② オモロに讃えられる勝連	
6. オモロに謡われた古琉球社会	4 3
(1) 地域社会間の交流	
(2) 政治的中心と地域社会の関係	
7. 『おもろさうし』とことば	4 6
(1) 日本語と琉球語	
① 3母音 ② 二重母音を避ける	
③ 口蓋音化現象 ④ 語形の変化	
⑤ 日本古語の残存	
(2) オモロ語の特徴	
① 母音 ② 子音	
(3) 地名に見る『おもろさうし』の表記	
① 北谷 ② 勢理客・瀬利覚 ③ 保栄茂	
④ 波平 ⑤ 天願 ⑥ 喜友名	

[Ⅲ]まとめ—神と人を結ぶ『おもろさうし』—

1. 祭祀国家琉球の神歌	5 2
(1) 儀礼の場で神の意志を伝えるオモロ	
(2) 儀礼の場以外でも力を発揮するオモロ	
2. 『おもろさうし』—その後と未来—	5 6

第2部 『おもろさうし』カリキュラム構想

I 『おもろさうし』教材論

[1] 『おもろさうし』を学ぶ意義

1. 沖縄の中学生にとっての『おもろさうし』	5 9
2. 『おもろさうし』教材化の歩み	6 0
3. 池田市の中学生が『おもろさうし』を学ぶ意義	6 2

[2] 『おもろさうし』教材化の基準

1. 教材化の基準	63
2. ダイナミックな自然表現	64
3. 土地と英雄の讃歌	67
4. 祈りとしての海の文芸	69

Ⅱ 『おもろさうし』カリキュラム化に向けた試み

[1] 「ゑげ 上がる三日月や」の教材研究と試験授業

1. 教材研究	71
(1) 本文と語釈	
(2) 先行研究による解釈	
(3) 学習のための解釈	
2. 試験授業の実際	77
(1) 授業の重点	
(2) 第1時：「はてな」による想像読み	
①有田式「はてな」による想像読みトレーニング	
②「はてな」による第1次読解	
③『おもろさうし』の説明	
④おもろのいついての「はてな」発表	
⑤わからない言葉の確認	
(3) 第2時：オモロの内容理解と絵の作成	
①オモロの構成の確認	
②第1段階の読みA：前半部分〈夕方の西空〉のイメージ	
③第1段階の読みB：後半部分〈明け方の東空〉のイメージ	
④第2段階の読み：対比〈夕方と明け方〉	
⑤第3段階の読み：絵で深めるイメージ	
(4) 振り返り	
①「はてな」の有効性	
②3段階の読みの意義	
③オモロの情調：ゑげに迫れたか	
④沖縄の歌謡としてオモロが読めたか：解釈の妥当性	
(5) 『おもろさうし』単元学習プラン	

[2] まとめ：『おもろさうし』学習カリキュラム素案

1. オモロの選択	90
2. まとめ：『おもろさうし』カリキュラム素案	90

おわりに	94
参考資料 「天に鳴響む大主」の教材研究	95
引用・参考文献	99

はじめに

<研究課題の設定>

今回の学習指導要領改訂で、国語科に伝統的な言語文化に関する事項が新たに導入され、古典教材が小学校低学年から豊富に配列されることとなった。さらに、中学 3 年では、古典の一節を取り入れながら文章を作成できる力の育成も目標設定されている。これは国際社会を生きる子どもたちにとって、自己確立の基礎となる自国の文化への深い認識を育てるための卓見である。

しかし、そこで取り上げられている古典文学教材は、ミヤコ中心のものであり、前近代社会で流通したヤマト言葉の文学作品を指している。たとえば、万葉集、古今集、平家物語、枕草子、徒然草、奥の細道等がそれである。これらの作品選択からは、日本列島に存在する二つの大きな言語による古典が欠落していることは容易に気づかされる。すなわち、（日本語と根を一にする）沖縄語と（日本語とは系統が異なる）アイヌ語による古典である。この事実は、子どもたちが日本列島に積み上げられてきた古典文学や伝統文化を偏って認識してしまうことにつながりかねない。

沖縄とアイヌの古典文学を従来の古典文学教材に加えることで、初めて日本の伝統文化をトータルで認識することができる。このことが、今後の国際社会に生きる日本の子どもたちの日本伝統文化への正しく豊かな認識を育てることにつながると考えている。

そのために、本研究では沖縄古典文学（以下、琉球文学教材）を古典学習カリキュラムへ取り入れることについての諸問題について検討し、日本列島全体をカバーする古典文学カリキュラム開発の基礎作業を行うことを目的とする。

<研究の経過>

当初は、琉球文学の中核である『おもろさうし』と琉歌を中心に教材研究をおこない、従来から実践されている万葉・古今・新古今などの詩歌カリキュラムのすり合わせをし、新しい古典学習カリキュラムを作成することを研究の目標にした。しかし、本研究のために放送大学面接授業で波照間永吉・沖縄県立芸術大学教授による「『おもろさうし』の世界」を受講した結果、半年余りの教材研究で、『おもろさうし』や琉歌を授業化することの無謀さに気付かされ、次のように研究内容を変更し、基礎的な研究を行うことにした。

○教材研究を『おもろさうし』に焦点化する

○『おもろさうし』の入門的概説を作成する。

：波照間永吉教授<『おもろさうし』の世界>受講ノートの作成

○『おもろさうし』の教材としての意義を検討する。

：池田市の中学生在が『おもろさうし』を学習することの意義についての考察

○『おもろさうし』教材研究とカリキュラム素案を作成する。

：オモロの教材研究と試験授業の実施及びそれをもとにしたカリキュラム素案の作成

第1部

『おもしろさうし』概説

I 入門『おもろさうし』の世界

—波照間永吉教授「『おもろさうし』の世界」講義から—

日本の南西に広がる沖縄諸島にはかつて琉球王国が存在し、日本語と根を一つにする琉球語を言語として、独自の歴史と文化を育んできた。琉球王国が誕生したのは1492年、日本本土（以下、本研究ではヤマト）の室町時代のことであるが、沖縄諸島ではそれ以前より豊饒な南島文化が花開き、さまざまな文学作品が創作され、伝承されてきた。その中でも最も有名なものが『おもろさうし』全22巻（1554首）である。

『おもろさうし』とは、琉球王国誕生以前の12世紀ごろから沖縄各地で伝承されてきたオモロという歌謡を琉球王府が編纂したもので、その名の由来は「オモロを集めた草紙＝冊子」である。オモロの多くは、祭祀の場で謡われた歌謡であるが、『おもろさうし』自体がどのような意図で編纂されたのかはまだ解明されていない。その内容は、琉球王府の祭祀や沖縄開闢神話に関するものから沖縄各地で活躍した英雄や戦争を謡ったもの、海洋国家琉球の最大プロジェクトともいえる航海の守護を祈ったもの、また自然の情景を雄大に謡ったものまで多岐にわたる。

沖縄では、『おもろさうし』を学ぶことは「自己の父祖の魂に出会うことであり、ひいては自己の再発見につながる事柄」（平山1986b）だとし、小中高でさまざまな授業実践が行われてきた。沖縄の小学校国語の共同研究者である村上（2011）は「『おもろ』を読み味わうことによって、沖縄の古の人びとの世界観・自然観・願いなどにふれることができ、日頃、自然の神秘を意識することがないままで生きている現代の私たちの世界観・自然観をも揺るがされる」と『おもろさうし』の教材的価値を高く評価し、沖縄での『おもろさうし』の先進的な授業実践について報告している。

沖縄研究の先駆者である伊波普猷は「『おもろさうし』は沖縄の万葉集である」と評したが、これまでヤマトの小中学生がオモロを学ぶ機会はほとんどなかった（平成24（2012）年に教育出版の国語教科書にオモロ一首が収録された）。これは、学習指導要領や教科書会社の編集方針の課題によるものであろうが、私たちヤマトの国語教師が沖縄の言葉や文学に余りに無関心であったことも否定できない事実であろう。

そこで第1部では、これまでオモロに触れたことのない私たちが『おもろさうし』の概要と具体的な歌の内容を知ることができるように『おもろさうし』の入門的な概説をおこなった。この概説のもとになったものは波照間永吉・沖縄県立芸術大学教授による「『おもろさうし』の世界」という授業である。この授業は、平成25（2013）年6月8日（土）・9日（日）に放送大学沖縄学習センター（琉球大学内）で開講されたものである。

波照間教授の授業をもとに当日の学習内容を整理したのがこの概説である。整理にあたっては、講義での配布テキストに加え、『おもろさうし』関連書籍を参照したため、帰阪後、書籍を通して学んだ内容を付け加えている。しかし、この概説のほとんど全ては、波照間

教授の二日間の講義内容がもとになっている。

今回、この概説を本研究に掲載するにあたって、波照間教授の許可をいただくことができました。記して深く感謝いたします。なお、この概説の内容に、不正確さや誤りがあれば、すべてその責任は筆者にあります。

<波照間永吉教授の紹介>

波照間永吉教授は、1950年沖縄県石垣市生まれ。琉球大学法文学部入学後、仲宗根政善教授と出会い、『おもろさうし』の研究を開始。仲宗根教授は、戦前、沖縄師範女子部教授で、ひめゆり学徒隊の引率教官でもあった言語学者。『沖縄今帰仁方言辞典』で学士院賞恩賜賞を受賞。今も続く「おもろ研究会」は長く仲宗根教授宅で行われていた。卒業後、当時、琉球大学には大学院がなかったため、法政大学大学院に進み、外間守善教授のもとで研究を進めた。外間教授のもとでたいへん役立ったことは『定本おもろさうし』『南島歌謡大成』（角川書店）などの琉球文学の基礎資料の編集に携わり、実際に本が出来上がる過程に立ち会ったことだと教授は語る。現在は、文学博士・沖縄県立芸術大学附属研究所教授。著書に『南島祭祀歌謡の研究』（砂子屋書房）、共編著に『定本琉球国由来記』『沖縄古語大辞典』『琉球の歴史と文化「おもろさうし」の世界』（角川書店）等。高校国語副読本『新編 沖縄の文学』の監修者でもある。

[1] 『おもろさうし』への誘い

1. 沖縄の人々に親しまれているオモロという言葉

沖縄には古くからオモロと呼ばれた歌謡が伝わっていました。そのオモロをまとめた冊子が『おもろさうし』という書物です。

オモロという言葉は、沖縄の人には、かなりなじみのある言葉の一つです。泡盛の銘柄に「おもろ」があったり、居酒屋の名前にもなっています。米軍基地が返還された跡に開発された新都心は「おもろまち」という名称になりました。また、次のように自治体のキャッチフレーズにもオモロで使われた言葉が採用されています。

「あけもどろ」のまち 那覇市のキャッチフレーズ

※「あけもどろ」という言葉は、沖縄・奄美諸島に伝わる古代歌謡「おもろさうし」のなかで語られた言葉である。この言葉は、南国の太陽が東の空に昇るとき、一瞬、色あざやかな光がうず巻状をなして織りなしてくる荘厳で雄大な光景をさしたもので、それを天空に輝く大きな花にたとえて、「あけもどろの花」とうたわれたものである。「あけもどろの都市」は、融和と集合の美しいまち、未来への希望に輝く市民生活の理想郷として表現したものである。【那覇市HPより：<http://www.city.naha.okinawa.jp/kakuka/kyouikusoumu/kihonrinen.html>】

「てだこ」のまち 浦添市のキャッチフレーズ

※『てだこ』とは、かつて浦添が琉球の王府として繁栄した時代の英祖（えいそ）王を、太陽の子と敬称したことに由来。
【浦添市観光協会HPより：<http://www.urasoeshikankou.jp/info.html>】

「あけみよ（お）」の町 名護市のキャッチフレーズ

※「あけみよ」は夜明けの美しい静かな入り江の青々とした水の流れ。かなたのニライカナイから人々に豊穡をもたらす流れであり、海の外へと広がり行く水の流れでもあります。人々の幸せを願い可能性に向かって突き進む名護市の進取の精神を表した言葉です。【名護市HPより：<http://www.city.nago.okinawa.jp/>】

このようにオモロで使われた言葉は沖縄の人々に今も親しまれています。では、オモロが集められた『おもろさうし』とは、いったいどのようなものなのでしょうか。

2. おもろさうしの語源

『おもろさうし』とは、今お話したように「オモロを集めた冊子＝さうし」という意味です。オモロとは沖縄に伝わる古い歌謡です。国家の意識が芽生える以前から沖縄の島々、村々では様々な歌謡が謡われてきました。その一つがオモロと呼ばれたものです。そのオモロを首里王府が16世紀から17世紀にかけて国中から集め、冊子にしました。集められたオモロはだいたい12世紀から17世紀初頭に謡われていたものと考えられます。その具体的な内容は、この後、ゆっくり触れることにして、オモロという言葉の語源について最初にお話しします。

現在、オモロの語源については三つの説があります。

一つは、伊波普猷の説で、オモロは古くはオモリといい、語源は神の降りる「お杜（もり）」で謡う歌、つまり神の前で謡う歌だと考えました。

これに対して仲原善忠はオモロ＝「思ひ」説を採りました。現在の南島歌謡にはオモロというジャンルはありませんが、沖縄諸島には古来からウムイというものがあります。このウムイは「思い」が転訛したものと考えられていますが、オモロも「思い」が変化したものと考えます。ただし、この思いは個人の喜怒哀楽ではなく共同体共通の願いや心を神に捧げるものです。たとえば、オモロにある雨乞いの歌謡は個人的な願いではなく、共同体全体の願い＝「思い」であるというわけです。

これを発展させて外間守善は「思い」を内的な思考ではなく、奄美方言のウムリユン＝「おっしゃる」という言葉を参照し、「思い」とは外に対して唱える意味であると解釈を展開しています。

藤井貞和は、これらに対し現在オモロの語源は不明とすべきと述べていますが、これらを検討してみて、他の南島歌謡のジャンル名が「祈る・崇べる・呪う・謡う・聖なる言葉・呼びかけの語などを語源とすること」だと考えると外間説に蓋然性があると考えられます（波照間永吉2007）。

3. おもろさうしの成立

『おもろさうし』の1頁目には「きこゑ大きみがおもろ 首里王府の御さうし 嘉靖十年」とあります。次頁には目録があり、全22巻の目次が書かれてあります。各頁（頁一枚を一丁といいます）の中央には赤印があります。これは鎖印といい、各頁を半分に折ってする割印です。鎖印があるということは首里王府の正式文書であることを意味します。

1頁目の嘉清十年という記述で、1531年に巻1が編纂されていることがわかります。嘉清とは中国の年号で、琉球では中国の年号が元号として使われました。巻2の編纂は、1613年で、第1巻から82年間、編纂が途絶えていたこととなります。巻1には41首、巻2には46首のオモロがあります。そして、巻3以降は、1623年に編纂されて

います。ただし、巻11、14、17、22には編纂年の記載はありませんが、すべて1623年以降に編纂されたと考えられます。

現在のところ、なぜ『おもろさうし』全22巻の編纂に92年もかかったのかという問題に明確な説明ができていません。1巻から2巻までの82年、巻2から巻3までの10年間の空白を説明する首里王府の文書も存在しません。

この問題を伊波普猷は次のように考えました。伊波は、巻1から巻2までの82年間に琉球を揺るがす大きな問題が発生したと考えたのです。『おもろさうし』巻1が編纂された1531年とは、尚清王の時代です。巻1に記載のオモロは、尚清の父、尚真の時代のものです。尚真王は、第一尚氏王統最後の王である尚徳を退け、第二尚氏王統を立ち上げた尚円から3代目の国王で、第二尚氏王統の基盤を盤石にし、琉球王国の繁栄を築いた優れた王でした。つまり巻1は、琉球王国繁栄の時代のオモロ集であったのです。

その後、琉球王国には衝撃的な事件が起こります。1609年の島津氏による侵攻、いわゆる薩摩入りです。この薩摩入りによって、琉球王国は初めて他国の支配を受けることになりました。民族の精神を揺すぶられたこの衝撃的事件に対し、自分たちの民族精神、民族的アイデンティティを確立するために『おもろさうし』巻2が編纂されたと伊波は考えました。その後、巻3以降は、次々と編纂され、1623年には『おもろさうし』全22巻の成立をみています。ただし、先にも述べたように巻11、14、17、22には編纂年の記載はありません。また、巻22の47首に関しては、その内45首は他の巻のオモロと重複しています。これは1623年に他の21巻が編纂されて以降、その中から45首を選んで編纂したと考えられます。

その後、1709年に起こった首里城炎上により『おもろさうし』は焼失してしまいました。そのため、翌1710年に具志川家に伝わる本をもとに『おもろさうし』は急遽再編纂されました。その際に『おもろさうし』は2本が作られ、1本は首里城内に、もう1本は安仁屋家に保管されました。前者を尚家本、後者を安仁屋本と呼びます。安仁屋家については、次節でお話します。また、安仁屋本には語注である言葉聞書が付けられています。

4. 『おもろさうし』の歌数

『おもろさうし』に記載されたオモロは1554首あります（オモロの歌一つひとつを1首と呼びますが、1編という呼び名のほうが適切であるという考え方もあります）。

『おもろさうし』記載の歌は1554首と言いましたが、尚家本系には1553首しかありません。安仁屋本系に1554首の記載があります。安仁屋本系とは、安仁屋家で保管されてきた『おもろさうし』です。安仁屋家とは、神歌（オモロ）主取（ヌシドリ）と呼ばれるオモロを管理する家系です。神歌主取とは首里王府では課長級の役人で、『琉球国由来記』に「王城之公事」と記された「王府の公式行事」でオモロを謡う家柄でした。巻22の「みやおだいりのおもろ」は、神歌主取によって歌われたオモロが集められていま

す。安仁屋家では、自ら歌っていた「おかんせんのおんときおもろ」（尚家本には記載されていないもの）を安仁屋家本に書き加えたため、尚家本より1首多くなっているのです。

5. 『おもろさうし』の構成

『おもろさうし』は、全22巻で構成されていますが、その各巻の表題を分類していくと首里王府が明確な意図をもって『おもろさうし』編纂に当たったことがうかがえます。次のものは、各巻別の表題、歌数、内容、編纂年次、類別の一覧表です。

巻	表題	歌数	内容	年次	類別
1	きこゑ大きみがおもろ首里王府の御さうし	41	第二尚氏の最高神女のおもろ	1531	神女王府
2	中城越来おもろ 首里王府の御さうし	46	中城、越来地方のおもろ	1613	地方
3	きこゑ大きみかなし おもろ御さうし	64	3 2首は巻1と重複	1623	神女王府
4	あおりやゑさすかさのおもろ御さうし	60	聞得大君につぐ二人の高級神女（あおりやゑ・さすかさ）のおもろ	1623	神女王府
5	首里天きやすへあんじおそいがなし 首里おもろの御さうし	79	首里のおもろ	1623	地方王府
6	首里大君せんきみ君がなしもゝとふみあがりきみのつんしのおもろ御さうし	54	4人の高級神女のおもろ	1623	神女王府
7	首里天きやすへあんじおそいがなし はひのおもろ御さうし	48	南部（首里）のおもろ	1623	地方
8	首里天きやすへあんじおそいがなし いろいろのこねりおもろ御双紙	83	こねり即ち舞の手を記入したおもろ名	1623	こねり特殊
9	おもろねやあがりあかいんこがおもろ御双紙	35	人おもろねあがりとあかいんこのおもろ	1623	名人
10	ありきゑとのおもろ御さうし	45	舟の漕行、行進歌	1623	ゑと特殊
11	首里ゑとのおもろ御さうし	96	表題は誤りで、内容は巻21と同じ	不明	地方
12	いろいろのあすびおもろ御さうし	94	神遊び、舞遊びのおもろ		あすび特殊
13	船ゑとのおもろ御さうし	236	舟歌（帆走）のおもろ	1623	ゑと

					特殊
14	いろいろのゑさおもろ御さうし	70	集団舞踊を伴うおもろ	不明	ゑさ 特殊
15	首里天きやすへあんじおそいが なし うらおそいきたたんよ んたむざおもろの御さうし	75	浦添、北谷、読谷山、宜野湾のお もろ	1623	地方
16	勝連具志川おもろの御さうし	48	勝連、具志川、与那城のおもろ	不明	地方
17	恩納より上のおもろ御さうし	74	国頭地方および付近の離島のお もろ	1623	地方
18	首里天きやすへあんじおそいが なし 志ま中おもろ御さうし	32	島尻。玉城付近のおもろ	1623	地方
19	天ちゑねんさしきはなぐすくお もろ御さうし	50	知念、佐敷、玻名城（具志頭）の おもろ	1623	地方
20	こめすおもろの御さうし	63	米須（糸満）地方のおもろ	1623	地方
21	くめの二ま切おもろ御さうし	114	久米島のおもろ	1623	地方
22	みおやたいりおもろ御さうし	47	公事の神歌	不明	公事 王府

※1531年=嘉靖十年 1631年=天啓三年 1623年=天啓三年

この各巻を仲原善忠は、『おもろ新釈』で8つに分類しました。それは

<地方オモロ> 巻2、5、7、11、15、16、17、18、19、20、21

<ゑさオモロ> 巻14

<ゑとオモロ> 巻10、13

<こねりオモロ> 巻9

<あすびオモロ> 巻12

<名人才オモロ> 巻8

<神女オモロ> 巻1、3、4、6

<公事オモロ> 巻22

です。これをのみに外間守善は、後に、新たな分類案を示しました。

<王府オモロ> 首里王府のオモロ：巻1、3、4、5、6、22

<地方オモロ> 首里王府以外の地方のオモロ：巻2、7、11、15、16、17、
18、19、20、21

<特殊オモロ> 歌唱・名人才オモロ、こねりオモロ、ゑとオモロ、あすびオモロ、ゑ
さオモロの巻々

ここでは、仲原の分類にしたがって、各巻を概観してみます。

(1) 地方オモロ

宮古・八重山除く沖縄の島々、村々で謡われたオモロを地域別に分類して各巻に収録したものです。尚真王が、各地の按司を首里に集め、中央集権制をしいた時、各按司の領内で謡われていたオモロを首里王府はその掌中に収めました。謡われている時代は、最も古い英祖王に関するオモロが12世紀ですから、グスク時代（後述）のものでした。

地方オモロには沖縄のほとんどの地方名が入っています。

巻 2	中城・超来地方のオモロ
巻 7	南部（首里）のオモロ
巻 15	浦添・北谷・読谷山・宜野湾・牧志地方のオモロ
巻 16	勝連・具志川・与那城のオモロ
巻 17	国頭地方及び付近の離島のオモロ
巻 18	島尻・玉城地方のオモロ
巻 19	知念・佐敷 は波名城（具志頭）地方のオモロ
巻 20	米須（摩文仁）及び付近のオモロ
巻 21	久米島のオモロ

巻13船廻と（舟歌）のオモロには与論島、鬼界島まで収録されており、『おもろさうし』には沖縄中で歌われたオモロが集められています。しかし、宮古・八重山は対象外になっています。1500年のオヤケアカハチの乱以降、琉球王国の支配下になった宮古・八重山は沖縄本島から250キロ離れており、その間にある宮古海盆の存在が船を航行困難な状態にすることから沖縄本島からとの交流は長く行われていませんでした。もともと宮古・八重山にオモロがなかったかもしれませんが、あったとしても首里王府にとって認識外の地であった宮古・八重山のオモロは採録しなかったと考えられます。ただし、宮古・八重山の人々が歌ったオモロはありませんが、首里王府が宮古・八重山を征服した歌は『おもろさうし』に採録されています。また、宮古・八重山は北方とではなく南方と交流が頻繁にあったと思われ、フィリピンと同じ貝斧を使っていた事実もあります。なお、『琉球国由来記』の八重山編には与那国の記載がなく宮古・八重山にとっては与那国が認識外の地でありました。

後年、喜舎場永珣は、『おもろさうし』の八重山の歌が採用されていないことから自ら八重山の古謡を聞き取り、『八重山の古謡』という歌謡集を著して柳田国男賞を受賞しました。

(2) 廻さオモロ

廻さオモロは、おおよそが14世紀中ごろの沖縄史に登場する英雄的人物の讃歌と事件を謡ったものです。神々と深い結びつきのある祭式で謡われる神女中心のオモロは、自らの実力で生きていこうとする新しい精神の登場で、徐々に衰退していきました。その序章となるのが開明的な按司たちの活躍や事件を謡う廻さおもろの成立でした。

「ゑさ」の意味は不明ですが、この巻には集団舞踊をともなうオモロが集められています。「ゑさ」をエイサーとの関係で考えがちですが、エイサーは本来盆行事に関わるものなので「ゑさ」とは違います。

(3) 船とオモロ (船と)

巻10・13の船とオモロは、航海の歌です。伊波普猷や仲原善忠の時代は、船上で謡うものと解釈されていましたが、現在では、航海の前の祭りの場で謡われたものと考えられています。では、なぜ、航海の前に祭りがあるのかということですが、琉球にとって航海が国家の中枢に位置する最重要プロジェクトであったからです。生産力の高くない島々で形成されていた琉球にとって周辺の国々との交易こそがその生命線であったといっても過言ではありません。だからこそ、国家をあげて航海の成功を祈るための祭りが執行され、その中の主たる予祝行為として船とオモロが歌われたのです。元来、日本には海洋文学があまりありません。古事記、万葉集、土佐日記にわずかにあるのみですが、この巻10・13は航海に関わるオモロで構成されています。琉球にとって、航海がどれほど重要なものであったのかがよくわかる共に、船とオモロは、日本が誇るにたる海洋文学の宝庫といってもよいのではないのでしょうか。

ところで、「船と」とは、イートのことで、労働の時に全員が声を合わせる掛声のことで、また、船とオモロは、労働のための労働歌を意味します。船とオモロとは、航海の労働のための歌ということなのです。

(4) こねりおもろ

こねりは舞踊の所作を意味しています。巻9の35首中27首には言葉聞書が付されていて舞踊の所作が指示されています。たとえば、巻9-48番オモロを見てみましょう。

本文

- 一 きみよし、ぎみの、
きみおそい、ぎみの
まぢら、だ めより

- 又 ももその、やぢよく
ななその、やぢよく

- 又 ももそが、なかに
ななそが、なかに

現代日本語訳

1. 君よし君が(神遊びをします)
君襲い君が(神遊びをします)
(その中に)混じらないで(とびぬけ
美しい人が)見えているよ
2. 百人の家刀自が(神遊びをします)
七十人の家刀自が(神遊びをします)
(その中に)混じらないで(とびぬけ
た美しい人が)見えているよ
3. 百人の中に
七〇人の中に
(その中に)混じらないで(とびぬけ
た美しい人が)見えているよ

ねは みぎり ニて おちへ こねりて ひだり 一て こねる

(根は右に二手押してこねて左に一手こねる)

ゑらいは ひだり ニて おちへ こねて みぎに 一て こねる

(応答は左に二手押してこねて右に一手こねる)

最後の2行が所作です。「根(ニトウイ)」というオモロの主体となる歌唱者と受け手である「ゑらい」が対になって鏡のように同じ所作をして謡うようになっています。このことからオモロが、当時どのように歌われたのかを想像することができます。

(5) あすびおもろ

あすび(遊び)とは、遊戯ではなく、神前で行われる神遊びのことです。巻12は、神事にまつわる歌舞・饗宴のオモロ集です。こねりおもろは、言葉聞書に所作の指示があるように定型化した舞踊ですが、あすびおもろは、祭りの場で神女が、神がかり的に即興で踊る不定型の臨場感あふれる踊りで、より原初の舞踊に近いものだと思います。

(6) 名人おもろ

巻8は、名人オモロと呼ばれる巻です。英雄割拠時代に26人のオモロ名人が各地を回ってオモロを歌ったといわれていてその代表的な2人のオモロが集められたのが巻8です。その二人とは、オモロネアガリとアカインコ(アカノコ)です。前半43首がオモロネアガリ、後半40首がアカインコのオモロといわれています。アカインコに関しては現在、読谷村に歌碑があり、琉歌で「歌と三味線の昔始りや 犬子童東(あが)りの神の御作」と歌われています。伊波普猷は、この二人をオモロ歌人と命名し、オモロの創作者と位置付けました。オモロネアガリは「橋を作った」「井戸を掘った」「船を作った」という表現から、歌の創作者であり、建築家であり、造船家でもあり、巻8は彼らの創作した歌と彼らを讃仰するオモロであると考えました。しかし、彼らが実際にオモロを創作したかは証明ができませんし、彼らが実際に建築や造船に携わったかも不明です。この伊波説に対し、仲原善忠は、彼らは歌を創作したり、事業を実際にしたのではなく、按司たちが行かせた事業を褒め称えることで按司たちを称賛する「オモロ歌唱者」であったと主張しました。建築や造船のオモロもそれらの大事業の成功のために歌われた予祝のオモロであったと考えられます。沖縄には「クチウーユン」という言葉があります。言葉で言ったことは実現するという意味です。オモロには死や不幸をテーマにしたものはありません。すべて、寿ぎや予祝になっています。現在や未来がよくなること、幸せになることを祈って謡われるのがオモロなのです。オモロネアガリたちは、実際には按司の命で橋作りや井戸掘り、造船の職能集団が行うプロジェクトの成功を祈った歌唱者であったのです。

(7) 神女おもろ

首里の高級神女のオモロです。祭祀国家琉球の最高級神女、聞得大君のオモロ（巻1、3）。大君に続く高級神女、煽りやへ・差笠のオモロ（巻4）、首里大君・宣ん君・君加那志・百度踏み揚がりのオモロ（巻6）。これら各巻は、首里王府の維持発展を祈る琉球王国最高の祭祀の場で謡われたもので、神々による国家の祝福を目的にしたものでした。最初に編纂された巻1が「きこゑおおきみがおもろ」であったことは、その当初の編纂意図がどこにあったのかを見事に物語っているといえます。

(8) 公事おもろ

巻22は、そのほとんどが他の巻から抜粋されたオモロで構成されています。これらのオモロは、王府の公式行事に神歌主取によって謡われました。その内訳は、「稲の穂祭りの時のおもろ」9首、「稲の大祭の時のオモロ」12首、「知念久高島行幸の御時のおもろ」17首、「雨乞の時のおもろ」1首、「昔神世に百浦添御普請御祝ひの時のおもろ」3首、「唐船すらおろし又御茶飯の時のおもろ」1首、「祝ひの時のおもろ」3首、「御冠船の御時のおもろ」1首です。

『おもろさうし』編纂後、1世紀の間に急速に衰亡したオモロですが、この巻22のオモロの一部は明治以降にも伝承され、後で述べるように現在、CDの音源として残されています。

6. 『おもろさうし』の現場

ほとんどすべてのオモロには、節名がつけられています。これは、オモロが歌謡であった証拠です。例えば、次のオモロを見てみましょう。

本文

うちいではふへのとりの節

一 天に鳴響む 大ぬし

明けもどろの花の

咲いわたり

あれよ みれよ

清らや

又 地天鳴響む 大ぬし

(巻7-379)

このオモロの詩章は「一 天に・・・」からですが、それに先立って書かれている「うちいではふへのとりの節」が節名になります。節名は、そのオモロがどのような節で謡われたかを表すものです。こうした節に合わせ、手拍子や鼓を使いながらオモロは謡われた

と思われます。

巻1から巻21までのうち、巻1、3、4、6、9、10、12のオモロはおおよそが首里王府の高級神女が謡ったものです。また、巻22は、神歌主取が王府の公式行事で謡ったものです。その他の巻の歌唱者については、アカインコのようなオモロ名人、航海に関わる人々、英雄を讃える人々等さまざまなバリエーションが考えられますが、その基本はノロから高級神女にいたる神女たちでした。

では、オモロは実際にどのように謡われたのでしょうか。それがわかる貴重な資料が最後の神歌主取、安仁屋真莉から琉球音楽学者、山内盛彬が習った5曲7節を記録したCDです（沖縄伝統文化CD制作委員会『王府のおもろとウムイ：沖縄の古歌謡』Fontec、2006）。それによるとオモロは、ひとつ一つの音を伸縮、変化させ、複雑に飾る独特な謡い方をしています。こうした謡い方は、『おもろさうし』成立当初からのものであったらしく、1608年に記された浄土宗僧侶袋中の『琉球神道記』では、オモロの歌唱を指して「梵唄の如し」と評しています。これは、オモロの意味をストレートに理解できないようにしてオモロを荘厳し神秘づけることでオモロの権威を高める意図があったと思われます。

一番

神歌こねり

同 地

安仁屋掟親雲上

又吉掟親雲上

安仁屋掟親雲上

宮城掟親雲上

又吉掟親雲上

呉屋掟親雲上

宮城掟親雲上

着付、神歌主取、髪黄古銅色緞子丸頭巾、白唐ひげかけ、天青緞子衣装、金欄大帯、足袋。同地人数、髪玉色さや丸頭巾、朝衣、緞子大帯、足袋。

○神歌主取、おもろぬしどり、即ち神歌長

（波照間 2013b 【『琉球戯曲集』より】）

上記の資料によると中国からの使節の前で、安仁屋掟親雲上以下7人がオモロを歌ったことがわかります。この資料によるとオモロの歌唱は、神歌主取と6人の歌唱者によって行われています。この際、7人で合唱したのか、リーダーである主取が一節ずつ謡い、その後6人が復唱したのか、順番に一人ずつ謡ったのかは記録がないので不明です。しかし、それを『おもろさうし』の歌謡としての特徴から推察することができます。オモロには歌の中の大切な部分を繰り返すという特徴があります。巻22-1509番オモロを例にします。これを反復部といますが、このことを巻22-1509番オモロを例に説明しま

す。

本文	現代日本語
一 ①きこゑ、大きみぎや ②げおの、うちの、のろのろ ③あよ そろて ④かぐら、ひやし、みおやせ	1. 聞得大君が 首里城京の内のノ口を集めて儀礼をする <u>心をそろえて</u> <u>オボツカグラ（天上世界）の拍子を奉れ</u>
又 ⑤とよむ、せだかこが ⑥もちろうちの、のろのろ ③ ④	2. 名を響かせている精高子が もちろ内のノ口（神女）を集めて儀礼をする <u>心をそろえて</u> <u>オボツカグラ（天上世界）の拍子を奉れ</u>

このオモロでは、まず第1節①②が謡われます。これは、オモロの内容を進行させる部分で、多くは第2節以下と対句になるため、対句部と呼ばれます。①②の後、③④が囃し詞のように謡われます。これが反復部です。続いて第2節では⑤⑥が謡われ、その後、記述は省略されている③④が繰り返して謡われます。対句部の後に「あよ そろて かぐら、ひやし、みおやせ（心をそろえて 天上世界の拍子を奉れ）」と囃し詞が続くわけです。このフレーズを繰り返すことで国王のエネルギーがパワーアップしていくと考えられていました。①②と⑤⑥を対句部といますが、その対句部と反復部は一つのオモロの中でも役割が違うフレーズです。現在では、役割の違い＝歌唱者の違いと考えられています。

このことから想像すると、オモロの歌唱は、対句部を歌唱リーダーが謡い、反復部を配下の歌唱者が謡ったのかもしれませんが。1509番オモロは、神歌主取集団によって謡われましたから、対句部を神歌主取が、反復部を6人の配下が謡ったこととなります。

また、各オモロには、読点の記載があります。現在、この読点はブレス説（伊波普猷、仲原善忠、外間守善）が有力です。

本文
一 あまみきよが うざししよ、 この大しま、おれたれ、 ともゝすへ、 おぎやかもいす、ちよわれ
又 ほうばな、とて、ぬきあげは、 ちり、さびは、つけ、るな

(巻20-1508)

しかし、この1508番オモロを例に考えると記載された読点は13ですが、CDによると17か所息継ぎがあり、記載された読点と一致するわけではありません。もともと読点を意味の区切れとする説もありましたが、記載がと実際の息継ぎの相違は、記載の誤り

か、伝承の誤りか見極めることは難しい状況です。

7. オモロの歌形

先ほど「オモロの現場」で簡単に触れましたが、改めてオモロの歌形について説明します。『おもろさうし』の各オモロには次のように一又という記号が書かれています。例えば巻1-1番オモロは次のようになっています。

本文

- 一 聞得大君ぎや
降りて 遊びよわれば
天が下
平らげて ちよわれ
- 又 鳴響む精高子が
- 又 首里杜ぐすく
- 又 真玉杜ぐすく

一は4行、又は1行が3句続いています。これは、一は歌詞全体を記したもので、又は同じ文句、すなわち「降りて 遊びよわれば 天が下 平らげて ちよわれ」を省略し、対句になる1行だけ記しています。非常に合理的な記載法ですが、すべてのオモロが同じ法則で記載されているわけではありません。さらに完全記載といって一切、省略がないオモロもあり、徹底していません。すべてのオモロを完全記載に復元して、比較検討する必要があります。また、他の首里王府の文書では一又は採用されていません。なぜ『おもろさうし』にだけ採用されたのかは今のところわかっていません。

オモロは、このように物語を進める対句部（叙事部）と囃し詞の役割を担う反復部（繰り返し部）で構成されています。伊波普猷は『おもろさうし選釈』では一又の区別をつけずに解釈を行っていました。このようなオモロの構造は、戦前に目覚ましい研究活動をした新おもろ学派の代表的な研究者、世礼国男によって発見されましたが、戦後、小野重朗や玉城政美らがその研究を深化させました。オモロでは反復部が省略されているというこの発見によって、多くのオモロの正確な復元とそれに基づく解釈研究が進みました。

しかし、現在では、実は省略は反復部だけではなく対句部にもあることがわかり、また、対句部と反復部の切れ目も従来の解釈では整合しないオモロが見つかっています。このオモロも従来、次のような構造と考えられていました。

- 対句部 一 聞得大君ぎや
又 鳴響む精高子が
又 首里杜ぐすく

- 又 真玉杜ぐすく
●反復部 降れて 遊びよわれば
天が下
平らげて ちよわれ

しかし、「降れて 遊びよわれば」の主語を検討した結果

- 主 語 聞得大君ぎや
○述 部 降れて 遊びよわれば

と考えるべきであることがわかってきました。すなわち、冒頭2行が対句部だったのです。「降れて 遊びよわれば」は反復部の一部ではなく、対句部の一部として省略されていたのです。

そうすると反復部は「天が下 平らげて ちよわれ」になります（この部分は主語が省略されており、反復部は「(国王様) 天下を平らげてましませ」という囃し詞になります）。

オモロはこのように対句部と反復部の切れが明確でないこともありますが、ほぼこのように二節化しています。この現象がなぜ起こったのかについては、オモロが仏教の声明の構造に通じるものがあるとされ、仏教の影響を考える説もあります。

[2] 『おもろそうし』を読む

1. 『おもろさうし』を学ぶ意義

伊波普猷は、『おもろさうし選釈』で「おもろさうしは沖縄の万葉集である」と述べました。確かに万葉集は日本古代最大の歌集であり、『おもろさうし』も沖縄最古でかつ最大の歌集ですが、両者は決定的に異なる点があります。万葉集は、人間の感情をテーマにした抒情詩がその中核であり、作者も明らかで、歌の精神にも個人が存在している歌集です。そして、歌には音数律があります。それに対し、『おもろさうし』1554首の作者は不明であり、音数律もありません。しかも抒情詩と呼べるものはほとんどありません。

しかし、万葉集に古代日本人の心が流れているのと同様に、『おもろさうし』には琉球の人々の心・文化が流れています。『おもろさうし』抜きに沖縄のアイデンティティは語れません。『おもろさうし』は沖縄の心のふるさとなのです。そういう意味では、伊波の言葉は正鵠を射ているといえるでしょう。

本章では、実際のオモロを読み解いて、琉球の人々の心に触れたいと思います。

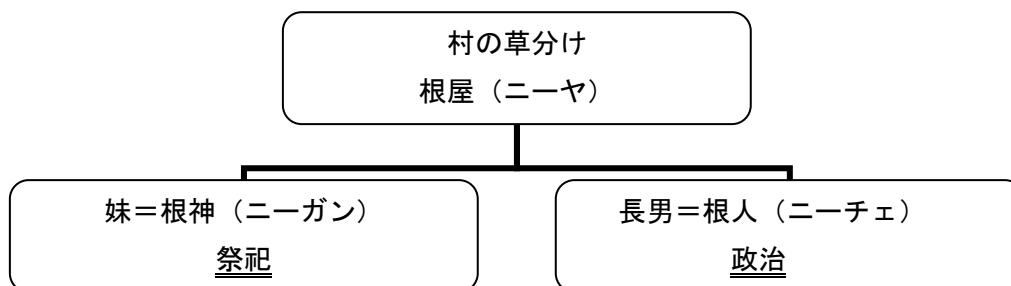
2. 『おもろさうし』に描かれた世界—ヲナリ神と王—

(1) ヲナリ信仰とは

琉球時代から現代まで沖縄には連綿とヲナリ神信仰が続いています。ヲナリ神信仰とは、姉妹の霊力が兄弟の安全や事業を守護するという考え方です。ヲナリは現代琉球語ではウナイ *wunai* となります。ヲナリに守護される兄弟のことはエケリと呼び、現代琉球語ではウィキィ *wiki* となります。これを現代宮古語ではブナヂ *bunadzi* とビキヂ *bikidzi*、現代八重山語では、ブナリ *bunari* とビギリ *bigiri* と呼んでいます。

これは、「霊的に女性は強い」という信仰で、オバ・オイの関係でも成り立つ関係です。戦時中にもこの信仰は生きており、その典型例が千人針でした。

<琉球の村落模式図>



ヲナリとエケリの社会的な役割は、女は祭祀／男は政治で、祭政一致が社会の基本的なあり方でした。琉球の村落構造もヲナリとエケリが基本になっていました。琉球の村落は村の草分けである根屋を中心に構成されています。その根屋の長男は、村を率いる根人となり、村の政治を行います。そして、その妹は根神となって村の祭祀を司るのです。根神は、根人のヲナリ神として兄を守ると同時に、村を守る祭事を取り仕切るのです。

<イザイホー>

ヲナリとエケリの関係の結び方がよくわかるのが1978年に最後となった久高島のイザイホーという祭祀です。久高島では、12年に1回、ウマ年に30歳から41歳になった女性が兄弟を守るためのナリキヨ（ナンチュ）になるための神祭りです。久高島の神女集団は、久高家と外間家の二つの系統があり、最高職のノロのもとに補佐役にはウツテガミがいます。その下にそれぞれタムト（61歳から70歳）、ウンサク（54歳から60歳）、ヤジク（42歳から53歳）という集団があります。この神女たちは、ヲナリとして自分の兄弟を守護しますが、夫は守護しません。夫の守護は夫の姉妹がおこないます。

また、イザイホーでは、新たに神女になる女性たちが、所作を伴って神歌を謡います。そこでは先導者の歌を追いかけて、他の女性が歌を謡っています。ここから『おもろさうし』の謡われた当時の歌い方をイメージすることができます。

（2）ヲナリ神信仰を謡ったオモロ

続いて、ヲナリ信仰をテーマにしたオモロを読み解いていきましょう。ここであげたものは、ヲナリ神によるエケリの航海守護を謡ったオモロです。

本文

- 一 あが おなりみかみの
まぶらでて おわちやむ
やれ ゑけ
- 又 おと おなりみかみの
- 又 あやはべる なりよわちへ
- 又 くせはべる なりよわちへ

現代日本語訳

1. 私のヲナリ神様が
私を守ろうと言って、いらっしやった
ヤレ エケ（おー やったー）
2. 妹ヲナリ御神が
私を守ろうと言って、いらっしやった
ヤレ エケ（おー やったー）
3. 美しい蝶に成り変っていらっしやった
私を守ろうと言って、いらっしやった
ヤレ エケ（おー やったー）
4. 不思議な蝶に成り変っていらっしやった
私を守ろうと言って、いらっしやった
ヤレ エケ（おー やったー）

（巻13－965）

【語 釈】

- まぶら = 「守る」の意味で未然形（これは志向形で「守ろう」という気持ち）
- でて = と言って
- おわちやむ = 「おはす」で「いらっしゃる」、「おいでになる」の意味「おはす」に「た」がついて「おはした」になる。これが口蓋化して→「おわしたん」→「おわしちゃん」となった。表記では「おわちやむ」。

<琉球語の音韻変化>

こうした変化は琉球語の特徴です。例えば、「いかが」は「いきやが」となり、現在では「ちゃーが」にまで変化しています。このような変化のため本土の人には理解できなくなった言葉がいっぱいあります。八重山に「おーりとーり」という言葉があります。これは「いらっしゃいませ」という意味ですが、もともとは「おはれたまわれ」=「おいでいただきました」という言葉でした。これが「おーりとーり」にまで変化したのです。これまで、沖縄の言葉は、日本語の括りの中で、本土方言と沖縄方言という二大方言と呼ばれてきましたが、現在では日本語とルーツは同じくしますが琉球語という独立した言語と定義する考えも出てきています。

- エケ = まあ！という感嘆。八重山ではイッキー。
- あやはべる = 「あや」は美しい。「は」は「羽根のある」。「べる」は「びる」=虫。「は+びる」→「はびる」→「はべる」へ変化し、美しい羽根のある 虫とは蝶を意味する。虫を意味する「びる」は様態を表し、「口びる」の「びる」にも通じる
- くせ = 「奇しき」で「くすり」「くすし」「くし」に通じる。

オモロの大意は、「私のヲナリ神様がいらしゃった。私を守ろうとしていらっしゃった。おお、やったあ。私のヲナリ神様がいらしゃった。私を守ろうとしていらっしゃった。おお、やったあ。美しい蝶に成り変っていらしゃった。私を守ろうとしていらっしゃった。おお、やったあ。不思議な蝶に成り変っていらしゃった。私を守ろうとしていらっしゃった。おお、やったあ。」ということになります。

「くせはべる」=「奇しき蝶」の意味するところは次のように考えられます。沖縄では、昔、鳥が夜、家に入ってきたら、家の人「浜下り」しました。身を清めたのです。また、夜、蝶が家に入ってきたら、羽根をちぎって外に出しました。沖縄では、霊が蝶、蜻蛉、鳥に化けると考えられてました。ここで登場する蝶はヲナリ神の変身したものと考えられ

ます。

このオモロは、遙か沖合を行くエケリの乗った船に、ヲナリ神が美しい蝶に変身してやってきて航海を守護してくれるというものです。当時、琉球において航海は国家プロジェクトでありましたが、自然現象に左右され、常に危険と隣り合わせでした。大海原を行く男たちは、船上で蝶を発見し、そこに自らのヲナリ神である姉妹の姿を見出し歓喜の声を上げたに違いありません。このように航海に挑む兄弟たちを姉妹たちがヲナリ神となって守護したのでした。

本文

- 一 くにの なでしのが
なでしのが ふなやれ
なごなごと なごやけて はりやせ
又 くにのみぢへりきよが
みぢへりきよが ふなやれ
- 又 かみや おなりかみ
ころは いしゑけり
- 又 かつおうだけ とた物
ごぼう岳を とたもの

現代日本語訳

1. 国の中でも勝れたナデシノが
ナデシノの航海だ
和々と和やかにして走らせよ
2. 国の中でも勝れたミヂヘリキヨが
ミヂヘリキヨの航海だ
和々と和やかにして走らせよ
3. 神はヲナリ神
男は立派な兄弟よ
和々と和やかにして走らせよ
4. 嘉津宇岳を取ったぞ
クボウ岳を取ったぞ
和々と和やかにして走らせよ

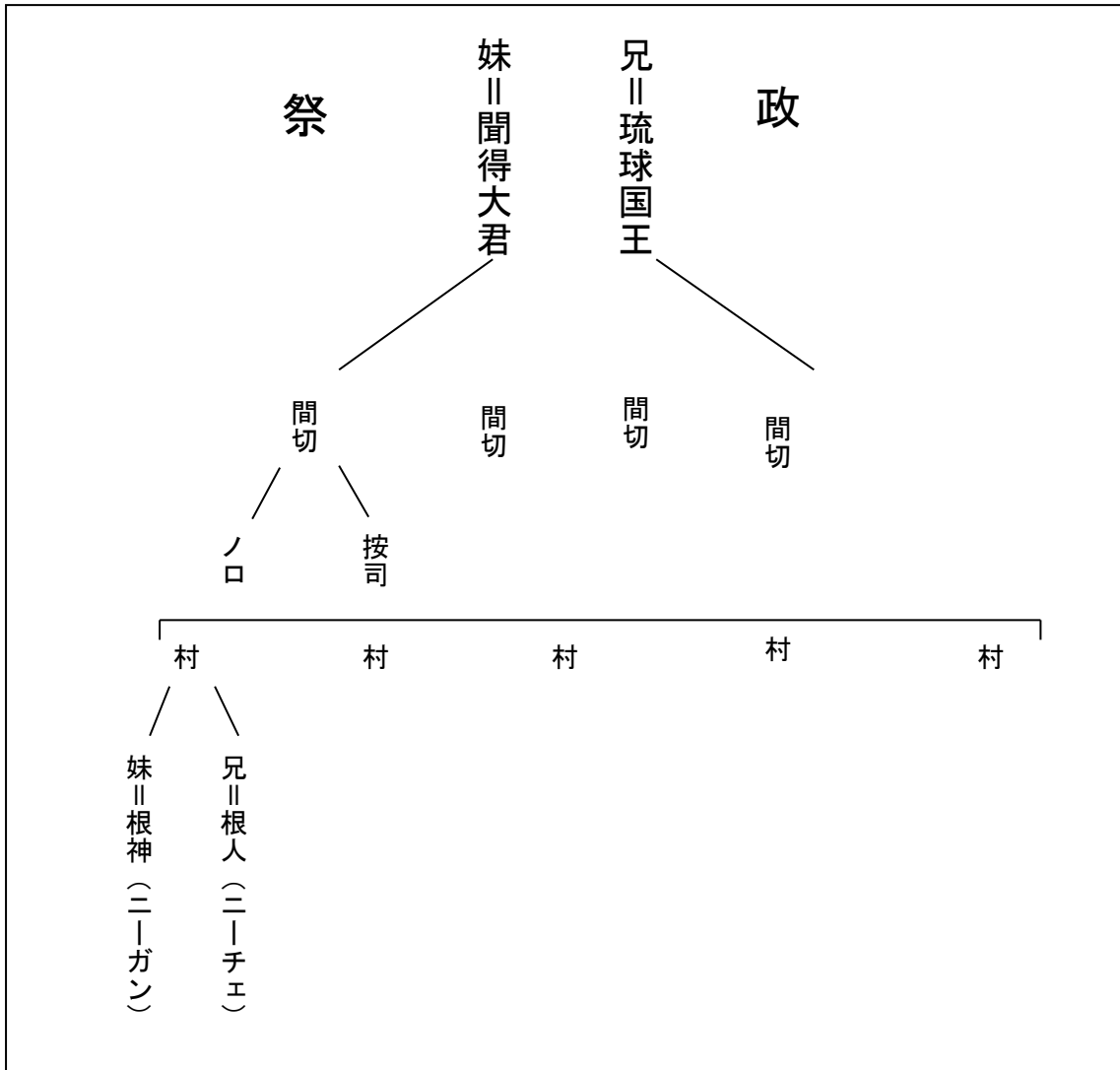
(巻13-934)

【語 釈】

- くにのナデシノ・ミヂヘリキヨ＝国中で勝った神女の名でヲナリ神を指します。
- いし = 「いし」「いせ」は男を褒める美称語
- とた = 「とた」は「取る」です。「取る」とは、視野に入れること。当時は島伝いに岬や山を目印に航海をしました。山を視野に入れるとは進路を決定するための最も重要な行為です。「とた物」で、「とったんだものなあ」という感情を表しています。

オモロの大意は訳文を見ていただくことにして、最初に「くにの なでしのが なでしのが ふなやれ」と謡われているようにこの航海はヲナリ神の命令による航海であると宣言しています。つまり、この男たちは神の命令で航海を行っているという宣言です。第3節になるとエケリたちを讃える詞章も登場します。ヲナリとエケリの両方が讃えられるオモロは珍しいと言われています。第4節には、航海の目印になる山を取る行為が表現され、神の命による航海が男たちの力強い仕事で見事成功している様子を謡っています。ヲナリとエケリの双方の役割がよく描かれているオモロです。

(3) 王権とヲナリ神



国王は琉球王国最高の政治的支配者です。その国王を守護する最高級神女が国王の妹にあたる聞得大君です。この制度を確立したのが第二尚氏王統第3代の尚真王でした。聞得大君（キコエオオキミ）は、琉球国王と国土全土を霊的に守護する琉球王国最高のヲナリ神と位置付けられました。初代大君は、尚真王の妹、月清が就任し、その後も王族の女性が大君に任ぜられました。また、聞得大君の下には三十三君と総称される阿応理屋恵（アオリヤエ）、佐司笠（サシカス）などの「君」、首里の三間切（三平等：ミフィラ）を統括する3人の「大阿母志良礼（オオアマシラレ）」があり、さらにその下に各地方を統括する「大阿母」たち高級神女がいました。村における根人と根神、間切における按司とノロ、その関係を擬制的に拡大したものが聞得大君と国王の関係でした。こうして琉球王国は、ヲナリ神の女性によって守護される霊的国家になっていきました。

ここで王権を守護するオナリ神に関わるオモロを読み解いてみましょう。

本文

現代日本語訳

- 一 きこゑ大ききみぎや
おれて あすびよわれば
てにがした たいらげて ちよわれ
又 とよむせだかこが
- 又 しよりもりぐすく
- 又 まだもりぐすく

1. 聞得大君が
降りて神遊びなさんと
天の下を平らげてまませ
2. 名高い精高子が
降りて神遊びなさんと
天の下を平らげてまませ
3. 首里杜グスクに
降りて神遊びなさんと
天の下を平らげてまませ
4. 真玉杜グスクに
降りて神遊びなさんと
天の下を平らげてまませ

(巻1-1)

【語 釈】

- 聞得大君 = 琉球王国の最高級神女で、国王のヲナリ神。太陽神に成り変わることができました。
- ぎや = 格助詞「が」が口蓋化したもの
- 遊び = 祭事における神遊びのこと。オモロを謡って舞うこと。
- とよむせだかこ = 鳴響む精高子。聞得大君の異称。「鳴響む」は美称辞で「鳴り響く」「名高い」の意。「精高子」は霊力が高い人の意。
- しゅりもりぐすく・またまぐすく = 首里城内の御嶽。神のまします聖域。首里城な 全体を指すこと場合もあります。

このオモロは、国王のヲナリ神である聞得大君が「おれて＝天下りして」「あすびよわれば＝神遊びなさんと」と始まるように太陽神に成り変わった聞得大君が国王に霊力を授ける国家祭祀儀礼のオモロです。第2節で「とよむせだかこ（名高い霊力の高いお方）」と聞得大君を美称して同じ行為を謡い、第3節、第4節では、聞得大君が天下る場所（首里杜・真玉杜）を示して大君の行為を讃えています。その対句部の進行の合間に反復部「国王は万々歳じゃ、天下を平定していしますのじゃあ」という囃し詞が繰り返され、霊力あふれる聞得大君とその霊力によってパワーアップした国王双方を讃える内容になっています。

本文

- 一 きこゑ大ききみぎや
首里もり おわれわちへ
ひやくさぎやめ
おぎやかもいしよ ちよわれ
又 とよむせだかこが

現代日本語訳

1. 聞得大君が
首里杜にお降りなさって
百歳まで
オギヤカモイこそまします
2. 名高い精高子が

又 きこゑあんじおそいや

又 とよむあんじおそいや

首里杜にお降りなさって

百歳まで

オギヤカモイこそまします

3. その名の聞こえた按司襲い様は

首里杜にお降りなさって

百歳まで

オギヤカモイこそまします

4. その名の轟いた

真玉杜にお降りなさって

百歳まで

オギヤカモイこそまします

(巻1-18)

【語釈】

- おれわちへ = 「お降りなさって」。1番オモロと同様に降りるとは神になって降りてオモロを謡い舞う行為を行うこと。
- ひやくさぎやめ=直接の意味は「百歳まで」だが、本意はいつまでも、末永くということを意味しています。
- おぎやかもい=第二尚氏王統第3代尚真王の称号

これも1番オモロと同様、聞得大君の霊力により、国王がパワーアップすることを讃える内容になっています。国王に関してはオギヤカモイ=尚真王の神号を直接出し、「百歳までオギヤカモイこそまします」、すなわち、その統治が永遠に続くように寿いでいます。これもクチウーユン思想からきたもので、このオモロが国王の生命力を高める呪詞的性格をもったものであることがよくわかります。

なお、王権とヲナリ神に関するオモロは巻1-31~39「オヤケアカハチの乱」関連オモロや国家祭祀のオモロを参照するとさらに詳細にその内容を理解することができます。

<反復部の持つ力：主題・イメージの強化>

以上のオモロにすべて登場した反復部は、物語を進めていく対句部に対して、オモロのテーマを集約的に表現して各節で反復歌唱されるものです。対句部と反復部で一つの節を構成し、節を重ねていくことで叙述を行っていくこの形式は、南島歌謡の普遍的な在り方です。たとえば、八重山の有名な古謡「安里屋ユンタ」では、物語を叙述する詞章に挟んで「アーユイユイ（掛け声）」と「マタハーリヌ チンダラ ヌルシャマヨ（あーやれ、愛おしい娘であることよ）」が繰り返されます。出来事をただ叙述するのではなく、囃し詞を繰り返すことでその歌謡のテーマが聞き手の心象にしっかり焼き付いていきます。

(4) ヲナリ神を謡った琉歌

ここで、オモロではありませんが、ヲナリ神を謡った琉歌を紹介します。

○お船のたかとも 白鳥がみちやうん 白鳥やあらぬ 思姉おすじ

(『琉歌全集』 1066番歌 p.226)

「とも」は船の船尾のことで、「たかとも(高艫)」はそれが普通より高くなっていることです。17世紀以降の沖縄の船はマーラン船と呼ばれ、ジャンク型の船として船首と船尾が高くなっていました。「いちやうん」は「居ておる」、つまり「居る」の意です。

「思姉(ウミナイ)」は「思いおなり」のことで、「愛する姉妹(オナリ)」つまり姉妹への敬称です。「おすじ」は御セヂで、セヂは霊的な力を指します。琉球弧では姉妹が男性兄弟を霊的に守ることが信じられていて、その場合姉妹は男性兄弟にとりオナリ神だということになります。これが、よく知られたオナリ神信仰です。このうたは、その信仰を象徴的に表現したうたとして、よく引かれます。すでに触れたことのある、琉球王府の聞得大君という存在は、この信仰を階層化し、その頂点で王を霊的に守る女性です。

【末次悟HP琉歌(りゅうか)詞華集-010 2000/07/13 より

<http://www.eonet.ne.jp/~rekio/melimga/ryukaanthology10.htm>】

3. 『おもろさうし』に描かれた世界—神話とオモロ—

神話とは神々が創り出す様々な物語です。琉球の島々にもさまざまな種類の神話があります。奄美大島の有名な「島立てシンゴ」をはじめ、南島歌謡の中には、神話的な性格の歌謡が多数あります。

世界の神話を見ていくと、そこには必ず触れられている三つの起源があります。①宇宙(国・国土)の始まり、②人間の始まり、③文化の始まりです。琉球の開闢神話にもこの三つの起源が記されていますが、『おもろさうし』に開闢神話をテーマにしたオモロは数多くありません。

そこで、少しオモロから離れて、オモロ以外の書物に記された琉球開闢神話を紹介します。琉球開闢神話は、いくつかの書物に記されています。最も古いものは袋中の『琉球神道記』(1648年)、続いて向象賢羽地朝秀『中山世鑑』(1765年)、そして『聞得大君御城御規式之次第』(1800年代成立か)です。

日本神話における開闢イメージは「水に浮かぶ脂」とか「鳥の卵」というようにふわっとしたのですが、琉球神話における開闢イメージはリーフ(サンゴ礁)です。次に記すには『中山世鑑』に載せられている開闢神話です。

(1) 『中山世鑑』による開闢神話

囊昔、天城ニ、阿摩美久ト云神、御坐シケリ。天帝是ヲ召シ、宣ケルハ、此下ニ、神ノ可住霊処有リ。去レドモ、未ダ島ト不成事コソ、クヤシケレ。爾降りテ、島ヲ

可作トゾ、下知シ給ヒケル。

阿摩美久畏り、降りテ見ケルニ、靈地トハ見ヘケレドモ、東海ノ浪ハ、西海ニ打越シ、西海ノ浪ハ、東海ニ打越シテ、未ダ島トゾ不成ケリ。

去程ニ、阿摩美久、天へ上り、土石草木ヲ給ハレバ、島ヲ作りテ奉ンドゾ、奏シケル。天帝、睿感有テ、土石草木ヲ給リテケレバ、阿摩美久、土石草木ヲ持下リ、島ノ数ヲバ作りテケリ。

先ヅ第一ニ、国頭ニ、辺土ノ安須森、次ニ今鬼神ノ、カナヒヤブ、次ニ知念森、斎場獄、藪薩ノ浦原、次ニ玉城アマツツ、次ニ久高コバウ森、次ニ首里森、真玉森、次ニ島々国々ノ獄々森森ヲバ、作りテケリ。

数万歳ヲ経ヌレドモ、人モ無レバ、神ノ威モ、如何デカ顕ナレバ、阿摩美久、又、天ニ上リ、人種子ヲゾ、乞給ケル。

天帝、宣ケルハ、爾ガ知タル如ク、天中ニ神多シト云ヘドモ、可下神無シ。サレバトテ、黙止スベキニ非ズトテ、天帝ノ御子、男女ヲゾ、下給。

二人、陰陽和合ハ無レドモ、居処、並ガ故ニ、往来ノ風ヲ縁ニシテ、女神胎給、遂ニ三男ニ女ヲゾ、生給。

長男ハ国ノ主ノ始也。是ヲ天孫氏ト号ス。

二男ハ諸侯ノ始。三男ハ百姓ノ始。一女ハ君々ノ始。次女ハ祝々ノ始也。其ヨリシテゾ、夫婦婚合ノ儀ハ、アラハレケリ。

(波照間2013b【伊波普猷他『琉球資料叢書』所収『中山世鑑』より】)

天城がどこかは不明ですが、徳之島に天城山があります。アマミクが天帝に命じられて。靈地に降りてきます。しかし、この地はまだ島には程遠い状態で「東海ノ浪ハ、西海ニ打越シ、西海ノ浪ハ、東海ニ打越シテ、未ダ島トゾ不成ケリ」と記されています。この部分は洪水神話を意味していると考えられます。その後、アマミクは天に上り、天帝から土石草木を貰い、今あるすべての島を作りました。これは宇宙(国土)起源の神話といえます。続いて、作った国土についてその順番と場所が示されます。国頭のアスナモリ、今帰仁のカナヒヤブ、知念のモリ、斎場獄、玉城のアマツツ、久高のモリ、首里のモリ……と続きます。ここで重要なことはアマミクが御獄や森を最初に作ったということです。これは「ウチナンチューあるところ御獄あり」というほど沖縄の人にとって御獄は重要なものですが、それが国づくりの最初から存在したというシンボリックな記述です。

こうして国土は整備されましたがそれから何万年、そこに住む人間はいませんでした。そこで、アマミクは天に昇り、天帝に人の種子を乞いましたが、天帝は「天中ニ神多シト云ヘドモ、可下神無シ」と答えました。これは、祖先にすべき神は天にはいないという意味でしょう。しかし、天帝は、この懇願を黙止していただけないと思い、アマミクに男女二人を授けました。この男女二人を天帝氏といいます。これは人類の起源神話です。

この男女は兄妹であり、陰陽和合はありませんでしたが、風を縁にして妹が懐妊します。

いわゆる風媒婚です。妹からは三男二女が生まれます。長男は天孫と名乗り、国王のはじめとなりました。次男は、按司のはじめ、三男は百姓のはじめ、長女は君々（高級神女）のはじめ、次女はノロのはじめとなりました。これは沖縄の社会を構成する階層の起源、すなわち文化の起源神話と考えてよいでしょう。

(2) 『おもろさうし』に謡われた開闢神話

本文

- 一 むかしはぢまりや
てだこ大ぬしや
きよらや てりよわれ
又 せのみはぢまりに
- 又 てだいちろくが
- 又 てだはちろくが
- 又 おさん しちへ みおれば
- 又 ざよこ しちへ みおれば
- 又 あまみきよは よせわちへ
- 又 しねりきよは よせわちへ
- 又 しま つくれでて わちへ
- 又 くに つくれでて わちへ

現代日本語訳

1. 昔、世界の始まりは
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
2. 太古の始まりに
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
3. 太陽の一郎子が
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
4. 太陽の八郎子が
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
5. はるかに見下ろして見ますと
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
6. しずかに見下ろして見ますと
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
7. アマミキヨをお寄せになって
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
8. シネリキヨをお寄せになって
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
9. 島を造れとおっしゃって
太陽の大主様は
神々しく照っておられ
10. 国を造れとおっしゃって
太陽の大主様は

- | | | | |
|---|---------|-----------|-------------------|
| 又 | ここらきの | しまじま | 神々しく照っておられ |
| | | | 11. たくさんの島々を |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | ここらきの | くにぐに | 12. たくさんの国々を |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | しま | つくるぎやめも | 13. 島を造るまでも |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | くに | つくるぎやめも | 14. 国を造るまでも |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | てだこ | うら きれて | 15. 太陽神様はもどかしく思い |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | せのみ | うら きれて | 16. セノミ神様はもどかしく思い |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | あまみやすぢや | なすな | 17. アマミヤの筋目は生むな |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | しねりやすぢや | なすな | 18. シネリヤの筋目は生むな |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |
| 又 | しやりば | すぢや なしよわれ | 19. ならば我が筋目を生みなされ |
| | | | 太陽の大主様は |
| | | | 神々しく照っておられ |

(巻10-512)

【語 釈】

- てだこ大ぬし＝太陽の子である大主で太陽神を表す。
- せのみ ＝未詳語
- てだいちろく・でだはちろく＝太陽神への尊称。一郎や八郎は貴人に付ける名
- おさんしちへ＝高いところから
- さよこしちへ＝「さよこ」は未詳語（神が鎮座するという説もある）。
- ここらき ＝「ここら」は古事記に出てくる「許々多（ここだ）」のDがRに変

化したもので「たくさん」の意味。ただし「こころき」の「き」は意味がはっきりしない。

- すぢや = 「すじや」は筋目と訳したが、これは池宮清治説（「すじ」＋「や」）。外間守善説はこれ「すじや」＝「衆生」とする。

このオモロは、「昔、世界の始まりは」と始まる宇宙と人間の起源神話です。第1節から、対句部がどんどん物語を進めていきますが、このオモロのテーマを集約的に表現している反復部は「てだこ大ぬしや きよらや てりよわれ（太陽の大主様は神々しく照っておられ）」と太陽の子である大主様＝太陽神を讃えるフレーズを繰り返します。「きよら」は「美しい」という語で「てりよわれ」を修飾していますが、「てだこ大ぬし」を讃える働きをしています。『中山世鑑』と重なる部分が多いのですが、『中山世鑑』では天帝がアマミクに命じることでストーリーが進行しますが、ここでは天帝のかわりに「てだこ大ぬし＝太陽神」が登場し、アマミクではなくアマミキヨが登場します。また、ここで登場するシネリキヨですが、アマミキヨと対の存在と考えられますが、主人公を別表現で対句するオモロの定式から考えて、アマミキヨを一柱と考える論者もいます。「せのみ」は未詳語です。5～14までは、国土の起源を謡います。高い所から下を見下ろし、島々や国々を作るよい場所を見つけたと謡います。「ざよこ」は未詳語です。太陽神はアマミキヨ・シネリキヨに「しま つくれでて わちへ（造れとおっしゃって）」「くに つくれでて わちへ（造れとおっしゃって）」とあるように命令をします。15からは、人間の起源神話です。国土はできましたが、人がいないことをたいそうもどかしく思った太陽神ですが、アマミキヨ・シネリキヨに早く、子孫を作れと命じるのではなく、17、18にあるように「アマミキヨ・シネリキヨの筋目の子ども＝末裔は生むな」と命じます。「なすな」の「な」は禁止を意味します。そして太陽神は、自らの子どもをこの国土に下ろすことを「しやりば すぢや なしよわれ（ならば我が筋目＝末裔を生みなされ）」と宣言します。

太陽神の「アマミキヨ・シネリキヨの筋目の子ども＝末裔は生むな」「我が筋目＝末裔を生みなされ」という宣言の意図は不明です。しかし、このオモロには極めて大きな政治的な意図が透けて見えます。琉球の人々は、自らの祖先神をアマミキヨ・シネリキヨとして起源神話を伝承してきましたが、そこへ太陽神が登場し、アマミキヨ・シネリキヨの上位に立ちます。これは、これまでの起源神話を再編する大きな変革といえます。各地の按司やノロを首里に集め、中央集権支配体制に確立した尚真王時代に首里王府は国王を太陽神に譬える宗教的な思想を論理化していきました。このオモロもその当時に作られたものだと考えられ、太陽神をアマミキヨ・シネリキヨの上位に置いたことは、現実世界における支配被支配の関係の反映であり、首里王府の優位性を強調する政治的意図がうかがえます（比嘉1977）。

こうしてオモロは、琉球国王を強化し、その命運を永遠していく政治的な歌謡としての機能を発揮していくのです。

3. 『おもろさうし』に描かれた世界—航海と御嶽—

(1) 御嶽

航海は沖縄にとって非常に大切な行為です。ですから、航海の成功のために信仰は重要な役割を果たしました。つまり、神への祈りで航海を成功させるということです。では、沖縄の信仰世界とは、いったいどういうものだったのでしょうか。沖縄の信仰世界を考える時に、忘れてはならないものが御嶽（ウタキ）です。そこで、ここでは、航海のオモロに先立ち、沖縄の信仰の中核である御嶽について考えてみます。

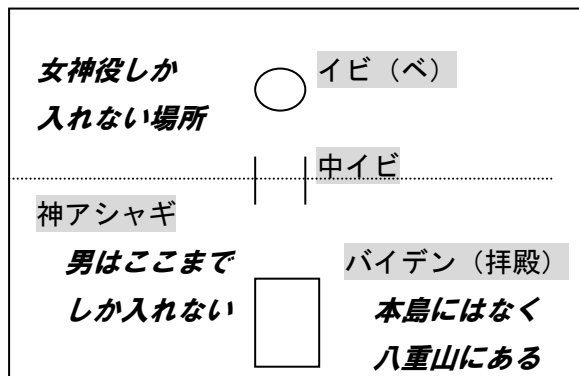
琉球における最高級の信仰の場の一つが、首里城内の京の内でした。うっそうとした樹木の生い茂る京の内では、聞得大君をはじめとする高級神女たちは、国家・国家のために祭祀を執り行いました。京の内は神女たちの最高級の祭祀空間で、その場に入れる男は琉球国王ただ一人でした。この祭祀場面をCGで再現したものが「京の内—首里城の祭祀空間—」（DVD制作 国営沖縄記念公園）です。その中で祭祀のクライマックスには、国王と聞得大君が対座する場面があります。『おもろさうし』では「君手擦り百果報事」（後述）の時に、大君と国王が眼と顔を合わせる行為を次のように謡っています。

本文	現代日本語訳
又 吉日 七日 遊で 眼 合わちへ からは	吉日の七日間、神遊びをして 眼を合わせて
又 吉日 七日 遊で 御顔 合わちへ からは	吉日の七日間 神遊びをして 御顔を合わせて

(巻12-732)

この祭祀を通じ、国王は神から霊力を授けられるのです。この京の内のような祭祀空間は御嶽と呼ばれ、沖縄全土に限なく存在します。

<御嶽の構造>



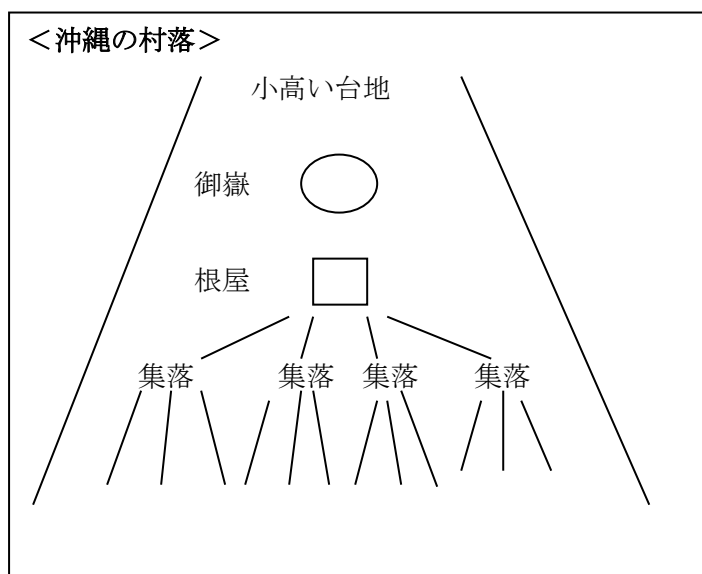
御嶽は、イビを中心とした神聖な空間です。イビの手前には神アシャギという村人が神祭りをする空間があります。イビは、中イビという入口の奥にある、神が降臨する聖域中

の聖域で、そこには神体の石や樹木があります。また、イビには神役の女性しか入ることができません。神役の女性は沖縄本島ではノロ、八重山ではツカサ、宮古ではカンカカリヤーといいます。降臨する神については神役の女性が口承で伝え、決して他の人には明かしません。ちなみに、ウタキは八重山ではオン、ワンと呼びます。波照間島ではワーです。オガン→ウガン→オンと変化したようですが、ウタキ自体は「拝み（オガミ）」から生まれた言葉のようです。オモロでは、オタケ、ウタキを表記されています。

神の名は、外部には決して明かさないとはいいましたが、1713年に成立した『琉球国由来記』全21巻にはすべての御嶽の神名が記されています。『由来記』の編纂は首里王府ですから、これは中央権力による神名掌握です。第1巻から第11巻は首里王府中枢の御嶽、第12巻からは各処の御嶽が記されています。そこに記されているものは王府公認の御嶽といえます。

『由来記』に載っている御嶽の数は、与那国と与論以北を除く琉球王国に約1000ありました。このうち、宮古は28、八重山は76です。しかし、現在では八重山には243（牧野清調べ）、宮古には990（平良市調べ：サトガン＝里のウタキ含む）あります。沖縄県全体でも約2500、奄美大島、沖永良部島を入れると約3000になります。近世から御嶽はどんどん増えているのです。

『神と村』『古層の村』などを著した地理学者仲松弥秀は、沖縄の御嶽の神は村を愛護する祖霊神・島立神・島守神と祝福をもたらすニライ・カナイの神、航海守護神などであるとししました。沖縄の村落は、後背台地に開け、腰当て（背後から守ってくれるという意味）の神であるクサティが降臨する御嶽を背景にして立つ草分けの家系の根屋から扇のように集落が広がって出来ています。つまり、御嶽は村の一番奥の少し高いところにあり、村は神のひざに抱かれているように存在しているのです。



(2) 神に守護される航海

前段が長くなりましたが、ここから航海と神の関わりに関するオモロを読み解いていきましょう。

本文	現代日本語訳
一 大にしに 鳴響む 聞こへ なよくら 吾 守て この渡 渡しよわれ 又 崎枝に 鳴響む	1. 大北の地に鳴り響く 高名なナヨクラ神様 (どうぞ) 私を守ってください この海を(安全に)渡らせてください 2. 崎枝の地に鳴り響く (どうぞ) 私を守ってください この海を(安全に)渡らせてください (巻13-904)

【語釈】

- 大にし =にしは北のことで、大は「とても」。大北はとても北の方、読谷を指します。ちなみに「中にし」は、少し北の意。
*参考琉歌「大(ウフ)にしの特牛(クティウシ) なざらや
らど好きゆる(スイチュル) 我した若者や 花どすきゆる
(スイチュル)」(『琉歌全集』71番歌 p.18)
- なよくら =神女の名で、首里では、聞得大君の下にいる首里三平等の大阿母し
られの一人である儀保ノ口の聖名で、「大にし」読谷では、この地の
ノ口神の名。
- 崎枝 =本島を幹にすると半島は枝。ここでは残波岬を指す。

これは、読谷にその名を響かせているナヨクラ神様に航海の安全の祈願するオモロです。ナヨクラは、従来、読谷の神女と解釈されてきましたが、ヲナリ神を淵源とする神格を有した存在=女性神を考えるべきでしょう。その神に、崎枝、即ち、海に突出した枝のような岬の航行を安全にかなえてくださいと守護を祈るのです。岬は、潮の流れが変容し、危険な場所です。そういう場所に航海を守護する神がましますと考えます。

反復部の「吾守て この渡 渡しよわれ」のフレーズは巻13に18首登場していて、航海安全を祈る言葉として多用されています。

本文	現代日本語訳
一 しませんこ親のろ 親のろは 崇べて 浮き清らは げらへて 黄金積で 首里かち 走りやせ	1. シマセンコの奉っている親ノ口神様 親ノ口神様を崇め奉って 浮き清ら船を造って 黄金を積んで 首里に向かって走らせよ

又 今帰仁の 親のろ
親のろは 崇べて

2. 今帰仁の親ノ口神様
親ノ口神様を崇め奉って
浮き清ら船を造って
黄金を積んで
首里に向かって走らせよ

(巻13-905)

【語 釈】

- しませんこ親のろ＝しませんこは今帰仁村勢理客の神女の聖名。しませんこ親ノ口は、神女というよりも、その神女の齊き祭る神そのものを指す。
- 崇べて＝崇め奉り、褒め称えること。神も褒め称えられると喜びます。
- 浮き清ら＝浮く姿が美しいという意味の船の美称。船も褒め称えられるとうれしいと考えられた。
- かち＝「かい」、すなわち「に」で、「向かって」の意。

このオモロも航海の安全を祈るもので、904番オモロと構造は同じです。神を褒め称えると同時に、反復部では、「浮き清ら」「黄金積で」と船も褒め称え、予祝の言葉としています。船を褒めることで船を最高の状態に創りあげるので。船の美称としては、他に「棚清ら」＝船体が美しい、「魚底」(魚＝愛：愛媛の魚)、即ち、美しい船底などその他多数の表現があります。

オモロの大意は、「今帰仁村勢理客を守護する偉大なノ口神様。その神様を崇め奉って、海面に浮かぶ姿の美しい船を造り、黄金を満載して、首里に向かって疾駆せしめよ」です。

男たちを航海に送り出す村々では、このようなオモロを御嶽で謡うことで、航海の無事を祈ったわけです。こうした琉球の神々は、ヲナリ神を淵源とし、そこから村全体を守護するノ口、すなわちノ口神という女性神へ発展し、それが国家的な宗教体系となり、琉球王国最高級ヲナリ神としての聞得大君を生み出したのです。

さらに御嶽と航海の関わりを明確に語るオモロを紹介します。

本文

一 屋嘉比杜 居わる
親のろは 崇べて
吾(アン) 守(マブ)て
此の渡 渡しよわれ
又 あかまるに 居わる
てくの君 崇べて

現代日本語訳

1. 屋嘉比杜におわします
親ノ口神様を崇めまして
(どうぞ)私を守ってくださって
この海を(安全に)渡らせてください
2. 赤丸崎におわします
テクの君神様を崇めまして
(どうぞ)私を守ってくださって
この海を(安全に)渡らせてください

(巻13-921)

【語 釈】

- 屋嘉比社 = 沖縄本島北部の国頭村の屋嘉比の御嶽
- 親のろ = 親のろ神様
- あかまる = 国頭村奥間の赤丸崎で、『琉球国由来記』のヒヨウノ嶽と思われる。同嶽の神名が「赤丸ノ御イベ」。

このオモロでは、沖縄本島北部の国頭村の二つの御嶽におわす神々を崇め奉って、航海守護を祈念しています。御嶽にむかい、先にもあげた「吾守て 此の渡、渡しよわれ」と祈願することで、無事な航海の実現を図っています。これはほかでもなく、御嶽に航海守護の機能があったことを物語っています。

(3) 交易国家琉球とオモロ

琉球を経済的に支えていた交易は、まさに国家最大のプロジェクトでした。その最大のツールは港であり、船そのものでした。港の整備や造船も国家が主導して行われました。それを謡ったオモロを紹介します。

本文

- 一 しより おわる てだこが
うきしまは げらへて
たう なばん よりやう なはどまり
又 ぐすく おわる てだこが

現代日本語訳

1. 首里にいらっしゃる国王様が
浮き島は整備なさって
唐・南蛮の船の集まる那覇港だ
2. 首里のグスクにいらっしゃる国王様が
浮き島は整備なさって
唐・南蛮の船の集まる那覇港だ

(巻13-753)

【語 釈】

- しより = 首里
- おわる = いらっしゃる
- うきしま = 那覇は15世紀まで浮島であった。
- げらへて = 造る→立派にきれいにするの意。

このオモロは、海外交易の拠点となる那覇港の整備を国王が行ったことを褒め称える内容になっています。15世紀まで浮島であった那覇を国家あげて整備して、唐や南蛮の船が寄りあう港にしました。この那覇港に海外から交易船が出入りし、また、琉球王国公認の交易船が中国や東南アジアへ出帆していったのです。当時の那覇港は一大国際都市の様相を呈していました。

さらに国家プロジェクトとしての航海の際には、国王自らオモロを謡って一行を送り出

しました。第13巻の762番オモロの詞書には、

正徳十二年十一月二十五日丁の酉の日に、せぢあらとみ、まなばんに御つかいめ
されし時に、おぎやかもい天の御みてづから召され候と

【現代語訳】

1517年、火の弟の酉の日に、セジ新富船を真南蛮にお使いにお出しになっ
た時に、尚真王様が御自らおつくりになったとオモロ

とあります。琉球国家が交易に船を送り出す時に、首里城内で航海守護のために国王が自らオモロを謡い、航海を予祝したのです。真南蛮とはシャムのことです。詞書の中の「せぢあらとみ」とは、船の名「勢治荒富」（セヂ＝霊力、荒＝新しい、富＝豊響み（鳴り響く））のことで、霊力満ち溢れた鳴り響く船という美称です。船に美称を付けることは、船の力を最高級に高め、航海を無事に成功させる予祝であったのです。

巻1－38番オモロには、国王が船の名づけを神に祈り、神が船毎に祝福の命名をすることが謡われています。神の命名による船名は「世引き富」（世＝豊穰を引き寄せる船）、「せぢ荒富」（霊力新らしい船）、「世付き富」（豊穰が付き具わった船）、「雲子富」（素晴らしい船）、「舞合い富」（群れ舞い合う船）、「押し明け富」（豊穰の世を押し明ける船）です。これは、すべて嘉名、すなわち祝福された名前であり、末尾もすべて富という美称です。船に対して最高級の期待をし、それを神が担保してくれるという琉球の人々の願いがここにも感じられます。

また、「王城之公事」として行われた中国に渡る「渡唐衆御茶飯」（オチャハン）という儀礼の中では、玉庭（正式な儀礼空間）において「渡唐衆」全員で綱を造り、その制作中には、「御唄親雲上・勢頭部」がオモロを謡うという儀礼がありました。これは、単なる船具として綱づくりではなく、王と船をつなぐ象徴的な行為として綱づくりであり、綱は沖縄とはるか遠洋をゆく船とも結びつける呪具であったと考えます。

このように航海と信仰は密接につながったものであり、そこでオモロは極めて重要な役割を果たしていたのです。

5. 『おもろさうし』に描かれた世界—英雄・グスク・社会—

沖縄では、旧石器時代・新石器時代を経て、島の各地にグスク（城郭・石塁）が築かれ、本格的な農耕社会が始ります。この時代をグスク時代と呼びます。そして、このグスク時代に（後に間切りと呼ばれる）地域社会が生まれ、その地域社会が中山・南山・北山という小国家としてまとまりを見せ、そして第一尚氏、第二尚氏によって琉球王国という統一王国に発展していくこととなります。ま

12世紀から15世紀にかけて誕生した地域社会を支配したのが按司と呼ばれる地域社

会の首長たちでした。『おもろさうし』は、もともと首里王府が祭式の為の神歌集として編纂したのですが、それだけでは性格を律しきれない多様性を秘めた歌謡集でもあります。そのことを最もよく表しているのが、この首長たちを讃えたオモロです。オモロの中で彼らは、地域社会を率いる英雄として描かれています。特に、英祖、察度、阿麻和利の三人は英雄讃美のオモロの中でも一段と個性を輝かせて謡われています。

(1) 伊祖の戦思いのオモロ (英祖王とされる)

本文	現代日本語訳
一 ゑぞのいくさもい 月の かず あすびたち とももと わかてだ はやせ 又 いぢへきいくさもい	1. 伊祖の戦思い(英祖王)様は 月ごとに遊びにたち。 千年の末までも若対陽様を囃したてよう
又 なつは しげち もる	2. 優れた戦思い(英祖王)様は 月ごとに遊びにたち。 千年の末までも若太陽様を囃したてよう
又 ふよは 御さけ もる	3. 夏にはシゲチ(お神酒)を盛るよ 月ごとに遊びにたち。 千年の末までも若対陽様を囃したてよう
	4. 冬には御酒を盛るよ 月ごとに遊びにたち。 千年の末までも若対陽様を囃したてよう

(巻15-1069)

【語 釈】

- ゑぞ =オモロ時代には「ゑぞ」で英祖王と表記されたが、「ゑ→い」「ぞ→ず」と音韻が変化して、現在の発音では伊祖王となる。「ゑぞの」という表現から英祖の地から生まれたという意味になります。
- 思い =大切なという意味の接尾(頭)語で、オモイ→ムイ→ミイと音韻変化した。この場合、戦に優れたお方という意味になる。
- つきのかず =すべての月
- あすびたち =神遊びのことで、神様が神事に立ち現れて振る舞うことを指します
- とももと =十百年→永遠に
- わかてだ =若い太陽
- いぢへき =よくできる、優れたの意。い出来(イジェキ)
- しげち =夏に米を収穫したてで作った酒。米をすりつぶして唾液で作る噛み酒(ウンサダ)。
- 御さけ =泡盛系統の酒を意味するが、当時、琉球で泡盛が本格的で造られていたかどうかは不明。南蛮伝来の高価な酒と考える方が妥当か。

これは、伊祖の戦いと讃えられた英祖王を讃えたオモロです。英祖は、沖縄で初めて歴史的に確認できる人物で、1229年～1299年に沖縄中部浦添を根拠地に活躍した按司です。英祖は、浦添の恵祖世主の子で英祖日子と称されました。それは、英祖の母が太陽の光がふところに入る夢を見て懐妊し、やがて月が満ちて英祖が生まれたことに由来します。出産時には、太陽の光が部屋中に輝き、芳香が漂ったといわれています。このような太陽の精を貰って生まれたという日光感精神話が創られるほど、英祖は生れつき徳を備えた存在として伝承されていきます。英祖は、1260年に王位を譲られ、即位します。即位後、英祖は、国中を巡視し、田畑の境界を定めて農民に分配し、農業の仕組みを整えました。そのために国土は豊穰になり、貢租も安定し、国が栄えたといえます。この英祖の時代には、1264年に久米、慶良間、伊平屋の島々が、1266年には奄美大島が入貢し、その支配下に入りました。また、禅鑑という僧侶が那覇に漂着したので英祖は浦添に極楽寺を建てて開祖とし、これが沖縄の仏教伝来の始まりとなりました。こうして英祖の時代に沖縄は新しい時代に入ることになりますが、実際は英祖が沖縄全土を統一していたわけではなく、その支配は浦添を中心とした地域であったと考えられます。英祖王統は5代続きましたが、第4代玉城の時、玉城は、酒色にふけり、政治を顧みなかったために国内が乱れ、1326年に国は中山、北山、南山の三つに分裂したとされますが、これも統一王権が分裂したのではなく、沖縄が当時、北、中、南の三つの勢力圏にまとめられつつあった事実を表しています。

このオモロの大意は「英祖王さまは、立派な方です。優れた戦い様は立派な方です。夏には神酒を盛り、冬にはお酒盛ります」というもので、これに反復部「月ごとに神遊びをして若太陽様を囃したてよう」と英祖を讃える囃し詞が繰り返され、英祖への祝福が続きます。

このオモロの「月ごとに神遊びをする」「夏にはシゲチを盛る」「冬には御酒を盛る」という表現から読み取れることは、伊祖の地の豊かさです。酒は、単なる飲み物ではなく、穀物のシンボルであり、富の象徴でした。月ごとの祭りには、酒が神に捧げられ、人々に惜しげもなく振舞われるのです。沖縄には、四季がなく夏と冬の二季です。夏には収穫したての米で造った酒を奉じ、冬には南蛮から輸入した高価な酒を振る舞う、つまり、一年中、酒を絶やすことがない英祖の統治する土地の豊かさを強調しているようです。この豊かさの表現を通して、この土地をつくりあげ、発展させてきた英祖が讃えられています。このオモロは、若太陽と表現されたように若き英祖のことを謡っていますが、謡われた時期は同時代ではなく後年、英祖時代を慕って作られたオモロであったと考えられます。また、この若太陽の若は「若い」と同時に生命力や霊力、富の力が漲っている様子を意味します。土地を豊かにし、自分たちの生活を高めてくれた生命力あふれ、富の力もある優れた英雄として英祖を太陽と表現しているのです。

英祖は、1299年に71歳で亡くなりましたが、死後、自ら築いた壮大な墳墓ヨウド

レに埋葬されています。このヨウドレを調査した安里進は、埋葬されている男女のDNA鑑定を行いました。それによると男は北方系、女は南中国系という報告がなされています。興味深い事実です。

(2) 謝名思いのオモロ (察度王とされる)

本文	現代日本語訳
一 ぢやなもひや たが なちやるくわが こが きよらさ こが みぼしや あよるな	1. 謝名思い様は 誰が生んだ子だろうか こんなにも美しく こんなにも見たくあることだよ
又 ももぢやらの あらておちやる こちやぐち ぢやなもいしゆ あけたれ	2. たくさんの按司たちが 集め積みあげておいた宝庫の口を 謝名思い様こそ開けたのである
又 ぢやなもいが ぢやなうへばる (ウィーバル) のぼて けやげたる つよは つよからど かばやしやある	3. 謝名思い様が 謝名の上原に駆け上って 蹴り上げた露は 何と露からさえ香ばしくあることだ

(巻14-982)

【語 釈】

- 謝名思い = 謝名のお方。謝名は今の宜野湾市謝名。察度王を指します。
- たが = 誰が
- なちやる = 生んだ
- くわ = 子
- こが = こんなにも
- きよらさ = 美しい
- みぼしや = 見欲しや (見たい見たいと思って)
- ももぢやら = 百按司→多くの按司たち
- あらて = 従来の説では、「あぐて」とし、「あぐむ」(開けあぐねている説と積み上げる【アグヌン：今帰仁方言辞典】説がある)だが、尚家本をもとにした『定本 おもろさうし』では「あらて」とする。
- こちやぐち = 庫下口：財宝を入れた庫の入口
- ぢやなうへばる = 地名：謝名上原
- けやげたる = 蹴り上げた
- つよ = 露
- かばやしやある = 香ばしくあることです

これは察度王とされる謝名思いを讃えたオモロです。察度は、14世紀に浦添を根拠地に活躍した英雄的人物です。英祖王統4代玉城の死後、10歳で幼くして王位についた西威の時代になると母親が実権を握って政権を私物化したため、民心は離れ、人々は新しい王を求めるようになりました。

察度は、人間と天女との間に生まれたという神格化された出自譚を持ち（天人女房譚）、貧農出身ながら勝連按司の娘と結婚し、国土経営に頭角を現し、百姓に鉄製の農具を与え、村を豊かにしたことで民心を獲得していきました。中山の諸按司は、西威が1350年に死ぬと彼の世子を廃し、浦添按司の察度を王に推挙しました。

また、1372年、明の太祖皇帝が東アジア・東南アジア諸国に入貢を促す使いを出す一環として、沖縄にも揚載を使わせて、陶器、磁器、鉄器を手土産に入貢を進めました。察度は、喜んでそれに応じ、弟の天願按司・泰期を入貢させました。貢物は、馬と硫黄が主で、前者は軍事用、後者は火薬の原料として喜ばれました。太祖は入貢を歓迎し、察度に中山王の称号を与え、暦、王服、金印、陶器、鉄器などを返礼に贈ったとされます。

このオモロには、反復部ありません。オモロが新形式に変わっていく時代のものだと考えられます。

第1節では「謝名思い（察度）様は誰が生んだ子ですか こんなにも美しくこんなにも見たい見たいと思わせるほど美しい」と、まず謝名思いの出自や姿形の麗しさ賛美しています。「誰が生んだ子ですか」という反語的な表現には「察度が天女から生まれた貴人」であることが含意されています。

第2節では「たくさんの按司が待ち望んだ宝庫を謝名思い様が開けてくださったのです」と謝名思いの業績が讃えられます。財宝の扉を開けるとは、1372年の中国との交易開始を指しています。

第3節は、第1節、第2節を総合して謝名思いのすばらしさを露の光と香りで象徴しています。「謝名思い様が、謝名の上原に駆け上って、蹴り上げた露は、なんと露からさえ香ばしくあることだ」と謡います。朝日を受けて光り輝く白玉の露も、謝名思いに触れただけで、香ばしい香りを発散するというのです。この露は一つではなく、上原を走り登る謝名思いの足もとからいくつも飛び散る露です。走り登る謝名思いの力強さ、そして露を香ばしく変容させる秀麗さを表現しています。日本文学において、露とは、はかなさの象徴でした。しかも、そのはかなさは、「露と消え去る」という視覚的な表現でした。しかし、このオモロにおいては、露は力強さのシンボルであり、その訴えるところも香りでした。ここにこのオモロの新しさがあります。琉歌にも「とよむ謝名も糸が 謝名上原のぼて けあげたる露の玉のきよらさ」（『琉歌全集』1703番歌 p.357）というものがありますが、これは露の美しさを視覚で表現しており、日本古来の伝統に沿った平凡な歌になっています。露を匂いで表現したこのオモロの方に、より新しい文学的な感覚を感じます。

（3）勝連の阿麻和利

① 讃えられる土地と英雄

本文

- 一 勝連の阿麻和利
十百歳 ちよわれ
- 又 肝高の阿麻和利
- 又 勝連と似せて
- 又 肝高と似せて

現代日本語訳

- 1. 勝連の阿麻和利は
一千年の末までましませ
- 2. 肝高の阿麻和利は
一千年の末までましませ
- 3. 勝連と似合って
一千年の末までましませ
- 4. 肝高の勝連と似合って
一千年の末までましませ

(巻16-1129)

【語 釈】

- 阿麻和利＝勝連按司であるアマワリ
- 十百歳＝一千年で永遠という意味
- 肝高＝「心意気が高い→霊力が高い」と勝連全体を美称する表現。
- 似せて＝お似合い

このオモロは勝連按司阿麻和利を謡ったものです。勝連は、今のうるま市にあり勝連半島の付け根に勝連グスクは位置します。阿麻和利について、皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。沖縄の人にとって、阿麻和利は決していいイメージでないようです。

阿麻和利は、北谷屋良村の百姓の出ですが、のち住民の苦しみを顧みない勝連按司の茂知附を倒し、尚泰久王から勝連按司に封じられました。やがて、阿麻和利は国王の娘、百度踏揚を妻に迎え、その地位を固めます。そして、王位を狙うようになった阿麻和利は、中城城を構える護佐丸と対峙し、「護佐丸に謀反の心あり」と讒言して滅ぼしてしまいます。しかし、阿麻和利の野心を察知した百度踏揚と従者大城賢雄が城を抜け出し、国王にそのことを告げ、今度は自分が滅ぼされてしまいます。1458年のこととされます。以上のような「護佐丸を讒言し、国王の地位を狙い、滅ぼされた逆臣」としての阿麻和利像は、18世紀に編纂された琉球王国の正史『中山世譜』や『琉陽』に描かれ、1719年に初演された組踊「二童敵打」によって決定的になります。

しかし、『おもろさうし』における阿麻和利像は勝連の英雄以外の何者でもありません。そのことを『おもろさうし』の研究によって発見した田島利三郎、伊波普猷の先駆的な研究により、阿麻和利像の転換が生まれました。

現在、うるま市の中高生による現代版組踊「肝高の阿麻和利」という演劇活動が生まれ、たいへん質の高い中高生の演技と踊りが人々の感動を誘っています。

さて、このオモロは勝連と阿麻和利がまさに似合いの組み合わせであることを謡っています。第1節は「(土地の神が守る)勝連の(英雄)阿麻和利」という名乗りから始まって

います。そして、反復部では「一千年の末までも治めてましませ」と阿麻和利を祝福します。第2節も、「土地の神が守る肝高＝勝連の阿麻和利は」に反復部が続き、阿麻和利はさらに祝福されます。肝高は勝連の美称です。第3節、第4節「勝連・肝高と阿麻和利はお似合いです」と勝連と阿麻和利が実にぴったりしている、すなわち土地と土地の英雄が一体であることを祝福しているのです。このぴったりしていることが地域と人々の繁栄を約束します。琉球の人々が大切にしてきた言葉に「ふさう（相応する）」があります。「ふさう」とは、二つのものが「ふさわしい関係」にある時、両者がともに栄え、豊かで平和な世の中が実現すると考えました。このオモロでは、それを「似せて」と表現しています。

オモロの思想は、クチウーユンです。オモロでは、死やケガレが謡われません。言葉での祝福が基本です。神、土地、人を寿ぐことで、繁栄や成功、平和が実現させるのです。ここでは、統治者と土地が相応しているということを謡います。土地とは、単に自然を呼ぶのではなく地霊（土地魂・国魂）を指します。地霊と統治者がぴったりしていることが重要なのです。土地の安定は、地霊がしっかりしているということです。ですから、両者がぴったりしていると予祝することで、土地の安定を現実化させるのです。こうした地霊と統治者の関係は、日本古代にも存在していました。斎宮制度です。これは朝廷に土地魂を差し出す制度ですが、実際には、地名を背負った娘を差し出すという形式でした。

もう一つ、見てみましょう。

本文

- 一 勝連の阿麻和利
玉御柄杓 有り居な
京 鎌倉 此れど 言ちへ 鳴響ま
- 又 肝高の阿麻和利

- 又 島治りの御袖の按司

- 又 国治の御袖按司

- 又 首里 おわる 太陽子す
玉御柄杓 有りよわれ

現代日本語訳

1. 勝連の阿麻和利は
玉御柄杓をお持ちですよ
京や鎌倉に此れを言って響かせよう
2. 肝高の阿麻和利は
玉御柄杓をお持ちですよ
京や鎌倉に此れを言って響かせよう
3. 島を支配する御袖の按司（阿麻和利）は
玉御柄杓をお持ちですよ
京や鎌倉に此れを言って響かせよう
4. 国を支配する御袖の按司（阿麻和利）は
玉御柄杓をお持ちですよ
京や鎌倉に此れを言って響かせよう
5. 首里いらっしゃる太陽なるお方こそ
玉御柄杓をお持ちです

(巻16-1134)

【語 釈】

- 玉御柄杓 =たまひしゃく。宝石の玉で作られた柄杓で、偉大なる支配者の権威の象徴だと考えられる。

- 有り居な = ありよな：お持ちですよ
- 鳴響な = 「とよま」未然形で志向形→言って響かせよう
- 御袖按司 = 袖は神のシンボルでした。そこで御袖按司とは、神に守られた按司を意味する。
 ※ 沖縄では、袖には呪性があるとする伝承が、少なからずあります。たとえば、「遊離した魂が袖に込められる」「深夜、屋外等でモノノケを感じた場合、着物の袖を顔の前に持って来て、それで透かして見るとモノノケの正体が見える」（波照間1999）
- 島治り・国治り=島・国を支配する。伊波普猷は「島ジリ」「島治り」「島知り」とする。相手を知るといことは支配することを意味する。沖縄では電話で「サリサリ」と言うが、日本語では「モシモシ（申し申し）」。「サリサリ」とは「知られ知られ（私はあなたに知られたい）」という意である。

これも勝連と阿麻和利双方を讃えるオモロです。第1節で「勝連の阿麻和利様が玉御柄杓を持っておられる」と声高らかに歌います。玉御柄杓は支配者の権威の象徴です。玉御柄杓は、神祭りで神酒をすくう聖なる柄杓かもしれません。神に土地の豊かな収穫を感謝して神聖な酒を神に捧げることは、同時に神からの祝福を受けることでもあります。支配者阿麻和利のすごさ、そして、このような宝石で作られた柄杓を持っている阿麻和利とそれを阿麻和利にもたらず勝連の豊かさを謡っています。第2節ではそれを繰り返し、第3・4節では「(玉御柄杓を持つ)阿麻和利様は、島々、国々を支配することができる神に守られた高貴な方です」と阿麻和利を褒めて讃えています。最終節に突然国王が出てきますが、これは後から付け足されたものかもしれません。そして、反復部では「(阿麻和利様のすごさを)京や鎌倉へ鳴り響かそう」と囃しています。勝連の人々にとって京・鎌倉は近い存在であったと考えられます。勝連と京・鎌倉は交易や人の交流が頻繁にあったようです。勝連はヤマトのミヤコを意識する琉球の先進都市でした。

② オモロに讃えられる勝連

阿麻和利と勝連を讃えるオモロとは別に、勝連を謡ったオモロが多数あります。

ア) 勝連の按司・貴人を讃えるオモロ

- ・「勝連の尊いお方は美しい手持ち玉をつけて」のオモロ（巻16－1135）
- ・「勝連の勝れた方が集まる」オモロ（巻16－1136・1138）
- ・「霊力高き按司様は親と調和して」のオモロ（巻16－1142）
- ・「勝連のしよさく思い様」のオモロ（巻16－1145）
- ・「勝連の勝れた方が集まる」オモロ（巻16－1136・1138）

イ) 勝連の神・神女を讃えたオモロ

- ・「妹君は勝って」(巻16-1143)

ウ) 勝連との交易を謡うオモロ

- ・「北からは照間、南からは浜川に」のオモロ(巻16-1140)
- ・「勝連人の北方の島々への航海」のオモロ(巻13-867・938、939)

エ) 勝連と他の地域の交易を謡うオモロ

- ・「北谷の引き出物は糸織の鎧」北谷と勝連の関係を示すオモロ(巻14-1105)
- ・「勝連マミヤニヤコに会うため」苦心する首里の男の恋のオモロ(巻14-996)

これだけ多くのオモロが勝連を謡っているということは、この当時、琉球において勝連がかなりの力をもった都市であったことの証明でもあります。柳田国男は、それにいち早く気づき、『海上の道』で、沖縄本島の西海岸が政治・経済の中心になって開ける以前に、東海岸に有力な勢力圏が存在したことを指摘し、それを「勝連文化圏」と名づけました。オモロは、その存在を証明しています。阿麻和利は、その勝連にあって人々を率い、ヤマトの京都や鎌倉までその世界を広げていったのです。

ここで、勝連を讃えたオモロを一つ読み解いていきましょう。

本文

- 一 勝連わ 何(なお)にぎや 譬ゑる
大和の 鎌倉に譬ゑる
又 肝高わ 何にぎや

現代日本語訳

1. 勝連は何に譬えるべきだろうか
日本の鎌倉に譬えるのだ
2. 肝高は何に譬えるべきだろうか
日本の鎌倉に譬えるのだ

(巻16-1144)

【語 釈】

- 何にぎや=何に

「勝連の繁栄と賑わいは日本の政治・経済の中心都市鎌倉に譬えるべきだ」と勝連を誇らしげに謡っているオモロです。自分たち勝連と比肩できるのは日本の中心都市鎌倉以外ないという宣言です。このオモロは、勝連の人々が実際に鎌倉と交易・交流をしていた事実の反映だと考えられます。勝連の人々の自信に満ちたオモロです。

本文

- 一 勝連わ太陽(テダ) 向かて
門(ヂヤウ) 開けて
真玉金(コガネ) 寄り合う
玉の御内(みうち)
又 肝高の 月 向かて

現代日本語訳

1. 勝連は太陽に向かって
門を開けて
真玉・黄金の寄り集まる
玉の御内であることよ
2. 肝高が月に向かって
真玉・黄金の寄り集まる

又 勝連わ けさむ 今も
按司 選ぶ

玉の御内であることよ
3. 勝連は昔も今も
按司を選ぶよ
真玉・黄金の寄り集まる
玉の御内であることよ
(巻13-1133)

【語 釈】

- 寄り合う＝寄り集まってくる（すごい土地である）
- 玉の御内＝勝連城の国魂が降りる御嶽
- 月＝望月
- けさむ＝昔も今も

第1節で「勝連は太陽に向かって門を開いている」と高らかに謡い始めます。東方に向い門を開くとは朝の輝く太陽の光をグスクの内に招きいれ、太陽神の祝福を受けることを意味します。第2節では「月に向かって門を開いている」と謡います。月は夜の支配者でした。東に向い望月の光を招きいれ、月の祝福も受けているのです。太陽と月の祝福をいっぱい取り込んだ勝連。これ以上の褒め言葉はないほどの表現で讃えられた勝連を反復部では「真玉・黄金の寄ってくる素晴らしい玉の御嶽よ」とさらに褒め称えます。

そして第3節で「その勝連は昔から今まで支配者である按司を選んできた」といいます。琉球では「按司は国を選ぶ」「国は按司を選ぶ」という考えがありました。土地の支配者は誰でもいいわけではないのです。神に祝福される土地に「ふさう」、先のオモロの表現でいうなら「似せた」支配者がいて初めて土地は栄えるというのです。そうして選ばれた土地とぴったりした人物こそが阿麻和利だったのです。

このほか、勝連を褒め称えたオモロとして

- ・「勝連はどのように勝れた国か」と勝連を誇ったオモロ（巻16-1147）
- ・「霊力高いオワモリ神女に祝福される勝連」と賛美したオモロ（巻16-1131）
- ・「江洲から見た勝連を讃える」オモロ（巻16-1163）
- ・「オワモリ神女が勝連を創ったと讃える」オモロ（巻16-1142）
- ・「望月神女が出現し勝連を祝福」るオモロ（巻16-1137・1139）

があり、勝連に対する人々の祝福の言葉があふれています。

6. オモロに謡われた古琉球社会

(1) 地域社会間の交流

本文

一 きたたんにおわる

現代日本語訳

1. 北谷にいらっしゃる

- | | |
|---------------------------------|--|
| うらの世のぬしの
せざよ めづらがで | 浦の世の主様が
兄者を見まほしく思って |
| 又 けおの よかる ひに
けお の きやがる ひに | 2. 今日の良き日に
今日の輝かしい日に
兄者を見まほしく思って |
| 又 大みきは つくて
さかぐらは たてて | 3. 大神酒を造って
酒蔵を建てて
兄者を見まほしく思って |
| 又 かつれんに おわる
おもひせざ つかい | 4. 勝連にいらっしゃる
敬愛している兄者をお招きし
兄者を見まほしく思って |
| 又 なおが（ヌーガ） ひきいちへもの
なおが てづともの | 5. 何が引き出物だろう
何がお土産の品だろう
兄者を見まほしく思って |
| 又 いとおどしの よろい
まいとおどしの よろい | 6. 糸緘の鎧
真糸緘の鎧
兄者を見まほしく思って |
| 又 おれど ひきいちへ物
おれど てづと物 | 7. これこそが引き出物だ
これこそがお土産の品だ
兄者を見まほしく思って |

(巻15-1105)

【語 釈】

- 浦の世のぬしの＝浦、即ち地域の 世の主は按司
- せざ =シージャ、兄者
- めづらがで =珍しがって→珍しいから会ってみたいなと思い
- おもひ =思い：思っている→敬愛する
- なお =何が
- てづともの =手、チトウ（苞ツト）、もの→お土産の品
- いとおどしのよろい＝糸緘の鎧：ヤマトからの輸入品
- まいとおどしのよろい＝真糸緘の鎧：ヤマトからの輸入品

このオモロは、北谷の「浦の世の主」が勝連の兄者を招いて饗応する内容です。第1節で「北谷の浦の世の主が兄者に会いたがっている」ことを謡い、第2節で「今日の良き日、今日の輝きし日」とよき日を選び、第3節で「神酒を造り、酒蔵を作って」饗応の準備をし、第4節で「勝連にいる敬愛する兄者」を招き、第5節で「大和からの輸入品である糸緘の鎧、真糸緘の鎧を引き出物として贈る」と謡っています。

このオモロから、この時代の地域社会のあり方をうかがうことができます。沖縄本島西海岸に位置する北谷に本拠をおく「浦の世の主」と東海岸にいる勝連の兄者が実際の血縁関係にあったと考えられなくはありませんが、これは擬制的な兄弟関係であったと考えるべきでしょう。この沖縄本島の中部で東西対になる北谷と勝連の按司同士が擬制的な兄弟関係を結び、招き招かれる関係、貴重な輸入品を贈り贈られる関係にあったということです。神酒を造ってもてなすことは、単なる飲み物のサービスではありません。貴重な穀物を兄者に捧げることを意味しており、輸入武具の贈答も含め、北谷と勝連の力関係がうかがえる内容になっています。この時代に、後に間切りと呼ばれる地域社会が、互いに独立していた段階から、贈答・交流の関係に発展してきたことがうかがわれます。

巻2-60番オモロには

本文

- 一 屋宜から 上る
直垂や 鎧
誰が着ちへ 似せる
按司添いでだす
似せれ 召しよわちへ
- 又 比嘉から 上る

というように屋宜や比嘉から中城城にヤマトから輸入した鎧が献上されたことが謡われていて、ヤマトとの交易が地域社会を超えた交流や、次に触れる政治的な上下関係に大きな関わりをもっていることがわかります。

(2) 政治的中心と地域社会の関係

本文

- 一 ひやくなから のぼて
ねくになら のぼて
しま そろて
ともとすへ みおやせ
- 又 しよりもり ちよわる
おぎやかもいがなし

現代日本語訳

1. 百名から上って
根国から上って
島々は揃って
十百精を奉れ
2. 首里杜にいらっしゃる
オギヤカ思イ様
島々は揃って
十百精を奉れ

(巻17-1230)

【語 釈】

- ひやくな =南城市玉城百名
- ねくに =国の根→自分たちの国から

- ともすへ みやおせ=千年の末長く 奉れ
- ちよわる =いらっしゃる
- おぎやかもいがなし=尚真王

これは、玉城百名から首里へ「上って」、貢物を奉ることを謡ったオモロです。反復部では「首里の国王へ鳥々は揃って千年の精（霊力・支配力）を奉れ」と謡っています。首里を上、自分たち玉城百名を下に見る政治的関係が成立していたことを示しています。この政治的な関係は、当然経済的な関係と共にあり、霊力という宗教的な貢物から穀物をはじめとする商品的な貢物を捧げる関係が生まれています。このオモロからは、首里即ち、中山に権力が収斂していくことがうかがえます。

7. 『おもろさうし』 とことば

ここまで、オモロを読み解きながら、『おもろさうし』に描かれた世界をさまざま見てきました。本節ではオモロを生み出した琉球語の特徴をオモロに登場する地名を素材に考えていきたいと思えます。

※ なお、波照間教授の実際の講義では、琉球語の発音は発音記号で表記していましたが、本節ではローマ字で表記しています。

（1）日本語と琉球語

沖縄の言葉は、日本語とルーツを同じくするものですが、いわゆる琉球方言は、日本語とは、大きくかけ離れた言葉になっています。これはもう、方言ではなく別の言語として琉球語と呼ぶべきだと考えています。以下、首里方言を例に、日本語と琉球語の違いを説明します。

現代使われている琉球語（首里方言）の特徴は次のようなものです。なおオモロで使われていた言葉をオモロ語としています。

① 3母音

- ・ 日本語の母音は5つ・・・a・i・u・e・o
- ・ 現代琉球語の母音は3つ・・・a・i・u（「え」は「i」、「お」は「u」に変化し3母音になっています）。

※ 米（kome）はクミ（kumi）、嫁（yome）はユミ（yumi）と発音されます。

- ・ オモロ語の母音は5つ・・・a i u e o（u）→「お」にoとuが混在していますが5母音です。

② 二重母音を避ける

- 琉球語は母音+母音を避けようとし、その結果、母音を一つ消し、長母音にします。

* 野菜	ヤサイ	y a s a i	⇒	ヤシエー	y a s e i
* 竿	サオ	s a o	⇒	ソー	s o i
* 前	マエ	m a e	⇒	メー	m e i
(m a e → m a i → m e i と変化)					

- オモロ語では二重母音の長音化は発生していません。しかし、組踊では長母音が使われています。『おもろさうし』の成立から80年ほどで組踊が生まれていますので、その間に変化が起こったと考えられます。

③ 口蓋化現象

- 日本語では起っていません。
- 琉球語では5母音から3母音になったことに伴って子音も変化し、口蓋化現象が起りました。

* 烏賊	イカ	i k a	⇒	イチャ	i c h a
* 徒	イタズラ	i t a z u r a	⇒	イチャンダ	i c h a n d a
* 如何	イカガ	i k a g a	⇒	イチャガ	i c h a g a
(現在ではチャーガ c h a : g a まで変化しました)					

- オモロ語では、すでに口蓋化現象が起っています。

④ 語形の変化

- 現代琉球語では語形が大きく変化しています。

* 動詞の終止形が～ユン（日本語動詞連用形+オリの形） 例：書き+オリ→カチュン
* 形容詞の終止形が～サン、～シャン（日本語形容詞語幹+サ+アリ） 例：高サ+アリ→タカサン、しおらしサ+アリ→シオラシャン

⑤ 日本古語の残存

- 現代の琉球語には、本土では使われなくなった日本古語の語彙が残存しています。
ヒラ=坂 アーケーजू=蜻蛉（あきつ）

(2) オモロ語の特徴

このような違いが現在使われている琉球語と日本語にはありますが、オモロ語も現代の琉球語と様相を異にします。日本古語から分れた言葉がオモロ語時代を経て、さらに時間をかけて現代の琉球語に変化してきたのです。

ここで、前段と重なるところもありますが、オモロ語の特徴を整理しておきます。

① 母音

- ・ a・i・u・e・oの5母音で、3母音化は起こっていません。エ段はそのままですが、オ段は部分的にウ段へ変化しているものあり混在しています。
- ・ 「へ」「ゑ」「い」については「い」音の表記とみられます。

例：ち^へねん

ち^ゑねん は知念の表記で、「へ」「ゑ」「い」は一つの音「い」を表す

ち^いねん

- ・ 二重母音の長音化は起こっていません。
- ・ しかし、a i や a u や o u のように、狭い母音が後に来る時は後の母音が脱落する傾向があります。

例：しりぎや（尻がい：5 1 4）、ひやし（拍子：4 8 4）

おもな（思うな：5 4 6）

② 子音

- ・ 「ジ」z i と「ヂ」d z i、「ズ」z u と「ヅ」d z u の区別は失われています。本土でも高知ではこの区別が生きているそうです。
- ・ 撥音はあります。例：なんか（七日：7 3 2）
- ・ 促音はありません。例：みきや（三日：1 0 4 7）
- ・ ダ行がラ行に変化した例があります。例：こくら（許々良コクダ：6 7 8）
- ・ 語尾のシが脱落することが稀にあります。例：むか（昔：1 7 2）ももと（百年：2 9）
- ・ 口蓋音化現象がさかんに起こっています。i 母音の影響で子音が口蓋音化する現象です。

例；が→ぎや、いま→いみや、きよわる→ちよわる

（3）地名に見る『おもろさうし』の表記

沖縄には、地元の人でしか読めない独特の地名が多数あります。なぜ、そのような読みになったのかをモロ語を参照することで探ることができます。それは、オモロ語がすべてひらがな表記されているため、当時の読みを復元することができるからです。いくつかの例をあげてみましょう。

① 北谷

オモロ語では「キタタン」（巻15－1105）と表記されていますが、現在の音では「キチャタン」です。これは、200年くらいかけて現在の発音に変化してきたと考えられます。

キタタン k i t a t a n

↓

キチャタン k i t a c h a n

↓
 ヒシャタン hishatan
 ↓
 イチャタン ichatan
 ↓
 チャタン chatan

② 勢理客・瀬利覚

これは、現在、浦添市、今帰仁村、沖永良部島知名町にある地名で「ジツチャク」あるいは「ジツチヨ」と呼びます。しかし、『おもろさうし』には「せりかく」「ぜりかく」（巻14-1072）とあり、以下のような変化が想定されます。

ゼリカク z er i k a k u
 ↓
 ジリカク z i r i k a k u
 ↓
 ジリキヤク z i r i k y a k u
 ↓
 ジリチャク z i r i c h a k u
 ↓
 ジツチャク z i c c h a k u
 ↓
 ジツチヨウ z i c c h a u
 ↓
 ジツチヨ z i c c h o

ジリチャクからジツチャクへの変化にはr iの促音化が働きました。このジツチヨまできた変化は、与論島ではジツチヨz i c c h oからリツチヨr i c c h o:へと変化して、漢字表記では立長になっています。

③ 保栄茂

現在、豊見城市保栄茂は「ピン」といいますが、『おもろさうし』では「ほゑむ」（巻8-397）と表記されています。これは次のような変化が想定されます。

ホエム h o e m u
 ↓
 ボエム b o e m u
 ↓
 ブイム b u i m u

↓
ビン b i n

④ 波平

現在、ハンジャと読むのが一般的ですが、『おもろさうし』では「はひら」（巻20-1335・1336）と表記されています。これは次のような変化が想定されます。

ハヒラ h a h i r a
↓
ハビタ h a b i d a
↓
ハビジャ h a b i d z a
↓
ハムジャ h a m u d z a
↓
ハンジャ h a m d z a

⑤ 天願

現在、ティンガンと呼ばれている天願ですが、『おもろさうし』では「てくらん」（巻16-1164・1165）でした。これは次のような変化が想定されます。

テクラン t e k u r a n
↓
テグラン t e g u r a n
↓
テグアン t e g a n
↓
ティグアン t h i g a n
↓
ティンガン t h i n g a n

⑥ 喜友名

現在、チュンナと呼ばれていますが、『おもろさうし』では「きとむな」（巻15-1101）です。この変化は次のように想定できます。

キトムナ k i t o m u n a
↓
キトウムナ k i t u m u n a
↓

キチュムナ	k i c h u m u n a
↓	
ヒチュムナ	h i c h u m u n a
↓	
チュムナ	h i c h u m n a
↓	
チュンナ	c h u m n a

[3] まとめ—神と人を結ぶ『おもろさうし』—

1. 祭祀国家琉球の神歌

本章では、『おもろさうし』を、再度、祭祀国家琉球という視点から考察して、まとめにしたいと思います。

(1) 儀礼の場で神の意志を伝えるオモロ

次に紹介する『中山世鑑』の記事は1441年、第二尚氏王統第二代尚宣威の即位式に起こった事件を記したものです。

御即位ノ年ノ二月ニ、陽神キミテズ（リ）、現ジ給ケレバ、尚宣威、是ハ必定、我が慶賀ノ為ニ、ヲリサセ給、神ニテゾアラント、悦思召テ、ヲヌシハ帝座ニ付セ給テ、久米中城王子ヲバ、帝坐ノ腋ニゾ立給。旧例ニハ、君々・神々、内原ヨリ出給て、キミホコリノ前ニ、東面ニ立給ケルガ、今度ハ例ニ替リ、西面ニゾ、立給ケル。去程ニ、上君ヲ初トシテ、下老若男女ニ至ルマデ、是ハソモ何事ヤラント、魂ヲ冷シ、手ヲ握リ、カタヅヲ飲デ、居タル処ニ、宣託有ケルハ

首里ヲハルテダコウガ、ヲモヒ子ノアソビ、ミモノアソビ、ナヨレバノミモノト、ヲモロヲゾ、メサレケル。尚宣威、聞召給て、我其徳ニハ非ズシテ、帝坐ヲ汚シタル事、是天ノトガメ、有ケルゾヤトテ、在位六箇月ニシテ、御位ヲノガレテ、世子久米中城王子ヲゾ、即位成奉リ給。是為尚真公。

(波照間2013a【「中山世鑑」『琉球史料叢書』第5巻 井上書房1962 p. p. 56-57より】)

<現代語訳>

(第二尚王統初代の尚円王のあと、世子尚真(久米中城王子)が幼いため、尚円の弟、尚宣威があとを継いで王位につきました—引用者補足) 即位の年の二月に、陽神キミテズリが出現されたので、尚宣威は、

「これはきっと余の即位の慶賀の為に、現れ給うた神であろう」

と喜ばれて、自らは王座に座り、久米中城王子を王座の側に立たせられた。これまで、君々、神々は内原から現れると、キミホコリの前で東に向かってお立ちになるのだが、今回は今までと違って、西に向かって立たれた。それで、王をはじめ、居並ぶ全ての老若男女が、これは一体何事かとびっくりして、手を握り固唾を呑んでいるところに託宣があった。

「首里にいらっしゃる国王の、愛する子の神遊びは、見事な神遊びは、拍子をとって舞えば見事である」

と神がヲモロを唄ったのを聞かれた尚宣威は、

「徳が無い者が王座に登ったので、天が余を咎め給うたのである」
と言って、在位六ヶ月で王位を逃れて、世子久米中城王子を即位させた。これが尚真公である。

(『訳注 中山世鑑』2011 p.p.134-135)

琉球王国最大の祭祀儀礼の一つが、国王の即位式でした。琉球王国の即位式というと中国皇帝から派遣された冊封使による即位儀礼の印象が強いです。琉球王国にも独自の「君手擦りの百果報事（きみてずりのももがほうごと）」という即位儀礼がありました。「君」とは、高級神女のことですが、神女に降りた神を意味します。「手擦り」は、手を合わせて擦り合わせることです。「百果報」というのは、たくさんの果報＝いいことがあるように祈ることです。つまり、「君手擦りの百果報事」とは、果報のために神に祈る神事のことなのですが、この即位式でキミテズリとは「陽神キミテズ（リ）、現ジ給ケレバ」とあるように神の名とされています。また、『琉球国由来記』巻20-1には久米島の伊敷索按司の即位にも「君手擦りの百果報事」の記事があり、沖縄各地で同様の即位儀礼が執り行われていたことが想像されます。それを首里王府が琉球国王の即位儀礼として再編したものと考えられます。この記事からは、国家祭祀に関して重要な事柄をいくつか見つけることができます。

- ・「君手擦りの百果報事」には陽神「キミテズリ」が出現すること。
- ・「君手擦りの百果報事」は首里城正殿とその前の御庭を舞台とすること
- ・「君手擦りの百果報事」では国王は帝座に着き、神の祝福を受けること
- ・「君手擦りの百果報事」では神（が降臨した高級神女集団）は王に対面（東面）すること
- ・「君手擦りの百果報事」での神の祝福にはオモロが謡われること

この5つの条件がすべて成立して国王の即位が神から祝福され、公認されると考えられます。しかし、今回の尚宣威の即位式には、陽神「キミテズリ」は出現したが、王と対面しませんでした。実際は、神の降臨を受けた高級神女集団が、王に背を向け、尚宣威ではなく前国王の世子、尚宣威の甥の久米中城王子をオモロで祝福し、その結果、王位は後の尚真王、久米中城王子が継ぐ結果を生じたのです。

ここからオモロの持つ強い力を見出すことができます。おそらく、この事件は、わが子を国王にしたい尚真王の母によるクーデターであったと思われるのですが、母と高級神女集団は結託していたとも考えられます。しかし、ここで重要なことは、神の意志を伝える手段としてオモロが用いられたことにあります。オモロが国王からその地位を剥奪するほどの効力をもったものと公認されていたのです。

ここで謡われたオモロは巻12-663番オモロ

本文

- 一 首里 おわる てだこが
 思い子の遊び
 見物遊び
 なよればの 見物

だと考えられますが、巻12にはこの他に「君手擦りの百果報事」の時に君神から賜ったという詞書のあるオモロが10首（694、695、732、733、735、737、739、740、743、745）あります。また、第4巻にも同様の詞書を持ったオモロが6首（実数は3首。209=295、210=296、211=297）あります。このことはオモロが神の祝福の言葉として首里王府の祭祀の中で最も重要な位置を占めていたことを物語っています。

先にも見てきたように、琉球最大の国家プロジェクトである航海や交易に関してもオモロは船や神を祝福する儀礼の場でその成功を予祝する働きを果たしていました。琉球はオモロを通して神への祝福を行い、また神からの祝福で守護され、発展していったのです。祭祀によって国家を経営する琉球。祭祀国家琉球とオモロは切ってもきれないものでした。このようにオモロは神と人とを儀礼の場をつなぐ祭祀歌謡であったのです。

（2）儀礼の場以外でも力を発揮するオモロ

しかし、オモロは儀礼の場で効力を発するだけでなく、危機に直面した人の危機をその場で回避する呪言としての機能も持ち合わせていました。1743～45年に編纂された琉球王国の正史『琉陽』に、こうした緊急の危機回避としてのオモロの効験を描いた記事があります。関係記事を二つ紹介します。（107・211の本文共、波照間2013bより）

<107 夏居数、旨を奉じて阿摩和利を攻め滅ぼす。>

首里州に一忠臣あり。姓は夏、諱は居数、名乗は賢雄、俗に大城と名づく。其の人と為りや、忠義剛直にして武勇無比、骨格人と異なり、勢い狼虎の如し。是に由りて、当時の人、鬼大城と叫ぶ。此の時、王女踏揚按司、勝連按司阿摩和利に嫁す。大城、其の僕臣と為りて勝連に赴く。勝連按司は、身、儀賓に居るも、而も放肆邪侈、驕傲已に極まり、恒に弑の志有り。時に中城按司護佐丸、已に要途に当たり、恒に兵馬を整へてもって拒禦に供へ、厳然として居る。天順戊寅年、阿摩和利、護佐丸を王に讒慝して親族滅亡す。阿摩和利幸に其の志を得、歡喜窮り無し。密かに臣士を召して相議し、大いに軍馬を整へ、中山を攻むるを謀る。時に居数、其の機事を知り、密かに夫人に告ぐ。夫人大いに驚きて曰く、災禍遠からず、我が為に之を計れと。居数夜静まる時を待ち、夫人を背負ひ、其の難を逃去して首里に赴く。阿摩和利、夫人の逃去を知り、急ぎ軍兵に令して將に趕ひて之を殺さんとす。居数、鱷真を過ぐるの時、兵卒炬火して趕逐甚だ急なるを見るも、計の施すべき無く、天

を仰ぎ地伏し、大いに神歌（俗に御唄と云ふ）を唱ふ。即ち暴風大いに降り、兵火悉く滅す。居数喜びて夫人を負ひ、跑りて王城に至る。天未だ暁曙ならず。門に（テヘンにクチ）へて稟報す。王怒りて曰く、婦女と男と夜に乗じて来る。豈貞節なる者ならんや。夫人泣哭して将に押明森の樹木に縊らんとす。王、色を改め急ぎ門を開きて入れしむ。夫人其の事を詳報す。居数亦神歌唄う。王頗る之を信ずるも猶予して未だ決せず。首里殿内より神歌貢奏す。王、大いに其の女の節義を失わざるを喜び、且阿摩和利の叛逆を知り、即ち急ぎ令を伝えて四境の軍士を招聚す。未だ幾時ならずして阿摩和利、機事の密ならず、大城逃去し、若し先に手を動かさざれば災禍免れ難きを以て、親ら軍兵を率ゐて趕ひ来り、火を放ちて城を攻むること甚だ密、殺戦極めて急なり。幸に四境の軍士皆来りて相救助す。寡、衆に勝たず、阿摩和利大敗して走る。王、夏居数に命じて大将と為し、勝連を征討せしむ。

<大意>

阿摩和利の謀叛を首里王城に知らせるため、大城賢雄が阿摩和利夫人で国王の王女の踏揚が勝連城を逃走します。それに気づいた阿摩和利の追手に大城賢雄たちは迫られそうになりますが、その時、鬼大城がオモロを唱えると暴風が起こり、追手は壊滅します。そして、大城賢雄たちは無事首里王城にたどりつきますが、国王は夜、男と二人で夫のもとから逃走してきた踏揚の貞節を疑い、怒って門をあけませんでした。それを悲しんだ踏揚は、縊死しようとし、王は驚いて門を開けました。王城に入れた夫人と鬼大城ですが、夫人は阿摩和利のことを訴え、大城賢雄はオモロを唱えます。しかし、王はその訴えは聞くものなかなか行動をおこしません。そのうち首里殿内の神女たちが王にオモロを献上しにきます。それを聞き、王は夫人の訴えの正当性を認め、阿摩和利討伐を決意します。そして、王は大城賢雄を大将にして 勝連を征伐しました。

<211 首里の湛氏、三たび神歌を唱へて陡に波濤を静む。>

首里湛氏（数明親雲上）は、原来、美里郡伊覇の人なり。幼稚の時より深く神歌を嗜み、朝夕詠謡して敢へて懈怠せず。壮年に及ぶころ、詠謡妙を得たり。嘉靖年間、聖王、久高島に行幸す。湛氏、神酒司頭と為り、神酒を捧献して久高島に至る。時に聖王、鷓船に下来し、将に返棹せんとして帆を掛く。湛氏、鷓船に乗り、神酒を捧献す。中洋に回到するや、黒雲四に起り、風雨頻りに至り、東西分たず、狂浪澎湃として進退共に難し。是に於いて、湛氏、鷓船の頭に立ちて、神歌の曲を謡ふ。再三歌謡して、風波漸く静かに、天面四開して、鷓船恙無く与那原に到る。聖王より深く褒美を蒙り、家来赤頭職に擢んでられて、神歌頭と為り、黄冠を頂戴す。後、大島地方数明地頭職を賜はる。

<大意>

幼い頃から神歌（オモロ）に長けた湛氏が、国王の久高島行幸に神酒司頭として同行することになりました。国王が乗った船が沖に出た時に、黒雲が巻き起こり、暴風雨が起こ

り、波は船を翻弄し、進退不能になりました。その時、湛氏が船の頭に立ち、オモロを再三謡うと風雨は治まり、船は無事に与那原に至ることができました。湛氏は、国王から褒美をいただき、家来赤頭職に抜擢され、神歌頭になって黄冠を頂戴することになりました。その後、大島地方数明地頭職を賜りました。

この記事からオモロの三つの効力が分ります。

ア) 天変を起こす効力：オモロによる暴風の惹起

大城賢雄がオモロを唱えると暴風が起こり、追手は壊滅したこと

イ) 神の審判による正当性獲得という効力：オモロによる王の決心

大城賢雄がオモロを唱えたが、王はその訴えは聞くものなかなか行動をおこさなかったが、首里殿内の神女たちが王にオモロを献上しにき、それを聞いた王が夫人の訴えの正当性を認め、阿麻和利討伐を決意したこと。

ウ) 天変を静める効力：オモロによる暴風の鎮静

湛氏が船の頭に立ち、オモロを再三謡うと風雨は治まり、船は無事に与那原に至ることができたこと

いずれも、危機に直面した人間がオモロを謡い、その結果、危機は回避されます。危機に対して、オモロを神に献上することで、オモロを通じた願いを神が受け入れ、自然現象を起こしたり、逆に静めたりして神意を人に伝えたのでしょう。また、疑いを持たれた人の正当性を証明するオモロを神女に謡わせることで危機を回避させるという方法もとっています。オモロは、十分用意された儀礼の場だけではなく、危機発生その場でも効力を発揮する呪言として認識されていました。

このように祭祀国家琉球のあらゆる場面でオモロは力を発揮していたのです。

2. 『おもろさうし』－その後と未来－

祭祀国家のさまざまな機能を担ったオモロでしたが、17世紀初頭の第3回編纂後は、その創作は途絶えました。そして、18世紀には、すでにその内容が理解困難になっていたようです。1710年に再編纂された『おもろさうし』の一つ安仁屋本には言葉間書（語注）が書き込まれていましたし、1711年には、理解困難なオモロ言葉の辞典ともいえるべき『混効験集』が編まれています。このことは、オモロの言葉や内容が人々に理解困難になっていたことを表していると考えられます。そして、このような経過をたどり、『おもろさうし』は明治初期には人々からは、忘れ去られた不可解な文書と化していました。

その『おもろさうし』を再発見し、世に広める先駆けとなったのが1891（明治24）年に沖縄にやってきた国語教師、田島利三郎であり、それを受け継いだ伊波普猷でした。

伊波は「『おもろさうし』は沖縄の万葉集である」と高らかに宣言し、『おもろさうし』に沖縄の人々の心のふるさつを見だし、沖縄が世界に誇る古典として日本文学に位置付

けたのでした。

『おもろさうし』は、まさに沖縄の人々の心のふるさとです。そこには、沖縄の人々の生活や祈り、すなわち神と自然と人と交感が見事につまっています。『おもろさうし』を研究するということは、沖縄の人々の心を学ぶことなのです。講義の最後に浦添城に眠る沖縄学の父、伊波普猷の墓に立つ碑に書かれた彼の畏友東恩納寛惇の言葉を紹介してこの講義を終えたいと思います。

彼ほど沖縄を識った人はいない 彼ほど沖縄を愛した人はいない 彼ほど沖縄を憂えた人はいない 彼は識ったが為に愛し愛したために憂えた 彼は学者であり愛郷者であり予言者でもあった

第2部

『おもろさうし』学習カリキュラム構想

I 『おもろさうし』教材論

[1] 『おもろさうし』を学ぶ意義

1. 沖縄の中学生にとっての『おもろさうし』

沖縄の中学生にとって『おもろさうし』を（はじめとする沖縄古典文学を）学ぶ意義は明瞭である。沖縄県立高校で長年、国語の授業実践に取り組んできた平山（1986b）は『おもろさうし』を学ぶことの意義を「自己の父祖の魂に出会うことであり、ひいては自己の再発見につながる事柄だ」とし、

地方オモロを見ていくと、古琉球の姿がほの見えて来ることは事実だが、そのことと同時に、われらの時代に対する多くの訓えも見えてくる。わたし達は、それらのことを学習材として、子供達に提供していかなければならない。

と述べる。そして、平山（1986a）は同時に「おもろ」教材化の観点と効用を次のように提示している。これは『おもろさうし』のカリキュラム化についての先駆的な業績である。

(1) 文化的な面から

- 国語科教材として郷土（地域）文学を取り上げることにより、地域の可能性を学び取らせる。
- 地域の文学を、学的レベルに於て普遍化させる。

(2) 言語事項の面から

- 「おもろ」は、日本語と沖縄方言が適当に混用されている一種独特な表記がなされている。それを機会に、沖縄語が日本語と祖を一にすることの原理を学ばせる。
- 国語の言語知識によっておもろを学び、国語の力をより深く、豊かにさせる。

(3) 言語表現の面から

- おもろ語のもっている言語のリズムと、自然描写の美しさを味わわせる。
- 南島的な詩の発想を学ばせることにより、創造性をはぐくむ。
- 地域の文化に興味をもたせることにより、文化的な「心」を豊かにさせる。

さらに、平山の提起から約四半世紀後、高校生のための沖縄古典文学教科書として『新編 沖縄の文学』が発刊された。その中には『おもろさうし』も重要な教材として採録されている。その監修者である波照間（2010a）は、同書の発刊のねらいを

（『新編 沖縄の文学』を発行したのは）これからの沖縄を担う若き沖縄人たちへ、自らの父祖の想念と創造の世界にふれてもらい、かつ、人間は自らの心中にたぎる感情や思念を表現して止まないのだということを、父祖も呼吸し現在また高校生自ら呼吸している沖縄の風土の中で共感してもらいたかった

と述べている。

沖縄の子どもにとって、『おもろさうし』を学ぶことは、

- ・ 父祖の生きた歴史と風土の中で伝承されてきた文学を学ぶことを通して、父祖の魂に会うこと
- ・ その魂との出会いを通して、自己を再発見し、沖縄を再発見すること

だと言することができる。これは、『おもろさうし』にとどまらず、琉歌、古謡、組踊等々を含んだ沖縄古典文学の教材化全般に関する意義であろう。

このように沖縄の生徒にとって『おもろさうし』をはじめとする沖縄古典文学を学ぶ意義は極めて明瞭である。では、私たち池田市の中学生にとって『おもろさうし』を学ぶ意義はどこにあるのだろうか。

2. 『おもろさうし』教材化の歩み

日本本土と根は一にするが、独自の歴史と文化を育んできた沖縄の中学生が自らの父祖の生み出した文学『おもろさうし』を学ぶことと、池田市の中学生が自らの文化とは異なる伝統にある『おもろさうし』を学ぶことは、まったく同じではないことは明らかである。

そのことを考える前に、まず、『おもろさうし』教材化の歩みを紐解いてみたい。『おもろさうし』教材化の出発は、益田（初出1967）の古典教育の体系（試案）である。それは次のとおりである。

一 南の日本・北の日本

—わたくしたちの古典文学は大きなひろがりを持つ—

（アイヌの古典文学や沖縄の古典文学の珠玉を紹介し、日本の古典文学の狭い把握を避ける。）

天にとよむ（おもろ 仲原善忠訳）

フクロー神が所作をしながら唄った神謡（ユーカラ 知里真志保訳）

二 民衆の文学と貴族の文学

—生産階級は長らく口ことばの文学を育て上げた。支配階級は早くも文字を作り出して、文字の文学を育て上げた—

猿むこ（宮城県民話）

盆唄（長野県民謡）

草刈（大和物語）

三 呪禱と伝承

—若々しい民族の原始的想像力は、奔放に結晶しつづけた—

鯨祭りの歌（ウポポ 知里真志保訳）

あがる三日月（おもろ 仲原善忠訳）

黄泉比良坂の祝福（大国主の命の黄泉つ国逃亡譚）（古事記）

.....

十 口語の文学

—いきいきとした国語が、文学の新しい可能性を、片隅で示していた—

蚊相撲	(狂言)
イソポのハブラス	(天草本 伊曾保物語)
おあむ物語	

ここで、益田は「天にとよむ」と「ゑけ 上がる三日月」を取り上げ、『おもしろさうし』教材化の意義を示したが、その実現には少し時間がかかった。

その後、70年代に入り高校教科書に『おもしろさうし』が採録されるようになる(米嵩・村上 2013)。

「天にとよむ」	1973年—1982年：筑摩書房『古典Ⅰ甲』『古典Ⅰ乙』
	1986年—1999年：三省堂『国語Ⅱ』
	1983年—：角川書店『総合国語Ⅱ』
	1983年—1985年：角川書店『古典総合』
「ゑけ 上がる三日月」	1986年—1999年：三省堂『国語Ⅱ』
「真南蛮へ」	1992年—：(三省堂『古典Ⅱ』)
「白い風と蒲葵の花」	1992年—：(三省堂『古典Ⅱ』)
「天降りする神女」	1992年—：(三省堂『古典Ⅱ』)

こうして『おもしろさうし』の高校での採録が進む中、なかなか小中学校の教科書には採録されなかった。その理由は不明だが、アイヌ・沖縄の文学を日本古典文学と捉えてこなかった教育界の問題と並んで、祭祀歌謡集である『おもしろさうし』が小中学生の発達段階では学習が難しいと考えられていたのではないかと想像される(例えば、平山(1986a)も、高校段階での沖縄古典文学のカリキュラムを、学習の段階をふまえて、1年「組踊の学習と鑑賞」・2年「琉歌とそのふるさとめぐり」・3年「おもしろの学習」とし、高校の最高学年に『おもしろさうし』を配当している)。

そして、ようやく平成24(2012)年に初めて小学校国語教科書に「ゑけ 上がる三日月」(教育出版『ひろがる言葉 6年上』)が採録された。この背景には、今回の学習指導要領改訂で、国語科に伝統的な言語文化に関する事項が新たに導入され、古典文学教材が小学校低学年から豊富に配列されたこと、また義務教育最終段階では、古典の一節を取り入れながら文章を作成できる力の育成を掲げるなど古典学習の多様化があったと推察される。これは国際社会を生きる子どもたちにとって、自己確立の基礎となる自らの文化への深い認識を育てるための卓見である。こうして考えたとき、半世紀近く昔の益田の提案「南の日本・北の日本—わたしたちの古典文学は大きなひろがりをもつ—」が新たな姿で甦ってくる。これまでのヤマト言葉によって書かれた作品に限定されてきた古典学習から日本列島全域に広がる多様性をもった古典学習への発展である。従来の方葉集、古今集、平家物語、枕草子、徒然草、狂言、奥の細道に「アイヌユーカラ」と『おもしろさうし』を加えるだけで、日本列島の南北に広がる古典文学の豊かな多様性がイメージできよう。

3. 池田市の中学生が『おもろさうし』を学ぶ意義

池田市の中学生にとって、沖縄は決して遠い場所ではない。修学旅行や平和学習を通し、きわめて身近である。しかし、その身近さの中に、『おもろさうし』をはじめとする沖縄の古典文学が含まれているとは言い難い。沖縄に豊かな伝統的な言語文化が存在したことを知る生徒はほとんどいないし、教師がそれを教えることもほとんど行ってこなかった。

しかし、このことから、中学生が『おもろさうし』を学ぶ意義が逆照射されるとも言えよう。それは日本語と根を一にしながらも独自の歴史的・文化的な背景のもとで生まれた『おもろさうし』を学ぶことによって、沖縄の優れた古典文学の存在を知り、日本列島の言語文化の多様性を学ぶという意義である。つまり、修学旅行や平和学習で出会う沖縄の根っこに、このような優れた言語文化があることを知ることで池田市の中学生の沖縄認識が豊かなものになるということである。

さらに『おもろさうし』の学習は、沖縄認識を豊かにするばかりではない。『おもろさうし』には、普遍的な文学的価値がいくつも存在する。その一つに『おもろさうし』には、ヤマト古典文学には欠落した領域の作品群が存在することがあげられる。例えば、『おもろさうし』の「船糸とオモロ」の巻は、ヤマト文学にはごくわずかしかない海洋文学の宝庫である。海と船と人、そして神の関わりを謡った「祈りとしての海の文芸」が数多く採録されている。また、「地方オモロ」の巻には、ヤマト古典文学には数少ない土地と英雄の讃歌が豊かに美しく謡われている。また、オモロの言葉（オモロ語）のもっている言語のリズム、自然描写の美しさは、中学生の言語感覚を豊かにすることは疑いない。そして、オモロに流れている神と自然と人間の交感やクチウーユン（語ったことは実現する）の思想は、これまで教科書に採録されてきたヤマト古典文学にはないものである。

ヤマトの伝統的な言語文化に加え、この沖縄的発想の歌謡を学ぶことは子どもたちの国語力を分厚いものにしてくれる。すなわち、『おもろさうし』を学ぶことは、沖縄を学ぶことに加え、豊饒な南に広がる文学世界に中学生を出会わせ、彼らの言語認識や文学的な感受性を深めるに違いない。

以上を踏まえ、先の平山（1986a）に習って中学生が『おもろさうし』を学ぶことの意義を整理してみたい。

（1）文化的な面から

- 日本の伝統的な言語文化の豊かな多様性を学ぶ。
 - ・ これまで学んだ古典詩歌（万葉・古今・新古今・百人一首）とは、音数律も語彙も歌形も異なる「歌」が沖縄に伝えられてきたことを知る。
- 作品を生み出した沖縄の風土・歴史・思想を学び、沖縄とヤマトの精神のあり方を考える。
 - ・ 沖縄とヤマトの歌の比較を通し、表現のみならずその基盤になる風土・思想の違いを考えさせ、日本列島の文学や思想の多様性を学ぶ。

(2) 言語事項の面から

- 作品の土台になっている日本語の多様性を学ぶ。
 - ・ヤマト言葉と根を一にしている沖縄の言葉の特徴を知る。また、日本古語が沖縄に今でも残っていることを学び、日本語の多様な広がりを知る。

(3) 言語表現の面から

- オモロ語のもっている言語のリズムと、描写の美しさを味わう。
 - ・オモロのリズムや歌形に浸ることで、詩的言語の美しさを学ぶ。
- 沖縄的な詩の発想を学ばせることにより、創造性をはぐくむ。
 - ・オモロ語の現代日本語訳などを通じ、オモロの発想を学ぶことで詩的創造性を伸ばす。

[2] 『おもろさうし』教材化の基準

1. 教材化の基準

前節では、オモロを学ぶ意義を整理したが、ここでは1554首のオモロから、どれを教材にするのかという教材化の基準を提案したい。それをまとめたものが次の表である。

オモロ教材化の基準 —教材としてどのオモロを選ぶのか—

<コンセプト>

ヤマト古典文学教材にこれまで採録されてこなかった主題、視点、表現を特徴的に備え、しかも中学生に理解可能な内容のオモロを選択する。

- * 主題＝中心になる内容（情と景からなる）
- * 視点＝それぞれの主題に共通するオモロの思想
- * 表現＝オモロ独自の表現方法

<具体>

- ① ヤマト古典文学教材にこれまでなかった主題のオモロ
 - ・ダイナミックな自然表現（地方オモロ・糸とオモロ）
 - ・土地と英雄の讃歌（地方オモロ）
 - ・祈りとしての海の文芸（糸とオモロ）
- ② ヤマト古典文学教材にこれまでなかった視点があるオモロ
 - ・自然と神と人間との交感
 - ・クチウーユンの思想
- ③ ヤマト古典文学教材これまでなかった表現方法があるオモロ
 - ・対句反復の表現効果がよく現れたもの
 - ・リズムや調べの美しさが特徴的に味わえるもの

教材化にあたっては①に示した3つの主題のオモロから、②③が明瞭に備わった作品を

選択する。②③についてはオモロの属性であり、ほとんどのオモロはこの特徴を備えていることから、教材化にあたって最も重要なことは①である。

しかし、この3つの主題の妥当性については、疑問を抱く方もおられよう。なぜなら、「自然」をテーマにしたヤマト古典文学教材は従来から数多くあるし、戦場の武士を「英雄」とするなら、平家物語などヤマト古典文学教材でも英雄を扱った教材も少なくない。また、四方を海に囲まれたヤマトには「海」をテーマにした教材が本来あってしかるべきであるからである。以下、この疑問について検討してみたい。

* 以下、引用するオモロの本文と現代日本語訳は外間（2000年）による。ただし、訳は筆者が一部改めたところもある。また、本節のオモロ解釈の多くは波照間（2013年）の講義に基づいたものである。

2. ダイナミックな自然表現

ヤマト古典文学教材には自然を美しく表現したものが多々あり、教科書にも数多くの作品が採録されている。たとえば池田市で採択している中学校国語教科書『新しい国語』（東京書籍）で、自然を表現対象にした古典文学教材は次のとおりである。

1年：資料編に採録 p. 270

- | | |
|--------------------|------|
| ① 古池や蛙飛びこむ水の音 | 松尾芭蕉 |
| ② むめがかにのつと日の出る山路かな | 松尾芭蕉 |
| ③ 菜の花や月は東に日は西に | 与謝蕪村 |
| ④ さみだれや大河を前に家二軒 | 与謝蕪村 |
| ⑤ むまさうな雪がふうはりふはり哉 | 小林一茶 |

2年：本編に採録 p. p. 89-90

『枕草子』第一段

- ⑥ 春はあけぼのやうやう白くなりゆく山際は少し明りてむらさき立ちたる雲の細くたなびきたる（以下省略）

3年：本編に採録 p. p. 98-101

『万葉集』

- | | |
|--------------------------------|-------|
| ⑦ 君待つと我が恋ひをれば我がやどの簾動かし秋の風吹く | 額田王 |
| ⑧ 近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ | 柿本人麻呂 |
| ⑨ 春の野にすみれ摘みにと来し我そ野をなつかしみ一夜寝にける | 山部赤人 |
| ⑩ うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば | 大伴家持 |

『古今和歌集』

- | | |
|-------------------------------|------|
| ⑪ ちはやぶる神世も聞かずたつた河韓紅に水くくるとは | 在原業平 |
| ⑫ 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬとおもへば | 源宗干 |

『新古今和歌集』

- ⑬ 春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるる横雲の空 藤原定家
 ⑭ 道のべに清水ながるる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ 西行法師
 ⑮ さびしさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮れ 寂連法師

番号	自然イメージ * () は指導書の巻・頁数	事物
①	静寂 (1 研究編下 p.126)	古池 蛙 水
②	軽み (1 研究編下 p.126)	日の出
③	立体的光景 (1 研究編下 p.126)	菜の花 月 夕日
④	心細い感じ (1 研究編下 p.127)	さみだれ 大河 家
⑤	ゆるやか (1 研究編下 p.127)	雪片
⑥	四季の自然の興趣 (2 研究編上 p.269)	雲 月 夕日 蛩 雁・・他
⑦	季節の発見 (3 研究編上 p.271)	秋の風
⑧	異界から届く死者の声 (3 研究編上 p.272)	夕波 千鳥
⑨	花を愛でる心 (3 研究編上 p.273)	春の野 すみれ
⑩	春のうらかな風景 (3 研究編上 p.274)	春日 雲雀
⑪	紅葉の鮮やかな美しさ (3 研究編上 p.275)	たつた河 韓紅
⑫	冬の到来を身に沁みて感じた初冬 (3 研究編上 p.276)	山里 草
⑬	夜明けの情景 (3 研究編上 p.278)	峰 横雲の空
⑭	夏の日差し (3 研究編上 p.279)	道 清水 柳陰
⑮	寂寥感 (3 研究編上 p.279)	真木 山 秋の夕暮れ

これらの作品に描かれた自然イメージと事物を一覧にしたのが上の表である（自然イメージの文言は教師用指導書から引用）。

描かれた自然は、太陽が一番多い。「日」、「春日」、「夕日」、「夕暮れ」、「夕波」（直接⑧⑮に夕日という言葉は出ないが「夕波」「夕暮れ」から夕日の存在を読むことができる）である。そのイメージは、軽み、立体的光景、自然の興趣、うらかな、寂寥感である。②「のつと日の出る」という「軽み」や⑩「春日」からうかがわれる「うらかな」な情景からは、おだやかな存在としての太陽がイメージされる。また夕日を詠んだ⑥⑮からは秋の夕暮れの「寂寥感」こそが「自然の興趣」であることがよくわかる。⑧では死者の声を夕暮れの鳥から聞く感傷の思いが表現される。③からは「寂寥感」は感じられず、春の夕方のおだやかな情景が立体的に描かれている。

他の自然も、①「静寂」を感じさせる「水の音」、④「心細さ」を与える「大河」、⑤「ゆるやか」な情景としての「雪」、⑦「繊細」な簾を動かす「秋の風」、⑨「穏やかな」空気の漂う「春の野」と「すみれ摘み」、⑪「美しく」川に浮かぶ「紅葉」、⑫「冬の到来を身に沁みて感じた初冬」の「山里」、⑬「夜明けの象徴的な表現」としての「横雲」、⑭「夏の日差し」の中で清涼感を与える「清水」と「柳陰」である。

これらから言えることは、ヤマト古典文学教材における自然は静的な穏やかな存在、あ

るいは寂寥感や感傷の対象としてイメージされていると言えよう。またそこには自然への人間の思いの仮託という日本的叙情詩の伝統がある。その表現は機知に富み、かつ繊細である。

これに対し、『おもろさうし』には、ヤマト古典文学教材にはないダイナミックな自然表現が数多く存在するが、最も特徴的なのは太陽の讃歌である。その代表的なものが次のオモロである。

本文	現代日本語訳
一 天に鳴響（とよ）む大主 明けもどろの花の 咲い渡り あれよ 見れよ清らやよ	1. 天地に鳴り響く大主よ。 明けもどろの花が 咲き渡っていくようである。 あれ、見ろ。なんと美しく雄大なことよ。
二 地天鳴響む大主 明けもどろの花の咲い渡り あれよ 見れよ清らやよ	2. 地天に鳴りとどろく大主よ 明けもどろの花が咲き渡っていく あれ、見よ、なんと美しく雄大なことよ

（巻13—851）

琉球国王や地方按司を太陽（テダ）と讃える沖縄では、太陽に対して躍動や力強さ、生命の漲りを見ていた。このオモロも「太陽が水平線から昇る瞬間に放射する多彩な光の渦」を「明けもどろの花」と表現し、生命力漲る太陽の雄大さを讃える内容になっている（外間2000下）。このような太陽をめぐるダイナミックな表現は、先ほどあげたヤマト古典文学教材には皆無である。

また、天体や雲に神を見て美しく謡ったオモロもある。

本文	現代日本語訳
一 彗 け 上がる三日月や	彗け、上がる三日月は
(又) 彗 け 神ぎや金真弓	彗け、神の金真弓である。
又 彗 け 上がる赤星や	彗け、上がる赤星は
又 彗 け 神ぎや金細矢（かなままき）	彗け、神の金細矢である
又 彗 け 上がる群（ぼ）れ星や	彗け、上がる群れ星は
又 彗 け 神が差し櫛（くせ）	彗け、神の差し櫛である。
又 彗 け 上がる虹（のち）雲は	彗け、上がる虹色の雲は
又 彗 け 神が愛（まな）きゝ帯	彗け、神の大切にしている美しい帯である

（巻10—534番）

宵から深夜を経て明け方の天空に神の姿を見出すこの美しく雄大な情景は、ヤマト古典文学にはないスケールのものである。教師用指導書は「菜の花や月は東に日は西に」を「スケール大きな立体的な光景」と評するが、このオモロの情景には到底及ばない。このオモロと比肩する詩歌といえば柿本人麻呂「東の野にかぎろひの立つ見えて返へり見すれば月

傾きぬ」の他に思い浮かぶものはない。

このように自然に躍動や生命力を感じ、そのスケールを雄大に表現することは、まさに沖縄的な詩の発想に違いない。この発想はヤマト古典文学教材にはない新たな主題である。静的で穏やかな自然、寂寥感や感傷的な対象としてのヤマト自然表現の作品群に、オモロの生命力や躍動感をもった自然表現を加えることは、中学生の言語認識を豊饒なものにすることにつながると考える。

3. 土地と英雄の讃歌

『新しい国語』で、英雄的人物を描いた作品は、1年生の資料編『古事記』の「倭健命」、2年生の本編『平家物語』の「那須与一」の2編である。前者は、古代の悲劇的英雄の最期を、後者は源平合戦の勇者の活躍を描いた古典である。いずれも英雄的人物の事蹟を描いた作品であるが、ヤマト古典文学教材に英雄を取り上げたものは必ずしも多くはない。

これに対し、オモロには英雄の事績を讃えたもの、英雄と彼らが活躍する土地の相応しい関係が讃えたものなど、琉球の歴史を彩る英雄の群像を美しい表現で謡ったオモロが多くある。その詞章には対句反復の表現が巧みに使われ、その形象も豊かである。これらの英雄は「大や」「てだ」「世のぬし」「あぢ」と呼ばれ、かつて沖縄各地に群雄割拠していた。この時代を「英雄時代」と呼ぶことが妥当かどうかは判断できないが、地方オモロやゑさオモロにこうしたオモロがいくつも採録されている。

本文	現代日本語訳
一 謝名思ひ（じゃなもい）や 誰が 生（な）ちやる子（くわ）が 此が 清らさ 此が 見欲しや 有居るな	謝名思い様は 誰が生んだ子だろうか こんなに美しく輝いていることよ こんなにも見たいと思うことよ
又 百ぢやらの あらて居（お）ちやる 庫裡口（こちゃぐち） 謝名思いしゆ 開けたれ	たくさんの按司たちが 待ち望んでいた庫裡口を 謝名思い様こそが開けたのだ
又 謝名思いが 謝名上原上（の）ぼて 蹴上（や）げたる 露（つよ）は 露（つよ）からど 香（かば）やしや有る	謝名思い様が 謝名の上原に上って 蹴上げた露は、 露もさえもかぐわしいことだ

（巻14-982）

これは、14世紀の沖縄の歴史を切り開いた察度（さつと）と呼ばれる英雄の讃歌である。第3節では「謝名思い様が、謝名の上原に駆け上って、蹴り上げた露は、なんと露からさえ香ばしい香りがすることだ」と謡い、上原を走り登る謝名思いの力強さ、そして露

を香ばしく変容させる秀麗さを表現している。ヤマト古典文学において、はかなさの象徴として視覚的に描かれる露を、このオモロでは英雄の力強さのシンボルとして描いている。しかも露を匂いで表現しており、そこには新しい文学的な感覚がうかがわれる。

本文	現代日本語訳
一 知花おわる 目眉清ら按司の	知花におわします 眉目美しい按司様が
又 知花おわる 齒口清ら按司の	知花におわします 齒と口もとの美しい按司様が
又 御鉢巻 手強く巻き しょわちへ	御鉢巻を しっかり巻き給いて
又 白掛け御衣 重べ しょわちへ	白絹の御衣を 重ね着し給いて
又 十重きゝ帯 廻し 引き締めて	幾重にも巻く立派な帯を 廻し引き締めて
又 大刀よ 掛け差し しょわちへ	大刀を 掛け佩きし給いて
又 腰刀よ 厳さ差し しょわちへ	腰刀を しっかり差し給いて
又 ひぎや皮さば うちおけくみ しょわちへ	山羊皮の草履を 軽く履き給いて
又 馬曳きの 御駄曳きの小太郎	馬の口取りの 小太郎が
又 真白馬に 金鞍 掛けて	真白馬に 金鞍掛けて
又 前鞍に てだの形 描ちへ	前鞍に 太陽の絵を描いて
又 後鞍に 月の形 描ちへ	後鞍に 月の形を描いて

なんと凛々しく美しいお姿であることよ

(巻14—986)

ここで謡われる主人公知花按司は文献上実在が確認されていないが、このオモロによって歴史上実在したのではないかと推測されている知花グスクの英雄で、13世紀半ばから末葉の動乱時代の沖縄で群雄割拠した地方英雄の一人と考えられる(外間1971)。このオモロで知花按司は土地のリーダーとしてまさに民衆から慕われていた英雄であったことが伝わってくる。その姿形は凛々しくかつ美しく謡われ、オモロのリズムに乗って知花按

司の颯爽とした姿がインパクトを持って眼前に浮かんでくる。

本文	現代日本語訳
一 勝連わ てだ 向て 門（じやう） 開けて 真玉金（こがね） 寄り合う 玉の御内（みうち）	勝連は太陽に向かって 門を開けて 真玉・黄金の寄り集まる 玉の御内御嶽であることよ
又 肝高の 月 向て	肝高は月に向かって 真玉・黄金の寄り集まる 玉の御内御嶽であることよ
又 勝連わ けさむ 今も 按司 選ぶ	勝連は 昔も今も 按司を選んで栄えていくよ

（巻15-1133）

このオモロは、太陽と月により祝福を受けた勝連という土地を「真玉・黄金の寄ってくる素晴らしい聖所よ」と褒め称えている。そして、その勝連では、その土地が昔から今まで支配者である按司を選んできたと言う。土地に相応しい支配者がいて初めて土地は栄えるのである。これはまさしくクチウーユンの思想である。英雄を直接讃えたものではないが、土地と英雄の関係をよく示しているオモロである。

このような土地と英雄の讃歌は、まさに沖縄的な詩の発想である。土地を褒めるとは、地霊を褒めることであり、地霊と英雄の一体的な関係が土地の発展や安定を保障してくれる。悲劇的英雄の最期や戦場の勇者の活躍という従来のヤマト古典教材に加え、土地と英雄を讃えたオモロを加えることは、これも中学生の言語認識を深めることにつながると考える。

4. 祈りとしての海の文芸

日本は海に囲まれた国であるが、海についての文学作品の数は、実は多くない。記紀や万葉集、個々の詩歌集にわずかながら存在するだけである。『新しい国語』にも海をテーマにした教材は採録されていない。しいて言うなら1年生の資料編に『伊勢物語』「かへる浪」採録され、その中に海の浪を詠んだ短歌「いとどしく過ぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへる浪かな」があるが、これは返る浪を見て京への思慕を募らせるというもので海の文芸とは言い難い。

これに対し、『おもしろさうし』には、巻10・13に「ゑとおもろ」があり、航海に関するオモロが多数採録されている。しかもその中心を占めるのが、航海の無事を神に祈るオモロである。その一つを紹介する。

本文

- 一 吾が おなり御神の
守（まぶ）らでて おわちやむ
やれ ゑけ
又 妹おなり御神の
- 又 綾蝶あやはべる 成りよわちへ
- 又 奇せ蝶 成りよわちへ

現代日本語訳

我々のヲナリ神様が
我々を守ろうと行って、来られたのだ
ヤレ エケ（おー やったー）
妹ヲナリ御神が
我々を守ろうと行って、来られたのだ
ヤレ エケ（おー やったー）
美しい蝶に成り給いていらっしやった
我々を守ろうと言って、いらっしやった
ヤレ エケ（おー やったー）
不思議な蝶に成り給いていらっしやった
我々を守ろうと言って、いらっしやった
ヤレ エケ（おー やったー）

（巻13-965）

これは、遙か沖合を行くエケリ（兄弟）の船をヲナリ神（姉妹）が守護するために美しい蝶になっていらっしやったと謡ったオモロである。沖縄では古来より、姉妹であるヲナリ神が兄弟であるエケリを霊的に守護するヲナリ神信仰が盛んであった。命がけの航海もヲナリ神の守護で全うされるとされた。沖を行く船上に出現した蝶にヲナリ神を見た兄弟は、航海の無事を確信することができたのであろう。

このようにゑとオモロは大海原を雄大な自然として勇壮に謡ったものはない。では、なぜ、このオモロ群を海の文芸と呼ぶのかを波照間（2010b）は次のように述べる。

『おもろさうし』第十三巻には236首の航海に関連するオモロが収録されています。勇壮な海洋文学というわけにはいきませんが、航海という命がけの営みを支えるものとしての「祈り」の籠められた聖なる詞章、人々の祈りの心の美しい結晶がこの236首のオモロなのです。海を征服するという勇壮さではなく、神の守護をひたすらに祈るその姉妹・女たちの敬虔な信仰を謡うオモロは、十分にその美しさを発揮していると思います。これらのオモロをとおして私たちは、日本古代文学が欠落した、海と船と人との関わりを描いた海の文芸の世界にふれることができると思います。

海を征服するのではなく、祈りをキーワードにした神と海と人との関わりが海の文芸としてのオモロの真髄なのである。これこそが海に関する沖縄的な詩の発想であり、海のオモロを古典文学教材に加えることは、自然と人との精神的な関係を中学生に考えさせるために重要な意味を持つと考える。

以上、述べたように筆者は3つを主題とするオモロを教材化することは十分意義のあることだと考える次第である。

Ⅱ 『おもろさうし』カリキュラム化に向けた試み

〔1〕「ゑけ 上がる三日月や」の教材研究と試験授業

これまで『おもろさうし』教材化の意義について検討したが、今後、『おもろさうし』のカリキュラム化に向けて、沖縄古典文学を知らない池田市の中学生在がどのように『おもろさうし』を学んでいくのかについての検討が必要になってくる。

本節では、その検討の素材として「ゑけ 上がる三日月や」の教材研究と試験授業の試みを記す（本格的な授業づくりのためにその前段で実施する試みの授業のことを試験授業と名づけた）。

1. 教材研究

「ゑけ 上がる三日月や」は、『おもろさうし』の中で最も有名な作品の一つとして知られる。高校国語教科書にも1980年代から採録されてきたが、この作品が高校でどのように教材化され、どのように実践がされたかの記録はほとんどない（もっとも高校教科書に採録された『おもろさうし』教材でその実際の授業をうかがい知る資料自体が数少ない）。

その後、義務教育段階では、平成24（2012）年に初めてこの「ゑけ 上がる三日月や」が小学校国語教科書に採録された。それを受けて米嵩・村上（2013a）が授業実践を発表した。管見ではこれが唯一このオモロに関する授業実践に関する論文である。

今回、教材研究と試験授業の対象としてこのオモロを選んだ理由は、『おもろさうし』中、最も有名な作品であり、また唯一、授業実践に関する論文がある作品であるからである。筆者はこの論文からオモロの授業実践のあり方を学び、それをベースにして教材研究と試験授業を行った。

（1）本文と語釈

本文	現代日本語訳
一 ゑ け 上がる三日月や	ゑけ、上がる三日月は
（又）ゑ け 神ぎや金真弓	ゑけ、神の金真弓である。
又 ゑ け 上がる赤星や	ゑけ、上がる赤星は
又 ゑ け 神ぎや金細矢（かなままき）	ゑけ、神の金細矢である
又 ゑ け 上がる群（ぼ）れ星や	ゑけ、上がる群れ星は
又 ゑ け 神が差し櫛（くせ）	ゑけ、神の差し櫛である。
又 ゑ け 上がる虹（のち）雲は	ゑけ、上がる虹色の雲は
又 ゑ け 神が愛（まな）きゝ帯	ゑけ、神の大切にしている美しい帯である

（巻10－534番）

【語句】	【語釈】
ゑげ	「ゑ」は、感動した時に発する言葉。また船を漕ぐ時の掛け声。しかし、そのように限定せずに囃し詞と考える説もある。
上がる	「上がる」は「天空の三日月を静的にではなく、動的な状態でとらえている。月も、星も天空にかかってあるのではなく、視界の中にふいにたちあらわれてくる」（関根 1988）と考える。
三日月	多くの注釈書は、宵の西空に現れた三日月とするが、黒島（1988）は、有明の月（明け方の東空）とする。
や	係助詞「は」の口蓋化したもの。「は」の前の語の母音がイのため、口蓋化により「や」となる。みかづき <i>mikadzuki</i> 、あかほし <i>akahishi</i> 、ぼれぼし <i>boreboshi</i> は <i>i+ha</i> で <i>ya</i> となる。のちぐも <i>notigumo</i> は先行母音が <i>o</i> のため口蓋化せず「は」のままである。
神	神そのものというより、神を祭る神女の姿を天空に見ている。
ぎや	「が」の前の語が <i>i</i> のため、口蓋化により「ぎや」となる。 <i>kami</i> の <i>i+ga</i> で <i>gya</i> になる。意味は、格助詞「が」ではなく「の」の働きの連体助詞である。
金真弓	「かな」「ま」とも弓を褒める美称辞。「三日月の張りを真弓とたたえる心の奥に、招霊のために弦をはじく梓弓の呪性がよみがえっているのではないだろうか」（外間 1985）
赤星	金星（宵の明星・明けの明星）。赤し、明かし、明け、緋、茜はもとより同根の語である。（関根 1988）
金細矢	「ままき〔継木・細射〕木と竹をはりあわせて作った弓。また、それにつがえる矢。的弓に用いた。」（大野 1982）とあるが、この場合は矢である。金は、矢の美称辞。
群れ星	星群一般とする説とスバルとする説がある。
差し櫛	髪に差す櫛。クシは古来神霊を招き寄せるものと観念されるように呪力的な力を持っていた。サシクセは差し奇せであり、「奇し」は「くすしき」「くすり」に通じる。
のち雲	「のち」は「ぬち」で、横糸のことを意味し、横糸のように棚引く横雲。また、「ぬち」は虹で虹雲を意味する。この二つが従来の解釈である。島村（2012）は、巻10-522「紫の綾雲 紫の命雲」と同義とし、明け方東雲の空にある命が漲った雲という解釈を提唱している。
まなきゝ帯	「まな」は「愛」で大切なという接頭美称辞。大切な帯。

(2) 先行研究による解釈

このオモロは、もともと南島船人たちによる航海途上での天体讃美であると解釈されてきた。

南島人の祖先が夏の夜の航海中、熱帯の蒼穹を仰いで、星昴の燦爛たるを観、覚えず声を発して、その美の本源なる神を讃美したものであろう (伊波 初出1924年)

ある夕べ、海を渡る舟人が、ふと見上げる、たそがれの空に、三日月の、あがるのを見て、即興的にうたったらしく、宵の明星、星群、紫の横雲を次々と、神のよそいにかけてうたいあげたもの。(仲原 初出1957年)

オモロの中に航海を意味する語句は存在しない。しかし、これを航海の途上のものと解釈したのは、このオモロが航海の歌を中心に編纂された巻10「ありきゑとのおもろ御さうし」に採録されていたことによる。そして、謡われる情景も「夏の夜」「ある夕べ」「たそがれの空」とされ、航海の途上で、夕方から宵にかけての西の空に浮かぶ天体を讃美したオモロという解釈が定着した。

この解釈を大きく転換させたのが西郷(1972)である。

ところで、これは舟歌で、海上にいて天空を仰いだ舟人の感動をうったものとされているのだが、果たしてどうだろうか。……古代人にとっては昼ではなく夜こそが聖なる時間であった。祭りがたいてい夜おこなわれるのもそのためである。神楽歌の〈明星〉はこうした祭りがようやく終わりに近づく暁にうたわれるのだが、このことから推して右のオモロも暁の歌ではあるまいかと私は考える。

西郷はこのように、このオモロを航海の場ではなく神祭りの場、情景も夕方ではなく暁の歌という解釈をし、従来の解釈に疑問を呈した。その後、外間(1985)が

このオモロは、船漕ぎ、船遣れの場で謡われたものというよりは、漕行予祝のための神祭りの場において、神女たちが謡ったオモロであるというみかたが成り立つ……全体の叙景があまりにもととのいすぎでいて、自然の美しさへの感動を即興に謡った句というよりは、神祭りの場の予祝歌として練りあげられ、ととのえられたとみたほうがよさそうなのである。
* 予祝とは、予め期待する結果を模擬的に行うことでそれ実現させるという祭りで、この場合、漕行=航海の無事を祈るものである。

とし、航海の場の実景を謡ったものから漕行予祝のオモロへと解釈を進め、これが現在の解釈の共通理解となっている。

しかし、謡われた時間は夕方なのか明け方なのか、謡われた空は西空なのか東空なのかについては、さまざまな見解がとられている。

研究者	時間と場所	空の方角	解釈
伊波普猷 (1924年)	夏の夜・航海(船上)	星昴の方向	星昴の燦爛たるを観、覚えず声を発して、その美の本源なる神を讃美した
仲原善忠	たそがれの空・航海	西空	即興的に(天体を)神のよそい

(1957年)			にかけてうたいあげたもの
西郷信綱 (1972年)	暁・神祭りの場	東空	神祭りの終わりに暁の時に歌われたもの
外間守善 (1985年)	たそがれの空・漕行 予祝の場	西空	予祝歌として練りあげられ、ととのえられた
黒島為一 (1988年)	暁・漕行予祝の神祭 りの場	東空	武装した神によって航海中の船を守護する
島村幸一 (2012年)	宵から暁・漕行予祝 の神祭りの場	西空＝三日月 東空＝赤星・群れ 星・命雲	前日の宵から連続した夜明け前の情景をこれから巡行に立つ神女の姿にイメージしたウタ

伊波は、時間は海上の夏の夜とし、空の方角は明確にしていなが、「星昴」を見ていることから昴が出ている夜空がイメージされる。仲原は時間は海上のたそがれの西空に3つの天体と雲を配置している。これに対し、神祭りの場を提唱した西郷は祭式の時間に注目し、夜から明け方の祭事終了直前の暁ではないかという見解を示した。外間は、神祭りの場としながらも、謡われた情景はたそがれの空としている。

このような研究の歩みを整理した黒島（1988）は、場については「神祭りの場という理解が進んできた」とし、その情景については、三日月を有明の月、群れ星を昴、のち雲を横雲とし、赤星については明け・宵で決着はつかないとしつつ、明け方の空を謡ったものという解釈を提案した。

こうして、このオモロは神祭りの場で謡われたものという理解が共有されたが、謡われた情景に関しては「夕闇迫る西の空か、明け方の東の空か」という二つの軸で解釈されるようになった。

これに対し、島村（2012）は、祭式の時間の経過に再び注目し、同時刻の情景を謡ったものではないという解釈を打ち出した。島村の解釈は次のとおりである。

本歌は・・・太陽がまだ出ない夜明け前の天空に浮かぶ、金星、昴、東雲を神女の装束になぞらえて謡ったオモロだと考えられる。しかし、目の前の情景をなぞったのではなく、「三日月」が謡われているように前日からの時間、籠りの時間から連続した夜明けの前の時間の中にある「情景」を、信仰による想像力、幻想の「叙景」によってこれから巡行に立つ神女の姿にイメージしたウタである。

（3）学習のための解釈

先行研究は以上であるが、ここからは筆者の解釈を述べていきたい。

<たそがれに出現した見えた弓と矢>

このオモロの解釈を考えていた7月中旬のある夕刻（7時半すぎだったろうか）、筆者は学校の正門の上空、たそがれの西の空に浮かんだ三日月を見た。斜め左上に弦を張ったような三日月の弓の右手には宵の明星が美しくまたたいている。三日月と明星は少

し距離があるが、弓から放たれた矢が矢先を煌めかせながら天空を飛んでいるように見えた。「そうか。弓から矢が美しく放たれた瞬間にこのオモロは誕生したのだ。弓から勢いよく飛び出した矢を中空に見たオモロ人は、その美しさと勢いに『ゑけ！』と喚声を発したのだ。」筆者はこう直感した。

沖縄と池田市には地理的な差異があり、沖縄で三日月と金星が同様に見えるか否かは不明ではある。しかし、この直感が筆者の現在の解釈の根源にある。

* オモロを創作し、謡い継いだ人々を本研究では、オモロ人と呼ぶことにする。

このオモロは1行目と2行目、3行目と4行目・・・がワンセットになって「○○は○○である」という内容の4文構成になっている。しかし、この4文の関係についてどのように考えるかについて言及した解釈はあまりない。それは、その多くが、オモロ人のまなざしはたそがれの西空、表現された内容は同時刻の天体と雲の情景と解釈してきたからである。また明け方の東空とする場合も、同時刻の情景という点では同様である。

これに対し、島村（2012）は「本歌は対句の関係にない四つの独立した文的な表現によって展開する」とした。そして、これまでの同時刻の情景という解釈の枠組みを排し、オモロ人が実際に見た夜明け前の金星・昴・東雲の情景に前日の宵の三日月を「信仰の想像力」によって合体させ、神女の装束としてイメージしたものとした。

確かに、たそがれの空に三日月と宵の明星、星群を見ることは可能であるが、星がきれいに見える時刻に同時に雲が美しく見えるとは考えにくい。また、明け方にのち雲や明けの明星、星群を見ることは可能だが、三日月を見ることは難しい。このようにこのオモロを一連の同時刻のものと考えるときさまざまな矛盾が生じる。外間の「全体の叙景があまりにもととのいすぎ」ているという指摘もある。

ところで、国語の授業で作品の中に登場する事物・人物の関係を吟味して主題に迫る読みはよく行う方法である。その際に用いる方法が対比と類比である。対比は二つを比べて違いを見つけること、類比は二つを比べて共通点を見つけることである。島村の解釈について、ここでは、対比を使って検討してみたい。

先にも述べたようにこのオモロは2行1文の構成であり、4文で成立している。

- ① ゑけ 上がる三日月 や ゑけ 神 ぎや 金真弓
- ② ゑけ 上がる赤 星 や ゑけ 神 ぎや 金細矢
- ③ ゑけ 上がる群れ星 や ゑけ 神 が さし櫛
- ④ ゑけ 上がるのち雲 は ゑけ 神 が まなきゝ帯

まず①と②を対比してみる。空に出現するものは三日月と赤星、そこからオモロ人が幻視したものは弓と矢である。この弓と矢は、それぞれ金真（弓）・金（細矢）と美称されており、神の持ち物として相応しい表現になっている。そして、両者は対の関係と考えられ

る。これを島村の解釈のように4つを独立したものと解釈すると弓と矢の対の関係は崩れてしまう。島村は、「信仰的な想像力」によって宵の三日月と明けの明星をはじめとする明け方の天体を同時の空に見たとしたが、①と②は現実に見える宵の三日月と明星の対の関係を謡ったと考える方が説得力がある（筆者が7月に見た情景がこの対の関係であった）。たそがれの西空に上がる三日月＝弓に相応しいのは、宵の明星＝矢以外にない。筆者は、オモロ人の「信仰的な想像力」とは、宵と明け方の一体化ではなく、たそがれの西空に上がる三日月と明星を対のものとし、それを神の武具（弓と矢）と幻視したことだと考えたい。また、①②は、武装して登場する神女の姿であると解釈することもできよう。古来、弓矢は武具であると同時に招霊の神具でもあったことを考えるとこれは神女による神祭りの開始を意味しているのかもしれない。

また、音数律としても①②は2・3・5・2・3・5の繰り返しである。登場する事物の付属語も「は」の口蓋化による「や」、連体助詞「が」の口蓋化による「ぎや」で軽快なリズムを伴い、対になってオモロの前半部の響きを形作っている。つまり、①②は内容としても音数律としても対と考えるべきであろう。

次に③と④を対比してみる。空に出現するものは、群れ星とのち雲、そこにオモロ人が幻視したのはさし櫛とまなきゝ帯である。櫛と帯の関係は、弓と矢ほど密接ではないが、両者とも美しく着飾る装具と考えてみると、ここにも対の関係を見出すことができる。のち雲は従来「横雲」「虹雲」説が有力であったが、巻10-522のオモロに明け方の東空の雲を「紫の綾雲／紫の命雲」呼ぶ表現があり、島村（2012）はのち雲は命雲であると解釈している。命雲とは「東雲（明け方）の空にある命が漲った雲」という意味であり、筆者もこれを支持したい。このように考えると明け方東空に上がる群れ星とのち雲も対の関係と捉える必要があり、群れ星は単なる星群でなく明け方の東に出現するスバルとしたい。③と④は明け方に櫛と帯によって美装した神女の登場を謡っていると考えられる。美装した神女の登場は神祭りのクライマックス（終わり）を意味すると解釈することもできよう。

また、音数律は③2・3・5・2・3・4、④2・3・5・2・3・6と整ってはいない。主格の助詞も③は口蓋化による「や」だが、④は口蓋化せず「は」となっている。（これは口蓋化によるものだが、ただ一か所「は」となった④は結句という印象を与える。

次に①②を前半、③④を後半と位置付けて、それぞれ対比してみたい。

対比事項	前半①②	後半③④
時	たそがれ	明け方
方角	西	東
事物	三日月 宵の明星	スバル 命雲
幻視	金真弓 金細矢	差し櫛 まなきゝ帯
意味	武装する神女	美装する神女
行為	神祭りの開始	神祭りのクライマックス（終わり）

前半、後半の対比からまず分かることは、前半は夕方から宵にかけて、後半は明け方を謡っていることである。日没後の夕闇迫る西空の世界と日の出前の明け方の東空の世界である。その空に浮かぶものは、前半は三日月と宵の明星、後半はスバルと命雲。そこからオモロ人が幻視したものは、前半は弓矢で武装した神女、後半は髪飾りと帯で美装した神女である。さらにこのオモロの前後の時間をイメージすると、前半は太陽が沈んだ直後から始まる情景、後半は太陽が水平線から顔を出す直前の情景である。オモロが描く情景は、日没から日の出直前の太陽のいない世界である。「天に鳴響む大主」で見たように、沖縄の太陽は躍動感に溢れ生命力漲る存在であり、国王や按司に例えられる昼の世界の支配者である。それが夕刻、生命力を衰えさせ西空に落ちていく。その落日後に訪れるのは夜の世界。夜は聖なる時間であり、神祭りが行われる。神祭りの司祭は神女である。沖縄においてはオモロに描かれる神とは、実際には神祭りにおいて神が降臨する神女を意味しており、天体に幻視された神とは、神祭り時の神女の姿であった。

この神祭りの目的は、直接謡われていないが、先行研究のとおり、漕行予祝のための神祭りであると考えられる。島村も神祭りの内容には触れていないが、装束を身につけた神女の巡行の姿であるとしている。

<宵の西空への三日月・明星の出現：武装した神女の登場>

昼の支配者、太陽（＝国王、按司）が去り、夜の支配者、月・星（＝神、神女）が出現する。そこにオモロ人は神の姿を幻視する。天体の荘厳さとそこに神の像を見た感動に「ゑけ」という声が響く。神である神女は弓と矢で武装して登場するが、弓と矢は戦いのためではなく神祭りの開始を意味する招霊の神具である。航海の無事を祈る神祭りは夜を徹して行われる。

<明け方の東空へのスバル・命雲の出現：美装した神女の登場>

明け方、スバルと命雲が出現する。昨宵、武装して登場した神女は、明け方、神飾りと帯で美装して登場し、神祭りは完成する。神祭りが終焉した後、昼の支配者太陽が生命力を漲らせて再生する。

2. 試験授業の実際

(1) 授業の重点

試験授業は本校1年1・2組において各2時間行った（ここで記すのは2組を中心とした授業の概要である）。

筆者はこのオモロを前節のように解釈したが、漕行予祝の神祭りや「神＝神祭りをする神女」であることを生徒が理解するのはかなり難しい。そこで、試験授業では、解釈で浮かび上がった宵と明け方、そこに現れた武装した神と美装した神の対比という視点からこ

のオモロの描く世界を生徒と読み解くことにした。

この授業で試験しようとしたことは次の3つである。ただし、3つ目については今回試験することができなかった。

① 想像読み：具体的には有田和正式「はてな」を用いて導入を行う

詳しい説明をしない段階で「はてな」を用いて、さまざまな疑問を考える。こうすることで問いを持ってオモロを読み解いていく課題意識が生まれる（想像読みと「はてな」については山際（2013a）を参照）。

② 第3段階の読みで情景を読み解く

<第1段階の読み：天空に神の姿を見るオモロ人の感覚への同化>

1・3・5・7行目の壮大な天空の情景を読み解き、イメージ化を図る。それをそれぞれ神の装具とし、天空に神の像を見たオモロ人の感覚へ同化する。

<第2段階の読み：対比による天体の持つ意味の発見>

対比により、①～④は同じ情景ではなく、二つの対照的な時間を謡ったものであることを発見する。前半部と後半部の天体や装具の相違点や共通点を丁寧に読み解き、宵と明け方の持つ意味を探る。漕行予祝や神祭りという概念は難しいが、空に神を見たというところまでは読ませたい。

<第3段階の読み>

読み解いたオモロを絵にすることによってさらに詳しく情景をイメージさせる。絵にする作業は、オモロの内容をさらに深く読み取っていく過程である。描画の過程とは読み・考える過程である。

③ リズム感が生み出す感動が実感できる読みをする。

感動の声「ゑげ」や2・3・5の音の繰り返しのよるリズム感がオモロの情景を壮大にイメージさせていることに注目する。

（2）第1時：「はてな」による想像読み

① 有田式「はてな」による想像読みトレーニング

まず、「今日は、みんなの想像力を高めるために、ある歌の授業を行います」と説明し、「その歌を学ぶために必要な力を最初にトレーニングします」と言って、次の一文を板書した。

磯村さんの横に立っている今井さんの筆箱にはきれいに削られた十本の鉛筆が入っている。

「この文を読んで『はてな』を探します。『はてな』とは疑問とか質問のことです」と指示。生徒は最初戸惑っていたが、そのうち、次々と発表が続いた。「磯村さんと今井さんの性別は？」「鉛筆の硬さは？」「筆箱は開いているのか？」「磯村さんの横に立っ

ているのは今井さんか今井さんの筆箱かどっちか？」「今井さんの年は？」「二人はどこにいるのか？」等々30数個の「はてな」が出た。

② 「はてな」による第1次読解

「では、今からある歌を紹介します。この歌は沖縄で生まれた歌です」と言ってプリントを配布。多くの生徒が「ゑ」の読み方に興味を持った。まず、授業者が範読し、その後、一行ごとに全員で音読。そして「いよいよ想像読みの本番です。この歌について『はてな』を5つ以上見つけましょう」と指示する。生徒はプリントへ「はてな」を書き込んでいった。

③ 『おもろさうし』の説明

「はてな」探しを終了した後、「みんな、いっぱい『はてな』が見つかったようですね。みんなが『はてな』を見つけたこの歌は、実は沖縄で400年以上前に作られた歌なのです」と、『おもろさうし』の説明を行った。これは歌だが、日本の短歌ではないことを短歌の音数律57577とこのオモロの音数律235・235で比較し確認した。そして、「この歌は日本にあったもう一つの国・琉球王国で作られたオモロという歌で『おもろさうし』という本に載っていること」「オモロが1500以上集められた本が『おもろさうし』であること」を説明した。

④ オモロについての「はてな」発表

そして、いよいよ全員が見つけた「はてな」を発表した。次に示すものは、1・2組で出た「はてな」を一覧にしたものである。

みんなで見つけた「ゑけ 上がる三日月や」はてな？

【作品に関するもの】

- ・なぜこれが見つかったのか？
- ・どうやって日本に伝わった？
- ・題名は？
- ・いつの時代に書いたのか？
- ・これは昔に書かれたものなのか？
- ・どういう時に読まれる歌か？
- ・2番はあるのか？
- ・これ以外につくられた歌はあるのか？

【作者に関するもの】

- ・だれが書いたのか？
- ・書いた人は男か女か？
- ・書いた人は大人か子どもか？
- ・誰が考えたのか？
- ・偉い人が書いたのか？
- ・かしこい人が書いたのか？
- ・何才くらいの人？
- ・書いた人の服装は？
- ・歌っている人は何人？

【作歌の意図に関するもの】

- ・何を思って書いたのか？
- ・何のためにつくられた歌か？
- ・だれに向けての歌なのか？

・ どうやって思いついたのか？ ・ どんなテーマでつくられたのか？

【歌の調べに関するもの】

・ どういう音程か？ ・ 歌は明るい感じか、暗い感じか？
・ リズムはどんな感じか？ ・ だれが最初に歌ったのか？ ・ どのように歌うのか？

【作歌の時や場に関するもの】

・ 朝に書かれたのか、夜に書かれたのか？ ・ どこで書かれたものか？

【言葉に関するもの】

・ なぜはじめに「ゑがつくのか？ ・ なぜ「え」を「ゑ」と書いたのか？
・ なぜ「えけ」ではなく「ゑけ」なのか？ ・ この歌に文字の規則はあるのか？
・ 日本語と琉球では文字はどうちがうのか？ ・ なぜこんな難しい読みをするのか？
・ なぜ意味わからん言葉ばっかあるのか？ ・ これは沖縄方言なのか？

【内容に関するもの】

●時

・ これは朝・昼・夜いつのときか？ 雰囲気として夜か？ ・ 季節はいつか？

●天気

・ 天気は、晴れ？曇り？雨？嵐？

●ゑけ

・ ゑけは何の意味か？ ・ ゑけは行けか？ ・ なぜ、「ゑけ」ばかり繰り返してるのか？
・ 全部の文のはじめに「ゑけ」と書いているのはどういうことか？

●三日月

・ 三日月はどんな月か？ ・ 三日月ってどれくらいなの？ ・ 上がる三日月とは夜のことが？
・ 三日月をどこで見ている？ ・ どうして上がっているときの三日月なのか？
・ どうして三日月を入れたのか？ ・ 満月ではなくて三日月なのはなぜか？

●赤星

・ 赤星とは何か？ ・ 赤星がどこに上がるのか？ ・ 赤星とはどんな形か？
・ どうして赤星なのか？ ・ どんな赤星なのか？ ・ 赤星とはどれくらい明るいのか？
・ 赤星は上がるのか？

●のち雲

・ のち雲とは何か？ ・ どうして雲なのか？ ・ いつの雲なのか？ ・ 雲はどこから上がるのか？
・ 雲って何色？

●群れ星

・ 群れ星とは何か？なんでむれがぶれなのか？ ・ 群れ星はなぜ上がっているのか？
・ どうして群れ星なのか？ ・ いつ群れ星は見れるのか？ ・ どんな形の群れ星か？

●金真弓・金細矢

・ 金真弓とは何か？ ・ 金細矢とは何か？ ・ 金真弓とは何かの武器か？
・ 金真弓と金細矢は弓と矢でつながっているのか？ ・ 金真弓と金細矢は神のものなのか？

●さし櫛・まなきき帯

- ・さし櫛とは何か？
- ・まなきき帯とは何か？
- ・まなきき帯って神様のもの？

●神

- ・神は何をしているのか？
- ・なぜそんなに神がでてくるのか？
- ・神は何体いる？
- ・神は誰か？
- ・神を信じてるのか？
- ・神に対してのおもろか？
- ・神は作者か、作詞者か？
- ・もし人を表した歌ならモチーフの人はいるのか？

●上がる

- ・なぜ「上がる」と「神」が交互に入っているのか？
- ・なぜそんなに上がるのか？
- ・上がるはどこに上がるのか？

●神ぎや

- ・神ぎやとは何か？
- ・1回目に上がるが来て、2回目に必ず神ぎやが入るのはなぜか？
- ・神ぎやと神がの違いは？
- ・なぜ、はじめの半分は「神ぎや」なのに後半分は「神が」なのか？

●情景

- ・文章は人を指しているのか、ものを指しているのか？
- ・何が起きているのか？
- ・想像して書いた歌か見ている風景を書いた歌か？
- ・目で見た物か、脳で考えたのか？
- ・現実をもとにして作ったのか、空想か？
- ・空を見て見えるものを神のなにかしらのものにたとえているのか？
- ・なぜ空のことについてばかり書いているのですか？
- ・どういう気持ちや情景をあらわしているのか？

●その他

- ・歩きながら思いついたのか？
- ・この歌を現代の日本語に訳したらどんな歌ですか？

⑤ わからない言葉の確認

最後に生徒からあがった意味がわからない語句について説明した。

- ・匂け・・・・・・・・「匂け」という掛け声。「おお」と訳すことが多い
- ・三日月・・・・・・・・夕方西空に出る三日月
- ・神ぎや・・・・・・・・「ぎや」は「が」のこと。この「が」は「の」の働き⇒神様の〇〇
- ・金真弓・・・・・・・・金と真は弓を讃える言葉⇒「すばらしい」弓
- ・赤星・・・・・・・・夕方西空の三日月の傍に出る宵の明星（金星）
- ・金細矢・・・・・・・・金は矢を讃える言葉⇒「すばらしい」矢
- ・群れ星・・・・・・・・スバル
- ・さし櫛・・・・・・・・美しい櫛、かんざし

・のち雲・・・・・・明け方に東空に棚引く雲
・まなきゝ帯・・・・美しい帯

(3) 第2時：オモロの内容理解と絵の制作

① オモロの構成の確認

最初にこのオモロは8行で構成されており、2行ごとで一つの情景を描いていることを説明した後、情景の読み取りに入った。

② 第1段階の読みA：前半部分〈夕方の西空のイメージ〉

最初の2行が夕方（今回の授業では日没直後の時間を夕方とした）の西空に上がる三日月を神の持つ弓に例えていることは簡単に読み解いた。「三日月は弓そのものですか？」「違う、例え」「三日月を弓に例えている」「これは比喩や」という答えが返ってくる。「そう。三日月が弓そのものではないね。では、沖縄の人は夕方の西空に弓を見たわけやけど、その弓を持っているのは誰ですか？」「神様」「神が弓を持っている」。この押さえをした後、次の2行の読み取りに進み、西空に上がった金星を神の持つ矢に例えていることを確認した。そして、金星が果たして矢に見えるかどうか考えた。星印を黒板に書き「これが金星に見える？」と聞いた。圧倒的多くが「見えない」という声だった。「そう、僕自身も最初も金星が矢の例えに見えませんでした」と言った後、「でも、それが、やっぱり金星が矢だと実感した情景に出会ったんです」と、教材研究の項で記した7月に本校正門上空で見た三日月と金星の情景を絵で示したところ「（金星って）矢の先のことか！」という発見があった。「そう、三日月から放たれた矢がすごい勢いで飛び出したその先端の矢先が金星だったんです」と説明した。「これで分かったように、この2つの情景は、夕方の西空に弓と矢を持った神の姿を見たことを謡っています」とまとめた。最後に前半部分のイラスト（NHK『おはなしのくにクラシック』インターネット配信「アイヌ神謡集 おもろさうし」スライドをプリントアウト）を黒板に貼って具体的に情景をイメージさせた。

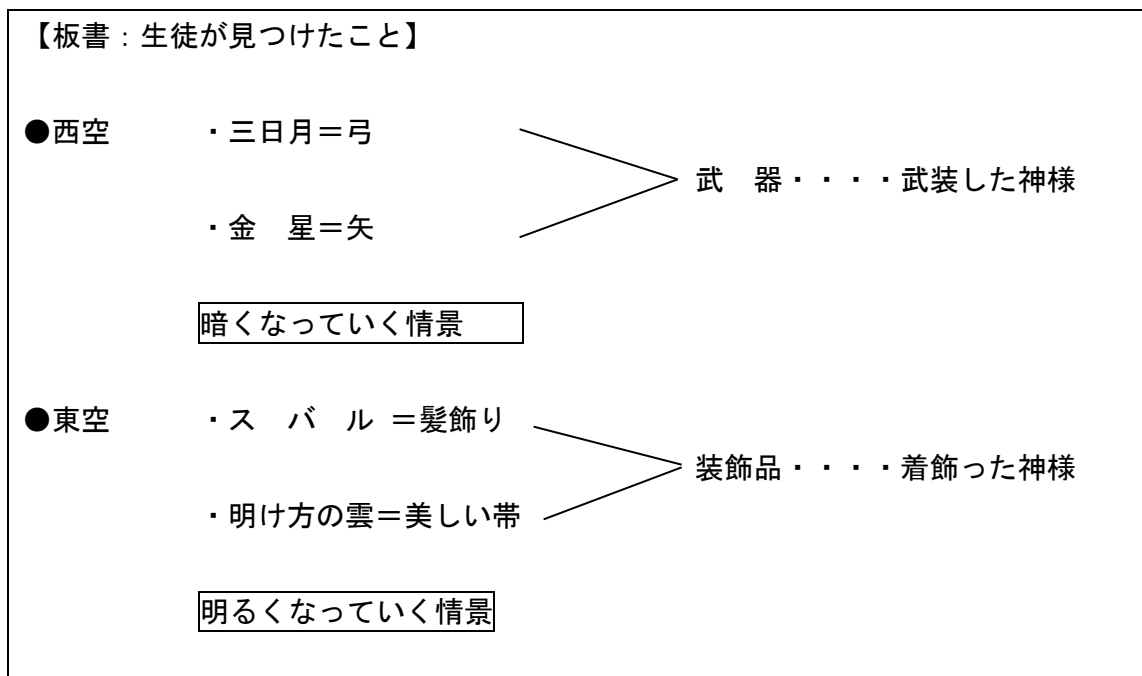
③ 第1段階の読みB：後半部分〈明け方の東の空〉のイメージ

「では、後半の4行ですが、大きく時間は過ぎ、これから明け方の情景になります」本来は、この情景がいつかは生徒の手で発見させたいところであるが時間の関係上、大きく場面が変わったことを提示し、2つの情景、スバルを神の髪飾りに、明け方の雲を神が締める美しい帯に例えたことを読み解いた。オモロ人がここにも神の姿を見ていることも確認した。そして、ここでも前半同様イラストを示した。

④ 第2段階の読み：対比〈夕方と明け方〉

「夕方の西の空と明け方の東の空を読み解きましたが、この二つを比べて分かることを書き出してみましょう」と場面の比較を指示した。「何を書くかわからない」と指示

内容が理解できない生徒もいたので「このオモロの中に出てくるものをまず書き出し、それから、夕方の空と明け方の空がどう違うかを考えてください」と補足した。



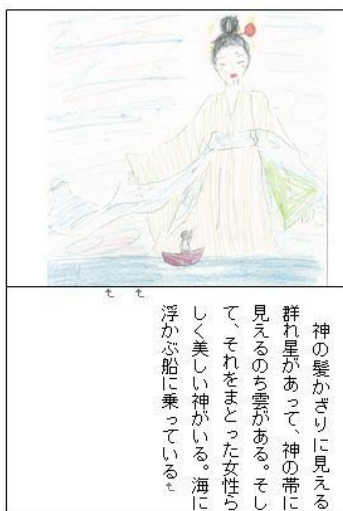
この比較から次の問いが生まれた。「夕方の西の空には武器を持った神様が登場し、明け方の東の空には美しく着飾った神様が登場したのはなぜでしょう」。生徒は、四苦八苦しなからこの問いについて考えた。漕行予祝や航海守護、そして沖縄の神や神祭りなど、宗教学・民俗学的な知識を学んでいない生徒にとって、この問いを考えることは不可能に近いと思われたが、興味深い考えが出された。

- （夕方の）西→男の神だから武装
 - 明け方→女神だから日の光をあびた時に美しくありたいと思ったから
- 夕方に武装した神がいるのは夜になるとあぶないから出るなっていくこと
 - 明け方に美装した神が出るのはもうあぶないから、働いていいよってこと
- ・西は太陽がしずんでくらくる
 - =くらくるということは戦いがおこる（戦争）
 - =武器をもって戦争がおこるから
 - =武器を持って戦う準備をしている
- ・ 東は太陽が上がる
 - =明るくなる（平和）
 - =明るくなるということはやさしいし、美しい
 - =東の神は美しい

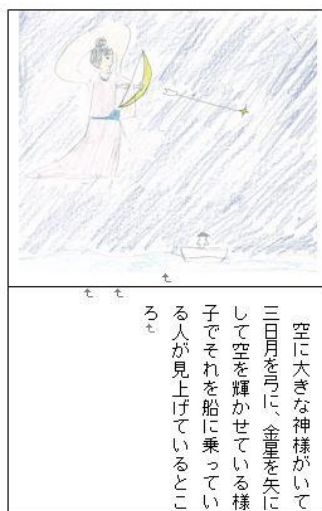
- (夕方) 戦争に行く前 戦争主義
(明け方) それを知らない戦争後 平和主義
- 西の夕方の空にはたたかう男の神さまがいる
東の明け方の空には自分の身なりをきれいにする女の神さまがいる
- 西の神は弓を放ち人の心臓をいつもねらう
東の神は女だからオシャレ好きで美しいもの好き
- 暗くなってから狩りの練習をし、明るくなってから着飾ってどこかに出かける
- (西の夕空に武装した神が見え、東の明け方空を見ると美しい衣服を着た神が見えるのは) 昔の人が考えた伝統だから
- 夕方の人は弱かったから武器がほしかったから 明け方の人は強かったからいらなかったから
- 夕方から暗くなって悪い人が出てくるようになるから身を守るように武器を持って、明け方から明るくなってみんなおきるから、神さまも美装する。
- 神様が何かうばいあっている。明け方になると神様がほしがっていた物が東の空にあらわれる
- 西の夕方の空 人々がねている時に町を守っている
東の明け方の空 美装して人々を見守っている

⑤ 第3段階の読み：絵で深めるイメージ

情景が徐々にわかってきたので、オモロを絵にすることで、生徒にさらに詳細なイメージをもたせることにした。これは内容理解の成果を絵にするのではなく、絵を描くことで、内容を深く考えることにねらいがある。詩歌を絵にする作業は情景をより具体的にイメージしていく学習なのである。



<Aベア>明方東空



<Aベア>夕間西空

「絵にするにあたってわかっていないと困ることはありませんか？」と投げかけたが、ゆっくり考える余裕がなく、若干の「はてな」に止まった。また、これを全員で検討する時間はないので授業者が回答した。「はてな」の例は次のとおりである。

- 「オモロの情景の場所はどこですか？」⇒「海の上



神様はヒマなので、夕方は狩りを楽しんで、明け方のちよい明るい時におしゃれして自分のくしや帯を見て満足している。
つまり、自分みがきをしてるんじゃないかな。

<Bペア>明方東空



夕方から明け方まで神が金弓と金細矢で戦いに行く。

<Bペア>夕闇西空



ちようど日がのぼるところをかきました。神様が(中略)海の上ののぼっている様子をかきました。神様は実際に見えてないけど「さし櫛」は神様のものだと思っただから神様はかいていません。「さし櫛」をかきました。

<Dペア>明方東空



神様が一人で立っている。
神様は太陽の光で反射している海の水を鏡に身だしなみを整えている。私の想像では神様同士が集まるため着かざっていると思う。

<Cペア>明方東空 <Cペア>夕闇西空



(前略)月に一度の美しい帯が表れ、美しいさくせが表れることから、月に一度西の神と東の神は出会っていた。東の神はおしとやかで、西の神は情熱的です。東の神の目は青い星、西の神の目は赤い星。二つの星はいつもつながっている。(後略)

<Fペア>明方東空



西の夕方の空で神が三日月の弓を使い金星の矢を何か遠くの敵に向かって力強く放っている。その様子を見ているかのように作者が歌を作っている。

<Eペア>夕闇西空

だと言われています」

- 「作者はこの場所にいますか？」⇒「作者を想像して描いてもいいです」
- 「神様の服装は？」⇒「着物でしょうか。でも、想像してどんな格好でもいいです」

等々であった。

絵は隣同士でペアになって描くことにし、夕方西空の絵を描く人、明け方東空を描く人に分かれて取り組んだ。描画の前に、イメージを膨らませるためにNHK『おはなしの国クラシック』『アイヌ神謡集 おもろさうし』の『おもろさうし』部分の視聴を行った。そして、絵を描く作業に入ったが、「神の顔わからん」「神の服装って何色?」「女神の着物の着方ってどんなん?」と描くにしがって「はてな」が出できたので、その都度ヒントを与えた。制作絵の作成途中でチャイムが鳴ったので、残りを宿題にして授業を終了した。

A～Fは、その絵の一部である。A・B・Cは、ペア同士の絵、D・E・Fは、ペアのどちらかのものである。絵に関しては、夕方西空・明け方東空に沖縄の人々は神様を見ていたということが分かる

ものにするというのを条件にした。絵の下段の文章は、情景についての短いコメントで

ある。これは鑑賞文にしたかったが、時間がなく、大部分宿題にしたのでコメント程度の文章になった。コメントの内容は、自分の絵の説明や神が空で何をしているのかの説明が多かった。中には、オモロの内容を自分の空想でつくりかえたものもあるが、オモロを通して想像を膨らませることも詩的発想を学ぶ上で許容されると判断して、そのままにしている。

(4) 振り返り

① 「はてな」の有効性

第1時に、全員で100前後の「はてな」を発見した。問いを持つことなしに学びは成立しない。今回の授業では、「はてな」を探すだけに終わってしまったが、本来はここから読みが出発する。生徒が見つけた「はてな」には、オモロの研究の重要なテーマと重なるものがいくつもあった。たとえば

- ・想像して書いた歌か見ている風景を書いた歌か？
- ・目を見た物か、脳で考えたのか？
- ・現実をもとにして作ったのか、空想か？

は、このオモロが当初叙景として解釈されたが、その後、実景ではなく漕行予祝の神祭り場を謡ったと解釈するに至った研究の最前線と響きあう問いである。今後、この「はてな」の解決のプロセスがオモロの読みのプロセスになるような授業の組み立てを考えていきたい。

② 3段階の読みの意義

第2時では、3段階の読みを行った。3段階の読みは、本来それぞれ1時間ずつ取り組むべき内容である。それを今回すべてを1時間に凝縮したため、生徒のイメージする内容が不十分なものになってしまった。各段階の読みがそれぞれ「萌芽状態」のままであったことは、このことに起因する。しかし、この3段階の読みの意義は明らかになったと判断している。

＜第1段階：情景をそのままイメージする＞

2行でひとまとまりの4つの情景に、オモロ人が神の装具を見ていたことをイメージする段階

- ★「三日月が神の美しい弓に見えた→空に神がいるのではないか」
「金星が矢に神の矢に見えた→神が弓から矢を放ったのか」

＜第2段階：情景の持つ意味を探る＞

4つの情景が、前半が夕方、後半が明け方に分かれることから、夕方と明け方の空を対比し、夕方の空の意味、明け方の空の意味を考えていく段階

- ★「夕方西の空には弓と矢で武装した神がいる」
「明け方東の空には美装した神がいる」

「それぞれの神は同じか別か？」

「それぞれの神の姿は何を意味しているのだろうか？」

※この段階では「なぜ、夕方に武装した神が登場し、明け方に美装した神が登場するのか」を考えさせたい。そのためには、考える足場となる知識をここで提示する必要がある。

＜第3段階：情景のイメージと意味を自分で再構成し作品理解を深める＞

第1・2段階で読み取った内容を絵に描いたり、文章で説明することで再構成し、その意味をさらに自分で深める段階

★「空の色は？」

「武装した神と美装した神の表情は同じか？」

「神の服装は同じか？」

「夕方、明け方それぞれ太陽は出ているか？」

※第3段階の読みは非常に重要である。自分で作品を再構成するために第1・2段階を設定すると考えてもよい。わかったイメージや意味を自分自身で表現する過程で「わかっていたつもりだったが、本当はここは不十分だった」とか「〇〇と考えていたが、実は△△と考えたほうがいいことがわかった」という具合に読みが深まっていくのである。今回は描画を宿題にして授業が終わってしまったが、絵を全員で鑑賞し「はてな」で内容を深めた上で、鑑賞文を書くという授業を行いたい。

③ オモロの情調：「ゑけ」に迫れたか

今回の授業の最大の課題は「ゑけ」に全く迫れなかったことである。生徒は第1時で「ゑけ」の文字や発音、そして意味に深い関心を抱いた。しかし、それを少しも深めないまま授業を終えた。米嵩の実践（米嵩・村上2013b）では『『ゑけ』は最後にいくにつれて感動が大きくなったり、①③⑤⑦⑨は、見つけた時の『あっ！！』という感動で、②④⑥⑧は、見つけたいろいろな物が何かにたとえられた時に感動というふうに分かれていたりしている」「Tさんの作品を見て、『ゑけ』を『あの美しい』と表現していて・・・」というように感動詞「ゑけ」を読みの中心において授業を進めた結果、「ゑけ」について深い読みができています。

筆者は、第1・2段階でその描かれた情景を見た感動に重点を置かず、対比によりその意味するところの違いを浮き彫りにすることに授業を焦点化しとした。そのため雄大な天空の情景や天体に神を見た感動を体感する学習を行えなかった。また、授業の最初には音読もしたが、音数律やオモロ語の持つ響きを味わうところまでいかなかった。これも3段階を1時間に凝縮してしまったことに起因している。今後は、オモロ語の持つ響きと感動を生徒の声に乗せて学ぶ授業を開発していきたい。

④ 沖縄の歌謡としてのオモロが読めたか：解釈の妥当性

沖縄に関する学習が十分ではなく、沖縄の歴史や風土の中で生まれた歌謡であるという認識を生徒が持つ学習を生み出すことができなかった。また、オモロの解釈を筆者自身の読みで行ったことは、オモロ研究の道筋から離れているという指摘を受けても仕方ない。「ゑけ 上がる三日月や」の解釈の到達点は、漕行予祝の神祭りの場で謡われたものであることだが、時間は夕方か明け方か決着に至っていない。これを前半部分＝夕方、後半部分＝明け方として解釈したことの妥当性が問われよう。この点については、このオモロを夕方と読むか明け方と読むか、また双方かを生徒自身で発見する授業過程をとることも検討すべきだと考えるが、結論は後日に期したい。

『おもろさうし』カリキュラム化のための整理

—試験授業の成果と課題—

- ・課題意識をもってオモロの学習に取り組むためには「はてな」が有効である。
- ・3段階の読みを行い、情景のイメージ・内容の分析・絵を描くことによる読みの深まりという学習過程をとる。
- ・そのためには単発の授業ではなく、単元学習を組む必要がある。
- ・歌謡としてのオモロの特色を考え、読みの学習を大切にする。
- ・社会科や総合の沖縄学習と連動した学習を行うことが望ましい。

(5) 『おもろさうし』単元学習プラン

試験授業を実施した結果、『おもろさうし』を学ぶには数時間の単元学習を組む必要があると判断した。そこで、試験授業の振り返りをもとに「ゑけ 上がる三日月や」の単元学習プランを提案したい。

『おもろさうし』入門的な学習プラン：1年生

1. 単元 『おもろさうし』との出会い —「ゑけ 上がる三日月や」を題材に—
2. 単元目標
 - オモロの世界を読み解き、沖縄の人々のものの見方や感じ方を知る。
 - オモロ語の特色やオモロに特有の比喻や反復表現などを知る。
 - オモロの読みを通し、イメージする力・対比する力・作品を再構成する力を育てる。
3. 学習の重点
 - 「はてな」により問いを持って読みを進める。
 - 3段階の読みによって情景をイメージし、情景の意味を考え、情景を再構成する。
 - 描画・解説文作成・群読を行い、言語活動によって読みを深める。
4. 学習の計画

時	学習活動	教師の働きかけ	評価活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ○「はてな」トレーニング ○「糸け上がる三日月や」音読 ○「はてな」探し ○『おもろさうし』説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・例文を使っての練習をする。 ・「糸け」の読み方を押さえる。 ・作品の説明はせず、謎のまま作業させる。 ・琉球王国と『おもろさうし』の意義を押さえる。 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>『おもろさうし』の特色を説明できたか。 <input type="checkbox"/>沖縄独特の自然表現を理解し、オモロを読み味わうことができたか。
2	<ul style="list-style-type: none"> ○第1段階の読み 分類した「はてな」表をもとに情景をイメージする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の「はてな」を各行ごとに整理し、「はてな」の問いを解いていくことで情景イメージができるよう工夫する。 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ○第2段階の読み ・「糸け上がる三日月や」背景説明 ・夕方西空と明け方東空を対比する。 ・夕方の神は武装し、明け方の神は美装して登場する意味を考える。 ○第3段階の読み① ・オモロを絵にするための「はてな」探しをする。 ・NHKおはなしのくにクラシック「アイヌ神謡集 おもろさうし」を視聴する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「琉球王国・航海・漕行予祝・神祭・弓矢・櫛帯等」などの知識をもとに、武装した神と美装した神の対比や意味考察を行えるよう工夫する。 ・次時に絵を描くことを予告し、絵を描くために必要な「はてな」を探す。 ・映像と朗読により沖縄のイメージを膨らませる。 ・映像と同じ絵にならなくても（ならない方が）よいことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>ヤマト古語、沖縄古語の特徴やリズムに注意して音読しているか。 <input type="checkbox"/>事物を対比して、その意味を考え、読みを深めることができたか。 <input type="checkbox"/>オモロの特徴をつかんで解説文を書くことができたか。
4	<ul style="list-style-type: none"> ○第3段階の読み② ・絵を描く 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に出了た「はてな」を解決し、それに基づき絵を描く。色鉛筆を使い、色彩豊かに描く。 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ○第3段階の読み③ ・絵を鑑賞する ・自分訳と絵画鑑賞文を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員の絵を黒板に貼る。そのうち数人の絵を「はてな」方式で鑑賞する。 ・絵の下段に自分訳と絵画鑑賞文を書く。 	

[2]まとめ：『おもろさうし』学習カリキュラムの構想

前節で、オモロの教材研究とそれに基づいて行った試験授業の成果と課題を整理した。そして、それを元に「ゑげ 上がる三日月や」の単元学習プランを提示した。今後、こうした試みを積み重ね、最終的に『おもろさうし』学習カリキュラムを創りあげたい。

今回の研究のまとめとして現段階での教材研究の上に立ったカリキュラムの素案を提案する。まず、教材として選択したオモロを提示する。これらのオモロは、『おもろさうし』教材論で取り上げたものを中心にして選択した。次にカリキュラムの全体構想を示した。カリキュラムは、1年：入門的な学習、2年：基礎的な学習、3年：発展的な学習で構成し、学習の領域は伝統的な言語文化とし、すべての学年で言語活動を取り入れた。

この素案は、まだまだ不十分なものであるが、今後行っていく本格的なカリキュラム検討のたたき台になれば幸いである。

1. オモロの選択

オモロ選択の基準に従って、選択したオモロは次の通りである。

＜ダイナミックな自然表現＞

「天に鳴響む」

「ゑげ 上がる三日月や」

＜土地と英雄の讃歌＞

「知花按司」

＜祈りとしての海の文芸＞

「吾がオナリ神の」

2. 『おもろさうし』カリキュラム素案

＜カリキュラムの全体構想＞

1. 単元名 『おもろさうし』の世界との出会い

○1年生：『おもろさうし』との出会い

○2年生：『おもろさうし』を読む

○3年生：『おもろさうし』を描く

2. 単元目標

○オモロの世界を読み解き、沖縄の人々のものの見方や感じ方を知る。

○オモロ語の特色やオモロに特有の比喩や反復表現などを知る。

○オモロの読みを通して、イメージする力・対比する力・作品を再構成する力を

育てる。

3. 学習の計画

○1年生＝入門的な学習

教材：ダイナミックな自然表現 「ゑげ 上がる三日月や」

○2年生＝基礎的な学習

教材：ダイナミックな自然表現 「天に鳴響む大主」

○3年生＝発展的な学習

教材：土地と英雄の讃歌 「知花按司」

祈りとしての海の文芸 「吾がおなり神の」

1年：入門的な学習

『新しい国語』1年での伝統的な言語文化の領域で扱われる教材は『伊曾保物語』『竹取物語』『矛盾』である。直接、『おもしろさうし』との関連を示すものはない。

1年生では、『おもしろさうし』の入門的な学習を設定する。入門的な学習では、生徒が『おもしろさうし』に興味・関心を持つような出会いが作れることを目的にする。「ゑげ 上がる三日月や」を題材に、『おもしろさうし』の存在を知るとともに沖縄オリジナルなダイナミックな自然表現と空に神を見るオモロ人の精神を読み解くことをめざす。

●単元名・教材名・時数 ◎学習目標	○学習活動 ★言語活動	評価規準
<p>●『おもしろさうし』入門 オモロ 「ゑげ上がる三日月や」 5時間</p> <p>◎『おもしろさうし』の存在とその特色を知る。</p> <p>◎オモロの表現的な特徴を知る。</p> <p>◎オモロに内容的な特徴を知る。</p> <p>◎絵画鑑賞文を書くことで読解力を高める。</p>	<p>1. 『おもしろさうし』とは何か</p> <p>○「はてな」トレーニング</p> <p>○「ゑげ上がる三日月や」音読</p> <p>○「はてな」探し</p> <p>○『おもしろさうし』説明</p> <p>2. 情景について考える</p> <p>○第1段階の読み</p> <p>○分類した「はてな」表をもとに情景をイメージする。</p> <p>3. 情景を対比し、情景に謡われた神について考える</p> <p>○第2段階の読み</p> <p>・オモロの背景説明</p> <p>・夕方西空と明け方東空の対比</p> <p>・夕方の神（武装）、明け方の神（美装）の違いを考える。</p> <p>4. 情景を絵にする。</p>	<p>□『おもしろさうし』の特色を説明できる。</p> <p>□沖縄独特の自然表現を理解し、オモロを味わうことができる。</p> <p>□ヤマト古語、沖縄古語の特徴やリズムに注意して音読している。</p> <p>□事物を対比して、その意味を考え、読みを深めることができる。</p> <p>□オモロの特徴をつかんで絵画鑑賞文を書くことができ</p>

	<p>○第3段階の読み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オモロを絵にするための「はてな」探しをする。 ・絵を描く。 ・絵を鑑賞する。 <p>★自分訳と絵画鑑賞文を作成する。</p>	る。
--	---	----

2年：基礎的な学習

『新しい国語』2年での伝統的な言語文化の領域で扱われる教材は『枕草子』『徒然草』『平家物語』『古典芸能』『漢詩』である。詩歌に、直接、『おもしろさうし』との関連を示すものはないが、『平家物語』「那須与一」の武者表現にオモロの英雄表現に関連するものがある（ただし、当該学年では英雄のオモロは扱わない）。

2年生では、『おもしろさうし』の基礎的な学習を設定する。教材は「ダイナミックな自然表現」のオモロを取り上げる。『おもしろさうし』の概説を中心に知識理解にも重点を置く。また、授業のまとめとして群読を取り入れ、歌謡としてのオモロを体感する。

●単元名・教材名・時数 ◎学習目標	○学習活動 ★言語活動	評価規準
<p>●『おもしろさうし』を読む 俳句 「むめがかに」 オモロ「天に鳴響む」 4時間</p> <p>◎『おもしろさうし』の存在とその特色を知る。</p> <p>◎俳句とオモロを比較し、ヤマトと沖縄の歌の特徴について考える。</p> <p>◎郡読を通してオモロの音・響きを体感する。</p> <p>◎鑑賞文を書くことで読解力を高める。</p>	<p>1. 俳句の太陽表現を考える ○「むめがかに」を音読し俳句の日の出イメージを読み解く。</p> <p>2. オモロの太陽表現を考える ○「天に鳴響む」を音読しオモロの日の出イメージを読み解く。</p> <p>3. 『おもしろさうし』の概説を行う ○日の出表現の比較を行い、『おもしろさうし』の特色を知る。</p> <p>4. 「天の鳴響む」の群読を行う。 ○「天に鳴響む」「あけもどろの花」「あれよ 見れよ」などから音やしぐさを発見し表現に生かす。</p> <p>5. 鑑賞文を書く。 ★「むめがかに」と「天に鳴響む」を比較し鑑賞文を書く。</p>	<p>□『おもしろさうし』の特色を説明できる。</p> <p>□沖縄独特の自然表現を理解し、オモロを読み味わうことができる。</p> <p>□ヤマト古語、沖縄古語の特徴やリズムに注意して音読している。</p> <p>□群読を通し、オモロのイメージをつかむことができる。</p> <p>□オモロの特徴をつかんで鑑賞文を書くことができる。</p>

3年：発展的な学習

『新しい国語』3年での伝統的な言語文化の領域で扱われる教材は『万葉・古今・新古今』『奥の細道』『論語』である。和歌に自然をテーマにしたものが含まれており、『おもろさうし』の自然表現との関連も考えられる。

3年生では、発展的な学習を設定する。教材は「土地と英雄の讃歌」「祈りとしての海の文芸」のオモロとし、1年生で行ったオモロを絵画化し絵画鑑賞文を書く学習を行う。1年生時より、内容理解と表現活動が深まることをめざす。

●単元名・教材名・時数 ◎学習目標	○学習活動 ★言語活動	評価規準
<p>●『おもろさうし』を描く オモロ「知花按司」 「吾がおなり神」 4時間</p> <p>◎オモロにおける土地と人物の形象の特徴を読み取り、沖縄の英雄の姿をイメージする。</p> <p>◎オモロにおける海と人と神との関係から、オモロ人の航海に関する思いを読み取る</p> <p>◎絵画鑑賞文の作成通じ、読解力を高める。</p>	<p>1「知花按司」を読み解く ○音読を通してオモロのリズムを味わう。 ○語句を調べ、主人公の形象を理解する。</p> <p>2「吾がおなり神」を読み解く ○「吾がおなり神」の音読を通して、オモロのリズムを味わう。 ○語句を調べ海の上の情景を理解する。</p> <p>3絵画鑑賞文を作成する ★二つのオモロから一つを選択し、絵画と鑑賞文を作成する。</p>	<p>□オモロにおける土地と英雄イメージを説明することができる。</p> <p>□オモロ表現の特徴をとらえて音読できる。</p> <p>□土地や英雄のイメージ、海と神と人との関係を理解して絵画鑑賞文を作成することができる。</p>

おわりに：まずは教材研究から

本研究は、琉球文学教材を古典学習カリキュラムに導入し、日本列島全体をカバーする古典文学カリキュラムを開発することを目的として出発した。しかし、はじめに記した経緯で、『おもろさうし』の概説と『おもろさうし』の教材研究、カリキュラムの素案検討へと研究を変更した。

この作業を通して、筆者は『おもろさうし』のカリキュラムを作成するためには、授業者自身が、オモロを読み込み、その教材研究を積み上げることの重要性を痛感した。私たち国語教師自身が『おもろさうし』のダイナミックな自然表現や英雄讃歌、海の文芸など世界にひたることからすべてが始まる。その上で『おもろさうし』と子どもたちをつなぐための教材研究を行い、実際に授業を行って、子どもたちとオモロを読み解く。そして、そこで明らかになった課題を整理する。こうした教材研究と授業実践を積み上げることが今後のカリキュラム化につながると考える。

今年度4月から始めた『おもろさうし』カリキュラム開発を進めながら、オモロを読み味わうには、その背景にある沖縄の風土と歴史を学び、南西諸島で生きた沖縄の神々や自然、オモロ人の精神を知ることの大切さも実感した。そのためには、沖縄の人々のオモロ研究や授業実践に学ぶことが必須である。『おもろさうし』カリキュラム化の道はまだ緒についたところである。

今後行うべきは、たくさんのオモロを読み込み、そして教材研究を行うことであることを銘記して稿を終えたい。

参考資料

本研究では、教材研究の事例として「ゑげ 上がる三日月や」を報告した。もう一首現在作成中の「天に鳴響む」の事例を紹介する（なお、完成したものではなく素描段階である）。



「天に鳴響む大主」の教材研究

<本文と語釈>

【本文】

- | | |
|---|--|
| 一 天に鳴響む大主
明けもどろの花の 咲い渡り
あれよ 見れよ清らやよ | 一 天地に鳴りとどろく大主よ
明けもどろの花が咲き渡っていく
あれ、見よ、なんと美しく雄大なことよ |
| 又 地天鳴響む大主
明けもどろの花の 咲い渡り
あれよ 見れよ清らやよ | 二 地天に鳴りとどろく大主よ
明けもどろの花が咲き渡っていく
あれ、見よ、なんと美しく雄大なことよ。 |

（巻13—851）

【語釈】

天・地天	天地のこと。第1節初句と第2節初句は対句になっている。
鳴響む	鳴り響く、とどろくの意だが、転じて名が鳴り響く、評判になる、名高くなるの意の美称辞としても使われる。
大主	国王、按司、太陽の尊称。このオモロでは太陽をさす。
明けもどろの花	「あけ」は「明け」、あるいは赤、転じて美しい意。 「もどろ」は「もどろ」で目がちらつき形象がはっきりしない状態をいう。「もどろ」は「もどろ」に通ずる。花は太陽を例えた語。
咲き渡り	太陽が水平線から出現する瞬間に放射する光の渦の様子を「明けどろの花の咲い渡り」と比喩にして表現した。
あれよ	感動した時に発する語。
見れよ	見よ。
清らよ	美しい。華やかに美しい様。

<学習のための解釈>

このオモロは、日の出の瞬間の太陽の美しさを謡ったものである。沖縄の日の出は、単なる朝の始まりではない。沖縄には「上り太陽どう拝むどう下り太陽や拝まぬ」という口承がある（比嘉1991）。これは、暁に昇ってくる太陽に生命力を感じて崇拝するが、夕空に沈む落日には死の予兆を見て拝まないという意味を持つ。

太陽は、夕方生命力を枯らせ、西の空に没して行く。そして太陽は、一晩かけて命を復活させ、テダの穴からその力を漲らせ、力強く、美しく再生する。その一連のイニシエーションの 때가 日の出なのである。村上（2011）は生命力あふれる日の出の情景を

●聴覚	「自然の神秘の全身的感受」	⇒	天に鳴響む大主
●視覚	「イメージの広がり」	⇒	明けもどろの花の 咲い渡り
●発声	「感嘆・呼びかけの声」	⇒	あれよ 見れよ 清らよ

という構造であると解釈して、授業を構想した。卓見である。以下、村上の解釈をもとに筆者なりの解釈を行っていきたい。

■聴覚：聞えない音を聞く幻聴の力■

冒頭で「天に鳴響む大主」と太陽の出現を告げる。琉球国王や地方按司を太陽（テダ）と讃える沖縄では、太陽に対して躍動や力強さ、生命の漲りを見ていた。太陽＝昼の世界の支配者の登場を力強く印象づける冒頭句である。体言止めの効果も高い。またこの「天に鳴響む」であるが、単なる太陽の美称辞ではなく太陽が天地を鳴り響かせて出現した轟音を表現したものと考えたい。実際の日出に音は伴わない。しかし、オモロ人は、そこに音、しかも鳴り響くような轟音を聞いたのである。単に耳で聞いたのではない。全身でその太陽の出現の轟を感じたのである。荘厳でかつ躍動感に満ちた太陽の躍動的な姿と音である。

益田（1968）は「祭の夜の終わりに、沖縄の巫女たちは、水平線のかなたから天に鳴り響もして上ってくる、太陽の大神の姿を拝したのだった」「さし上る朝日子に光と音のカオスを感じとるノロたちは、そこに神の姿をみ、大空の花を見る」と述べる。益田は続いて「ぬけ 上がる三日月や」を題材に、天空の月・星・雲とともに神を見出したオモロ人の視覚を「物を物そのものとしてみ、また、信仰の上でのイメージにおいてみる。二重構造の視覚、それは原始以来の眼であった。夜の視覚でもあった」ととらえた。オモロ人は、太陽を神と見る視覚とともに太陽出現の轟音を聞く聴覚を持っていた。益田は、この力を「幻視の眼ははりつめた心にささえられている。その眼に見えるもの以上のものを、幻視者の心は見ていた」と表現した。益田のいう幻視は、神の音を聴く力も包含しているといつてよい。本来聞こえない音とは、神の世界の音である。オモロ人にとって確かに太陽は神であったのである。

■視覚：太陽光イメージの広がり■

二句では「明けもどろの花の 咲い渡り」と太陽が、壮大にかつ細やかに表現される。「明け」は赤が原義だが、明るく美しい様子を表す。その美しい「明けもどろの花」が咲き渡るのである。明けもどろとは、形象がわからなきほどに渾然とした様子を表している。これは静的な描写ではない。きわて躍動的な描写となっている。花が次々と咲きだしているという躍動的な瞬間である。

日の出のプロセスを考えてみよう。星々の輝きに彩られていた漆黒の東の空が徐々に白みを帯びていく。空には紫だった雲が細く棚引いている。そして水平線に「かぎろい」が立ち現れる。その「かぎろい」の足元から曙光が洩れだし、太陽が徐々にその姿を現す。その瞬間に放射した光は海面にもきらめき、海の青とも混ざりながら美しい彩りをつくる。

この時間と空間を動的に描いたのが「明けもどろの花の 咲い渡り」なのである。しかし、これは目に現実に見えた情景ではないのかもしれない。オモロ人が曙に出現する太陽から幻視した情景だという解釈もできよう。まさに太陽が放射させる光のイメージの広がりである。

■発声：思わず洩れる感慨■

三句「あれよ 見れよ 清らよ」は聴覚から視覚へと広がってきた太陽の動き・イメージを全身で感受したオモロ人の口から洩れた感慨の声である。「ああ、見てごらん。なんて美しいのだろう。」この感慨は、美しいというヤマト語ではなく「清(ちゆ)らさ」いう沖縄語がまさにぴったりとくる。深い感慨の声である。太陽への最大級の賛辞である。

しかし、これを太陽に美を発見した人々の賛辞とだけ解釈してはならない。この感慨もクチウーユンの思想で読み解く必要がある。その視点からいうなら、この賛辞は生命力漲る太陽の存在への渴望なのである。これは、太陽の生命力を全身で感受したオモロ人の感動の声であるとともに、オモロ人の太陽の永遠の存続を願う祈りの言葉なのである。ここにオモロ人の感動と願いの二重構造を見ることができる。

<学習の重点>

○感覚にこだわり、かつ動的に読み解く

学習あたっては、このオモロを静的にとらえず、日の出の動きの中でダイナミックに読み解いていきたい。教材研究で明らかになった聴覚・視覚・発声というオモロの構造＝オモロ人の感動の展開に沿って読み取っていく。そのためには、日の出の太陽の形象をイメージできる画像を教材として導入することが効果的である。

○生徒が実感する発問をする

生徒が太陽のイメージをより広げられるように生徒の身にかかる発問をする必要が

ある。たとえば、「とよむ」をイメージさせるための「日の出とともに聞えてくる音楽や音の響きってどんな感じかな？」(村上2011)という発問はたいへん重要である。

○群読を通して読みを深める

朗唱される歌謡であったオモロの感動を生徒に追体験させ、その調べを現代によみがえらせるために群読が有効な方法である(村上2011)。そしてまた、群読を行うプロセスが、絵を描くことと同様、生徒の読みを深めることにつながる。

【引用・参考文献】

第1部 『おもろさうし』概説

- 第1部で引用したオモロ及び中山世鑑、琉陽の記事、琉歌は次のテキスト記載のもの
す。

波照間永吉 『放送大学「おもろさうし」の世界 講義テキスト』 2013年 a

『放送大学「おもろさうし」の世界 配布資料』 2013年 b

島袋盛敏・翁長俊郎 『標音標釈 琉歌全集』 武蔵野書院 1968年

諸見友重 『訳注 中山世鑑』 榕樹書院 2011年

- 第1部ので引用及び参考にした文献は次のものです。

池宮正治 「おもろの表現 適合調和する讃歌」『日本東洋文化論集』10所収 2004年
p. 1-35 琉球大学

島村幸一 『「おもろさうし」と琉球文学』 笠間書院 2010年

『コレクション日本歌人選56 おもろさうし』 和泉書院 2012年

仲松弥秀 『神と村』 梶社 1990年

波照間永吉 『南島祭祀歌謡の研究』 砂子屋書房 1999年 p. 989-999

同 「琉球文学に見る沖縄人の心性—琉球文学の固有性をめぐって—」『沖縄
芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』22 沖縄県立芸術大学
2010年 p. 171-184 a p. 171 b. 177

同 『「おもろさうし」からみた勝連と阿麻和利』『きむたかの翼 沖縄の中高
生の舞台「肝高の阿麻和利」構想からの軌跡』長崎出版 2011年 p. 92-98

同 「勝連のクニ」『おもろを歩く』琉球書房 2013年 p. 15-16

同 「今帰仁とオモロ」『おもろを歩く』琉球書房 2013年 p. 183-206

同 『放送大学「おもろさうし」の世界 講義テキスト』2013年 a

同 『放送大学「おもろさうし」の世界 配布資料』2013年 b

波照間永吉編 『琉球の歴史と文化—おもろさうしの世界—』角川書店 2007年

波照間永吉監修 『新編沖縄の文学 私たちの郷土の文学、琉球文学』沖縄時事出版 2008年

比嘉 実 「地方おもろの成立と周辺」『沖縄文化研究』4 法政大学沖縄文化研究所
1977年 p. 105-140

平山良明 「地方オモロへの視点と教材開発」『国語科教育』全国大学国語教育学会 1986年 a
p. 60-61

同 b p. 65

外間守善・西郷信綱編 『日本思想大系18 おもろさうし』岩波書店 1972年

外間守善編 『鑑賞日本の古典文学18 南島文学』角川書店 1976年

- 外間守善 『古典を読む22 おもろさうし』岩波書店 1985年
 外間守善校注 『おもろさうし』上下 岩波文庫 2000年
 村上呂里「単元 あけもどろの花～小学生によるオモロ群読の試み～」『沖縄発「伝統的な言語文化」の学びの創造』琉球大学「ことばの文化と学び」研究会 2011年 p.56-57
 柳田国男 『海上の道』 角川ソフィア文庫 2013年

第2部 『おもろさうし』カリキュラム構想・参考資料

○ 第2部・参考資料で引用した詩歌・オモロは次のテキスト記載のものです。

- 波照間永吉『放送大学「おもろさうし」の世界 講義テキスト』 2013年 a
 同 『放送大学「おもろさうし」の世界 配布資料』 2013年 b
 三角洋一・相澤秀夫ほか『新しい国語1・2・3』東京書籍 東京書籍 2012年
 新しい国語編集委員会『新しい国語1・2・3教師用指導書 研究編』東京書籍 2012年
 外間守善『おもろさうし』上下 岩波文庫 2000年 62

○ 第2部・参考資料で引用及び参考にした文献は次のものです。

- 大野晋ほか『岩波古語辞典』岩波書店 1982年 p.1203
 沖縄古語大辞典編集委員会『沖縄古語大辞典』角川書店 1995年
 伊波普猷「おもろ選釈」『伊波普猷全集』第6巻 平凡社 1980（初出1924）年 p.36-37
 黒島為一「星と風—『おもろさうし』第10巻の24の解釈をめぐって—」新沖縄文学 75
 1988年 p.132-150
 西郷信綱「オモロの世界」『日本思想大系18 おもろさうし』岩波書店 1972年 p.615-616
 島村幸一『おもろさうし』笠間書院 2012年 p.40-47
 関根賢司「天上幻視」『おもろさうし精華抄』1987年 ひるぎ社 p.158-166
 鳥越憲三郎『おもろさうし全釈』清文堂出版 1968年
 仲原善忠「おもろ新釈」『仲原善忠全集』第2巻 沖縄タイムス社 1977（初出1957）年
 p.184-185
 波照間永吉「琉球文学にみる沖縄人の心性—琉球文学の固有性をめぐって—」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』22 2010年 p.171
 平山良明「地方オモロへの視点と教材開発」『国語科教育』全国大学国語教育学会 1986年 a
 p.60-61
 同 b p.65
 比嘉 実「琉球王国・王権思想の形成過程」『古琉球の思想』沖縄タイムス社 1991年 p.55
 外間守善編『鑑賞 日本古典文学25 南島文学』角川書店 1976年 p.76-79
 外間守善『古典を読む22 おもろさうし』岩波書店 1985年 p.245-246

- 外間守善校注『おもろさうし』上下 岩波文庫 2000年 62
- 益田勝美「幻視—原始的想像力のゆくえ」『益田勝美の仕事2』ちくま学芸文庫 2006（初出1968）年 出1968）年 p.29-30
- 同 「古典の文学教育」『益田勝美の仕事 5』ちくま学芸文庫 2006（初出1967）年 p.221-222
- 村上呂里「単元 あけもどろの花～小学生によるオモロ群読の試み～」『沖縄発「伝統的な言語文化」の学びの創造』琉球大学「ことばの文化と学び」研究会 2011年 p.56-57
- 米嵩睦子・村上呂里「小学校におけるオモロ歌謡の教材化と授業—「ゑけ 上がる三日月や」を色紙にして表現して贈る—」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』20 2013年 a p.55-71
- 同 b p.67-68
- 山際 博「森鷗外『最後の一句』の教材研究と授業—冒頭部分の想像読み—」『研究集録いけだ』25 池田市教育委員会 2013年 p.76-80